九州大学「高等教育と学位・資格研究会」
ワーキングペーパーシリーズ №3

EQ Qualifications Education

大学教育における
職業統合的学習の社会的効用

── IR 枠組による「大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査」報告書 ──

（課題番号　25245077）

平成25～29年度 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ａ）

２０１６年２月

研究代表者　吉本圭一編

（九州大学第三段階教育研究センター）

はじめに

本書は、筆者ら九州大学「高等教育と学位・資格研究会」が開発したWeb卒業生調査システムを用いて、私立５大学の文系学部中心に共同IRとして実施された「大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査」における、調査方法論の開発経過と、その実施を通して得られたデータの分析報告を、本研究会ワーキングペーパー・シリーズNo.3としてまとめたものである。

本調査の原型となったのは、本研究会がその前の段階で実施した短期大学・専門学校対象のIR型卒業生調査（平成21～24年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）『非大学型高等教育と学位・資格制度に関する研究』（研究代表・吉本圭一、略称「EQ1科研」）による）である。この「EQ1科研」のWeb調査システムでは、職業分野をグルーピングし、17分野で設計・実施となったが、大学卒業生対象の今回は、参加大学学部の特色から、領域を観光、人文・ビジネスの「非資格系」と、福祉・保育、栄養の「国家資格系」の４分野に絞って、システムの開発と調査実施を行っている。

本調査システムの設計・開発は、２つの科研（平成25～29年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)『キャリア・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究』（課題番号：25245077）（研究代表・吉本圭一、略称「EQ2科研」）と平成23～25年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）『大学から職業への移行を促すインターンシップを軸としたキャリア教育研究』（課題番号：23330246）（研究代表・椿明美、略称「キャリア科研」））の共同によるものである。

IRをタイトルに掲げているように、卒業直後から卒後10年目までの初期キャリアの実態把握だけでなく、大学のステークホルダーでありサポーターでもある卒業生からみた大学教育・学習経験に対する点検・評価を調べ、そこで得られたエビデンスを大学や専門分野の自己理解向上に結びつける試みを行っている。そのため、本研究会では、調査の企画、調査票設計、ウェブ調査システムの開発を事務局が中心となって担当し、調査実施後は、それらの結果をもとに参加機関の教学担当者が協力し、共同IR・協働IRとして検討を行ってきた。この参加機関担当者相互の共同IR研究会は、「大卒IR参加機関研究会」として、実査の終了後から１年余りで計９回開催されている。各校のカリキュラム改善の実情や教育内容を分析データの結果とともに総合的に検討する研究会は、担当者相互のFDとしても有意義な取組となっている。また、卒業生調査の実施においては、参加機関の募集から調査設計・ウェブシステム開発、そしてその後の参加機関研究会の開催に至るまで、事務局として常に尽力してもらった江藤智佐子氏（久留米大学）には、今回の報告書の編集も担当いただいた。

末筆ではあるが、本調査にご協力いただいた卒業生のみなさん、参加機関担当者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げたい。本報告書が契機となり、調査研究から教育改善へと共同IRが展開し、IR研究がさらに次のステージへと発展していくことを願っている。

2016年２月

九州大学「高等教育と学位・資格研究会」
代表　吉本　圭一（九州大学　主幹教授）

本研究会の英語名称は “Seminar in Higher Education and Qualifications” とし、“Education” と “Qualifications” の頭文字をとって「EQ研」という略称を採用しています。

目　　次

Keyword : 職業統合的学習、大学教育、IR、卒業生調査、就職、キャリア、学習成果

はじめに …… 吉本　圭一

第１章　IR の課題と卒業生調査研究の方法 …… 吉本　圭一 …… 1

第２章　卒業生のみる大学教育の有用性と満足度 …… 吉本　圭一 …… 11

第３章　大学の教育指導と学生のエンゲージメント …… 椿　　明美 …… 19

第４章　職業統合的学習と就業観 …… 椿　　明美 …… 37

第５章　大学卒業後の初期キャリアとコンピテンシーの形成 …… 吉本　圭一 …… 47

終　章　総括にかえて …… 吉本　圭一 …… 79

資　料

１）アンケートシステム …… 83

２）ウェブ調査票 …… 85

３）基礎集計表 …… 117

第１章　IR の課題と卒業生調査研究の方法

吉　本　圭　一（九州大学）

１．調査研究のねらい

1-1. 研究の目的・課題

高等教育／第三段階教育における職業・社会への適切な移行支援の充実，そのための学修成果をもとにした教育プログラムの質保証のあり方が，多様な機関・プログラムの機能的分化への展望が，政策的・社会的にも注目されている。また，学習内容・方法の革新として，インターンシップなどのアクティブ・ラーニングや，より実践的な職業教育の方法の探究が，学術的にも実践的にも重要な課題となっており，とりわけインターンシップなどの職業統合的学習（work-integrated learning）の導入・普及が期待されている。

こうした課題に応じて，筆者が主宰する九州大学「高等教育と学位・資格研究会」（https://eq.kyushu-u.ac.jp/index.html，科学研究費や文部科学省委託事業を推進するための研究ネットワーク，九州大学先端的学術研究拠点としての第三段階教育研究センター内に事務局）では，科学研究費（基盤研究 A・課題番号21243044）「非大学型高等教育と学位・資格制度に関する研究」（平成21～24年度，研究代表 吉本圭一，以下「EQ1 科研」と略）の課題のもとで，非大学型高等教育にかかる，卒業生のキャリアの調査，教員調査，国内外の非大学型高等教育プログラムと教育制度の比較調査などの研究を実施してきた。

そして，この「EQ1科研」を踏まえて，2013（平成25）年度からは科学研究費（基盤研究 A・課題番号25245077）「キャリア・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究」（平成25～29年度，研究代表 吉本圭一，以下「EQ2科研」と略）として，非大学セクターにおける研究で解明された教育方法論と研究の方法論をもとに，非大学セクターと大学セクターを統合的に把握し，それ故，「高等教育」ないしその同義語としての「第三段階教育」という視点を明確に設定しながら，その機能的分化と質保証枠組みを巡る探究を進めている。

本報告書は，高等教育機関の教育改善から学生募集，卒業生の就職支援までの教育活動全般を点検し，評価・改善していく活動（IR：institutional research）を支援するために，「EQ1 科研」等で開発された卒業生調査 web システム(1) を応用し，「EQ2大学卒業生調査」として2013-14年度に実施した地方私立５大学の卒業生調査の結果をとりまとめている。本調査研究は卒業直後から10年目までの初期キャリア形成の実態を把握し，それと関連づけて卒業生の視点からみた母校在学中における教育・学習経験に対する評価を分析・検討するものである。

1-2. EQ2大学卒業生調査の概要

1-2-1.「EQ2科研」と「キャリア科研」による共同開発の web システム

本報告書で提示する地方私立５大学の卒業生調査では，卒業直後から10年目までの卒業生の初期キャリアの実態把握と大学教育の点検を行う。卒業生調査は，「大学から職業への移行」「初期キャリア形

成」という教育社会学的な学術的課題のための方法論というだけでなく，在学時の出身大学の教育・学習経験に対する，大学のステークホルダーでありサポーターでもある「卒業生からみた点検・評価」という実践的，政策科学的な高等教育論の課題に資するものでもある。吉本（2007）は，卒業生調査の目的として学術的アプローチと説明責任にかかるアプローチとを対比しており，本調査研究は後者のモデルを探究する。

卒業生にコンタクトすることは，各大学における自己点検評価ならびに各種の第三者評価において求められる卒業生からの意見の聴取そのものであり，直接にそうした評価対応の手段として重要である。しかし単に外的に要請される評価活動の対策として「手段化」した調査の使用というだけではなく，それを本来の点検から教育改善へのサイクルに如何に結びつけるのか，そのアプローチの可能性を探究することをここでは目指している。つまり，本調査研究は，卒業生調査を IR の一貫として活用する可能性，モデルの探究である。

1-2-2. 卒業生調査システムの原基としての欧米における IR としての卒業生調査

IR のコアとしての卒業生調査のモデルは，Weert & Vidal eds.（2005）において米欧の卒業生調査の動向レビューを行っている。個別機関 IR としての卒業生調査研究が米国で早くから普及しているとはいえ，それらの知見は学術的な形で今日広く公表されていない。研究的には，「カレッジインパクト研究」などすでに一定の参照規準となる過去の調査研究のストックがあり，適切な参照をそれぞれに利用し，本来の個別機関のアイデンティティ探究ができるとみられている。

これに対して欧州においては，卒業後の進路動向把握にかかる国家レベルでの政策的な観点からの把握が進んでいたが，個別機関での卒業生調査は米国と比較して十分に進んでいなかった。それが EU 統合を契機として，国際的な大規模で学術的な卒業生調査（CHEERS 調査：Schomburg & Teichler 2006，REFLEX 調査：Allen & van der Velden 2011 ）へと展開しており，それがその後の個別機関型 IR のための卒業生調査の参照規準となっているとみられる。

欧州のアプローチについては，日本労働研究機構・吉本編（1994）などの政策科学的な卒業生調査の経験を経て，学術的な卒業生調査のスタンダードの確立という課題を抱えて日本からも著者らの研究グループが参加しており（成果は吉本2001や吉本編2010など），本稿の検討対象とする協働参画 IR 型の調査研究事業のスタートにおいても，それらの調査システムへの参画経験とそのモデルが重要な参照となった。

1-2-3. 共同開発 web 卒業生調査システムと協働 IR

共同参画型の web 卒業生調査システムは，そうしたベンチマーキングによる参照規準を提供する確かなエビデンスの共有という意味で，IR にとって極めて有力な方法となる。日本の現状として，学生・卒業生その他のステークホルダーを調査し，そうしたエビデンスをもとに点検・評価がなされているのかというと，今日に至るまで必ずしも実質的な調査という点で普及を見ていない。吉本らの2009年度までの科研「EJ2科研」（基盤研究 A・課題番号17203041「企業・卒業生による大学教育の評価に関する日欧比較研究」）における2008年時点での調査によれば，在学生の授業評価はほとんどの大学が実施しているものの，卒業生調査実施大学は 4 分の 1 にとどまっている（稲永2009）。その後，多くの認証評価機関において第三者評価における「卒業生の意見聴取」という観点が明示されている。そう

した認証評価をクリアし，質の保証されている機関たる大学においては，個別に何らかの意見聴取がなされているはずである。しかし，問題は，それを適切に活用して教育改善へのサイクルへと展開させている事例・ノウハウが十分に蓄積・共有されているとはいいがたいという点である。確かに，卒業生からの意見聴取を量的に一定の信頼性あるものとして実施するためには，時間・経費的なコストが大きい。そのことが，卒業生調査への取組を躊躇させ，数名のインタビューなどの簡便な方法でその最低限の基準をクリアしているものが多いのかもしれない。

本調査研究では，＜共同 IR ＞として，共通の調査システムを用いながら，各大学関係者が，各大学や専門分野の個性に応じた項目開発を行い，卒業生調査の実施を進めている。その結果は卒業生を通した学修成果の質保証へのエビデンスを構築し，調査規模を大きくしないで最低限の点検・評価のハードルを適切にクリアする仕組みである。重要なのは，その延長として，適切なベンチマークが可能であるため，＜協働 IR ＞として，相互評価を通しての教育改善へのハードルへの挑戦が容易になっているという点である。

調査方法としては，本研究会が開発した web 卒業生調査システムを用いている。各大学が，対象となった卒業生に調査依頼を発行し，卒業生がそれに応じて各自 web システムにログインすることで，自記式回答が実施される方式をとっている。

この web 調査システムは，2012年度までに，「EQ1科研」ならびに，椿明美（札幌国際大学短期大学部教授）が研究代表を務めた科学研究費（基盤研究 B・課題番号23330246)「大学から職業への移行を促すインターンシップを軸としたキャリア教育研究」（平成23-25年度，以下「キャリア科研」と略）とが，短期大学・専門学校卒業生向けに共同で開発したシステムであり，それを2013年度からは「EQ2科研」と「キャリア科研」が引き継ぎ，四年制大学卒業生向けに改訂を施して実施している。

1-2-4. ５大学参加による共同 IR の試行の一環としての卒業生調査の実施

本調査研究においては，研究者グループが主体となって，単に卒業生調査を実施し分析するのみにとどまらず，むしろ，調査結果をもとにして参加機関関係者が相互に連携しつつ，教育改善につながる IR の研究，連携・協力の可能性の探究を目的としている。そのため全国の多様な大学の中でも，＜共同 IR ＞実施の主旨に賛同した地方私立５大学で試行的に実施することになった。

特に，大学の教育プログラムにおいては，学術性を強調するものや職業性を重視するものなど，各機関の歴史やミッションに応じて，また専門分野によって多様な焦点の置き方があるため，本調査研究においては，私立大学の人文・社会科学系分野を主対象として試行的なネットワークを編成することを目的とした。参加機関関係者と協議を行い，観光分野，人文・ビジネス分野の学部を持つ大学に協力依頼を行い，またそれぞれの参加大学内においても学部間での比較検討が必要であるため，参加大学に複数ある保育・福祉や栄養などの国家資格分野の学部も合わせて調査対象として設定した。

本報告書は，２つの科研の代表者である吉本と椿による，調査概要の紹介と各科研におけるハイライトのとりまとめとなっているが，本研究会では，現在このとりまとめと並行して参加各大学における自校のデータ分析と相互の比較のための活動が進行中であり，別途報告を準備している。

２．調査の方法と実施状況

2-1. Web 調査システムの特徴

調査方法は，参加機関の卒業生に ID を発行したあと，卒業生が各自ウェブサイトに ID とパスワードを用いてアクセスし，ウェブ上で30分程度のアンケートに回答する方式である。具体的な web 調査の回答の流れは，回答者に実際に与えられた「調査の流れ」の見本（図１－１）に準ずる形で各大学が設定し，卒業生に指示を与えている。

調査設計として，同じ内容の設問でありながらも，教育を受けた専門分野によって選択肢を別々に用意している。これは別途に実施した非大学型高等教育機関の訪問調査によるカリキュラム調査によって得られた知見をもとに，独自の「EQ 専門分野分類」（吉本2016）を設定し，その専門分野に応じた調査票を設計したものである。

他方では類似の専門分野間での比較の観点もまた求められるところである。このため一定の規模での専門分野のグルーピングが重要になり，全体としての比較可能性を確保していくというバランスを追求している。

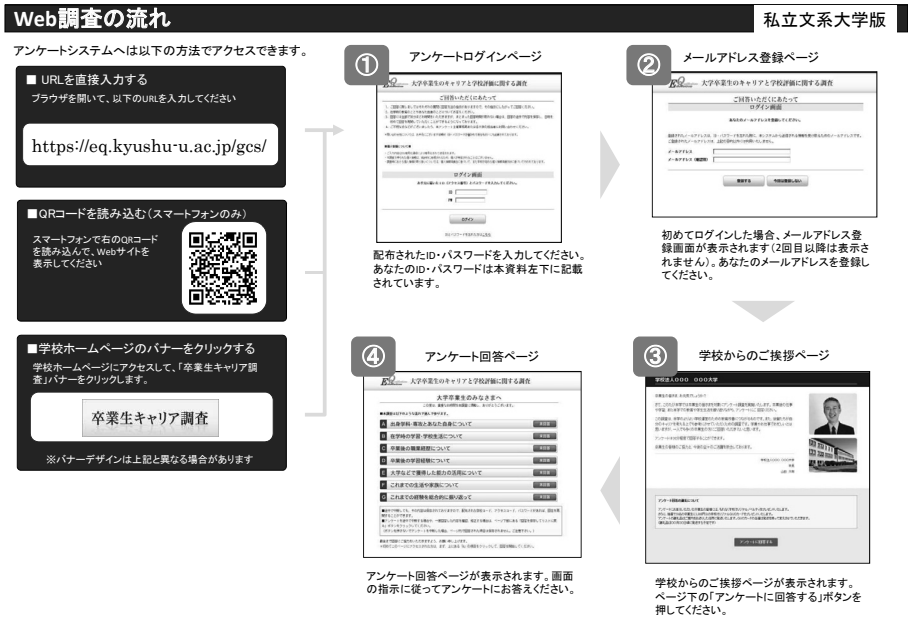


図１－１　Web 調査システムの流れ

結果的に，専門分野以外の観点も含めて，回答者の専門分野や属性，状況に合わせて該当項目のみ回答できるよう数多くの枝分かれを設計したところに本調査の特徴がある。たとえば，卒業生が各設問でのキャリアの分岐（進学か選択かなど）を選択していく都度に，web 上でそれ以後の設問の内容や用意される選択肢，場合によってはその順序まで異なってディスプレイ上に表示されていく構造になっている。従来の紙ベースの調査票であれば，これらは，あらかじめ膨大な枝分かれ質問群を作成し，あるいは調査票そのものを学校や専門分野，キャリアパターンごとにカスタマイズするなど，つまり調査票を分けて印刷するなどの方法で対応してきたものである。

これに対して，本 web 調査システムでは，それらが特段の大幅な追加コストを生じることなく，回答者個々人の教育やキャリアの形成・選択の流れに沿いながら質問とそれにふさわしい選択肢が提示

される。また設問の順序を少し離れた箇所の回答によって変えるなど，紙媒体では不可能な調整も実現可能となった。個人にインタラクティブに対応する調査システムが本 web 調査システムである。

調査項目は，A）出身学部・学科とあなた自身について，B）在学時の学習・学生生活について，C）卒業後の職業経歴について，D）卒業後の学習経験について，E）大学などで獲得した能力の活用について，F）これまでの生活や家族について，G）これまでの経験を総合的に振り返っての全７項目群から構成され，調査票から直接産出される指標数は510となっている。

「EQ1科研」での短期大学・専門学校用の非大学型調査から「EQ2科研」での大学型調査への改訂については，教育指導と学修成果の面で「グローバル」次元（特に第４章，第５章）を加えているほか，職業的能力の獲得と必要・活用（第５章）について，重要な枠組みの変更を行っている。短大・専門学校については，学科ごとに養成すべき仕事の範囲が一定程度自覚的に追究しているため，設問順序として，現在の仕事で「必要」とされている職業能力のリストを設定し，その必要度を質問している。その上で，それらの能力リストをどの程度「修得」しているのかという設問を配置している。これに対して，大学においては，人文・社会科学系の多くの分野で，想定される仕事の範囲が明確に設定されておらず，そのため仕事における「必要」能力を調査項目として設定することが困難だった。そこで，大学がそれぞれの分野で獲得を養成している能力（学修成果）項目リストに基づいて，現状での当該能力の「獲得」状況を質問し，その設問に引き続き，当該の能力項目が現在の仕事で「必要」とされているかどうかを質問することとしている（詳細については第５章参照）。

2-2. 調査実施の対象と実施

調査対象について，まず大学を選定したが，ここでは専門と職業が直接結びつきづらい人文・社会科学系分野に焦点をあてた。調査対象は，地方の私立文系大学５校に絞った。なぜなら調査だけでなく調査後の＜協働 IR ＞を視野に入れていたため，大学の調査対象校を抽出する際には，機関研究（IR）に理解を示し，調査設計段階から相互に意見交換を行うことが可能なことを条件としたからである。

専門分野は，「観光」，「人文・ビジネス」，「国家資格等（福祉・保育）」，「国家資格（栄養士等）」の４分野，計12学部17学科（１学部学科区分なしを含む）に絞り込んだ。2004年～2013年卒業生まで，卒業後１年目から10年目までの卒業生発送数は6,233である。調査期間は，表１－１のとおり，2013年12月～2014年７月であり，この間に，大学から少なくとも３回の卒業生へのコンタクト（督促ハガキなど）を行うことを科研調査実施事務局と各大学との合意のもとで実施した。有効回答数672であり，有効回収率は10.8％となっている。

調査概要は表１－１に示すとおりである。

表１－１　調査概要

調査時期	2013年12月～2014年７月
調査方法	Web 調査
調査対象	卒後１年～10年
調査機関数	５機関
発送数（ID 発行数）	6,233
回答数	730
有効回答数	672
有効回答率	10.8%

2-3. 分析の枠組み

この調査の基本的な枠組み焦点は大学におけるプロセス要因（大学からのカリキュラム・教育指導・学習環境，職業統合的学習の提供と，学生の正課・正課外での学習へのエンゲージメントや学生生活）がいかに卒業生の学修成果，初期キャリアとコンピテンシー形成というアウトカムに繋がっていくのかを検討するものである。調査項目としては，先行調査である「EQ1科研」の「卒業生のキャリアと学校評価に関する調査」をもとに，大学独自の設定を加味して全体の調査票設定を行っている。それらに関わる調査項目とその要因構造のモデルは，図１－２の通りである。

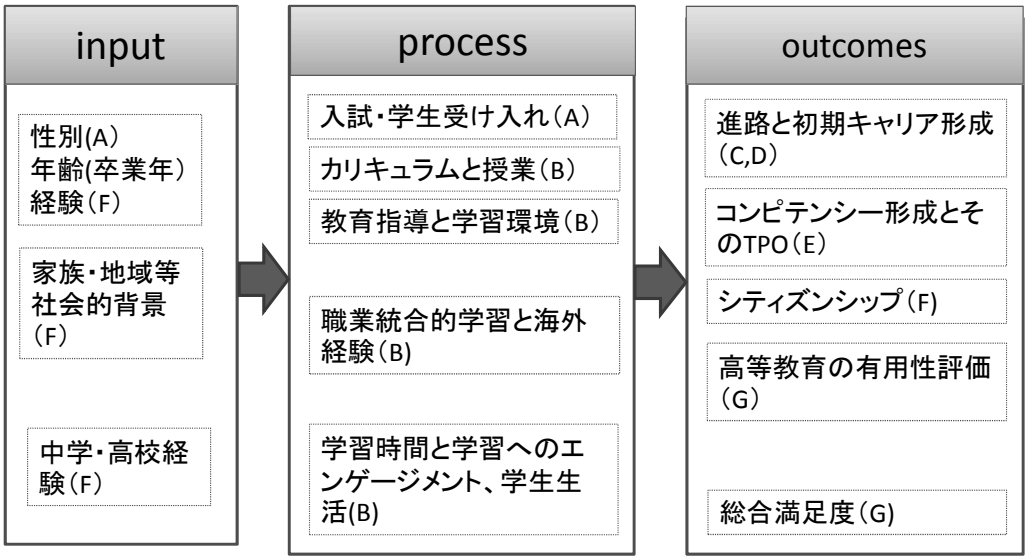


図１－２　調査設計と調査項目

2-4. 調査データの概要

本調査で分析するのは，一定数以上の項目に回答した有効サンプル647である。

性別では，表１－２のとおり男性45.1%，女性52.8%であり，それぞれ適切なサンプルを確保している。

表１－２　性別

	(%)	*n*
男性	45.1	*292*
女性	52.8	*355*
計	100.0	*647*

分野別の回答者の性別を示したのが，表１－３である。分野別には，専門養成領域としての「国家資格等（福祉・保育）」で86，非専門養成領域としての「観光」68，専門養成領域としての「国家資格（栄養・管理栄養）」57は専門分野間比較等に最低限の分析可能なサンプル数を得て，これに「人文・ビジネス」が436と大学間比較に十分なサンプル数を得ている。

表１－３　性別（分野別）

（%）

	男性	女性	計	*n*
観光	42.6	57.4	100.0	*68*
人文・ビジネス	50.5	49.5	100.0	*436*
国家資格等（福祉・保育）	38.4	61.6	100.0	*86*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	17.5	82.5	100.0	*57*
計	45.1	54.9	100.0	*647*

卒業年別には，表１－４に示すように卒業直後から卒業10年目まで，全体として卒業後経験年数ごとに一定数のサンプルが得られている。分析においては，複数の卒業年グルーピングした指標による分析を行うこととし，表１－４のとおり，「卒業３年まで」「卒業４～６年」「卒業７年以上」の３つの区分で分析している。

表１－４　卒後年数別一覧

	（%）		*n*
卒後０年	24.2		
卒後１年	7.0	卒後１－３年	*270*
卒後２年	5.9		
卒後３年	4.0		
卒後４年	18.6		
卒後５年	7.9	卒後４－６年	*219*
卒後６年	6.9		
卒後７年	8.1		
卒後８年	10.7		
卒後９年	6.3	卒後７－10年	*167*
卒後10年	0.3		
卒後13年	0.2		
計	100.0		
n	*656*		*656*

大学在学時の成績については，表１－５の通り５段階尺度で調査したが，成績下位のサンプルが少ないため上位，中位，下位の３段階に再コードしている。

表１－５　在学時の成績

	（%）		*n*
5 上の方	18.5	上位	*279*
4	28.5		
3	39.9	中位	*237*
2	8.2	下位	*78*
1 下の方	4.9		
計	100.0		
n	*594*		*594*

また，本人の基本的な資質に係るインプットの指標として，中学３年時の学業成績を質問しており，表１－６ではもともとの５段階評価と再コード化した３段階評価を示しておく。

表１－６　中学３年時の成績

	（%）		*n*
5 上の方	17.0	上位	*260*
4	31.1		
3	36.9	中位	*199*
2	9.6	下位	*81*
1 下の方	5.4		
計	100.0		
n	*540*		*540*

表１－７では，専門学科別の中学時成績の分布を確認しておくと，観光および国家資格（栄養）で中学時成績の上位者が多数を占めていることが明らかになっている。

表１－７　分野別中学３年時の成績（３カテゴリー）

（%）

	上位	中位	下位	計	*n*
観光	61.4	29.8	8.8	100.0	*57*
人文・ビジネス	45.4	38.7	15.9	100.0	*377*
国家資格等（福祉・保育）	44.3	34.3	21.4	100.0	*70*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	63.9	33.3	2.8	100.0	*36*
計	48.1	36.9	15.0	100.0	*540*

また，大学入学までのインプットに関わるものとして，高校の在籍学科を調べている。表１－８に示すように，普通科が大半を占めており，専門学科出身者は9.2%（50サンプル）となっている。総合学科については分析のための十分なサンプル数は確保できなかった。

表１－８　高校時代の在籍学科

（%）

	計
普通科	83.6
専門学科	9.2
総合学科	3.5
その他	3.7
計	100.0
n	*544*

2-5. 本報告書の構成と分析の焦点

本報告書では，以下第２章で，大学教育の社会的効用としてのアウトカムおよびその評価を扱う。ここでは，総合的な満足度ならびにそれに関わる項目間の関連を検討し，総合的な満足度指標の位置づけを確認する。つづいて，第３章では，大学生活における授業・カリキュラム等に関わる経験を把握するが，ここでは「大学による教育の充実」と「学生の大学へのエンゲージメント」との２要因群に分けてその相互の影響関係を含めた学修成果への因果モデルの検討を行う。さらに第４章では，インターンシップなどの職業統合的学習（WIL）に焦点をあてて，進路・キャリアの形成への重要な経路としての検討を行う。第５章では，卒業後の経験として，就職，特に専門関連分野への就職やその後のキャリア形成を分析するとともに，獲得している能力（コンピテンシー）とその職業生活への必要，市民生活への活用の状況を検討する。

各章の構成を示したのが，図１－３である。

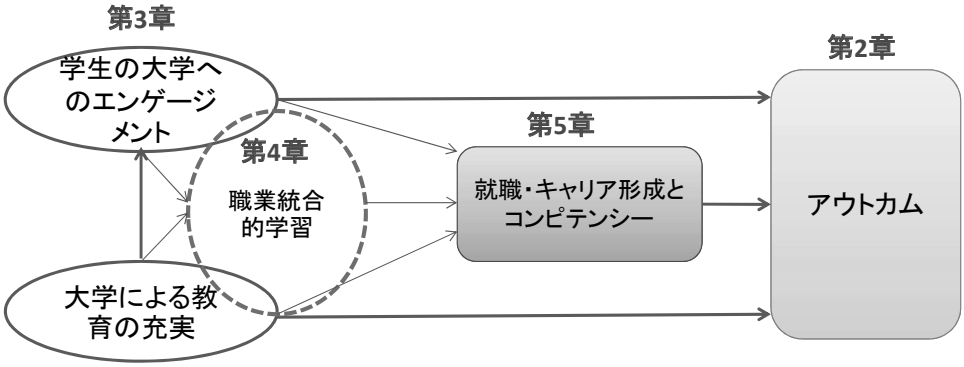


図１－３　各章の構成

〈注〉

（１）　九州大学「高等教育と学位・資格研究会」の HP 上に概要（https://eq.kyushu-u.ac.jp/gcr.html）を示しており，また吉本（2015）を参照。

〈参考文献〉

Allen, J. arul van der Velden, R eds.（2011）“The Flexible Professional in the Knowledge Society - New Challenges for Higher Education”, Springer

稲永由紀（2009）「大学学部における卒業生調査の活用－全国学部悉皆調査から－」吉本圭一編『卒業生・企業を通した大学教育の点検・評価に関する日欧比較研究』，九州大学，48-57頁

日本労働研究機構（吉本圭一編）（1994）『大学就職指導と大卒者の初期キャリア（その２）－35大学卒業者の就職と離転職』調査研究報告書，No.56

Schomburg, H. and Teichler, U.（2006）“Higher Education and Graduate Employment in Europe: Results from Graduate Surveys from Twelve Countries”, Springer.

Weert, D.J. & Vidal, J. eds.（2005）“Enhancing Alumni Research – European and American Perspective”, San Francisco, Jossey-Bass.

吉本圭一（2001)「大学教育と職業への移行－日欧比較調査結果から」,『高等教育研究』，第４集，113-134頁

吉本圭一（2007）「卒業生を通した「教育の成果」の点検・評価方法の研究」大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第５号，75-107頁

吉本圭一編（2010）『柔軟性と専門性－大学の人材養成課題の日欧比較」，広島大学高等教育研究開発センター『高等教育研究叢書』第109号

吉本圭一（2015）「職業統合的学習と学習成果－短期大学・専門学校卒業生調査より－」『短期大学コンソーシアム九州紀要』vol.5，5-14頁

吉本圭一（2016）「第三段階における職業教育をめぐる専門分野分類と研究課題」吉本圭一編『第三段階教育における職業教育のケーススタディ』九州大学「高等教育と学位資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ No.2，1-18頁

第２章　卒業生のみる大学教育の有用性と満足度

吉　本　圭　一（九州大学）

１．大学教育に対する卒業生の総合的満足度

1-1. 評価指標としての大学教育の有用性と満足度の把握について

大学教育に対する評価として，個々の，大学のカリキュラムや教育指導，学習環境，そして学生自身の学習へのエンゲージメントと学生生活経験など，大学生活の諸側面については第３章以下で検討するが，本章ではそれに先立ち，そうした教育の成果についての総合的な評価指標群を検討する。ここでは，特に大学教育の有用性と総合的満足度をとりあげる。

評価指標の検討においては，吉本（2004）で考察しているように，卒業後一定のキャリアを経験することで，学修成果の有用性を認識し，また適切に活用できるという「大学教育の遅効性」モデルを踏まえて，卒業生の初期キャリア形成段階での，中長期的な効用の検討が必要である。そこで，本章では，学修成果の有用性と総合的な満足度についての評価指標を提示するとともに，卒業後の経験年数との関連での傾向を検討しておきたい。

「大学教育の遅効性」については，吉本編（2010）でも，欧州諸国との対比の中で確認されており，「大学教育の効果は卒業直後ではなく，遅く現れる」という日本的な大学教育と初期キャリア形成の特色が明らかになっている。すなわち，学卒者の仕事における知識・技能の有用性は，要求される仕事のレベルによって左右され，卒後年数が長くればなるほど仕事の内容とレベルが上がり，在学中に獲得した知識・技能が適切に役に立つ機会が増え，有用性は高まるのである。

このような説明は，OJT やジョブローテーションを基盤にした人的資源開発や，大卒者の昇進は見込まれているがそのスピードが遅い，などの日本的なアプローチと整合している。しかし，このモデルが，大学以外の非大学型機関を含めた高等教育全体に適用しうるのかどうか，短期大学基準協会（2005）の傾向なども踏まえて，稲永・吉本（2013）は複数の卒業生調査をも検討した結果，短大・専門学校に関しては教育の遅効性モデルが適用しにくいこと，むしろ卒業時の教育の移行への適切性にも拘わらず，その後の初期キャリア形成の段階で否定的な評価に変わっているのではないかとの結論を示している。

また，1990年代後半からは，経済界における雇用三層化モデルの提言（日経連1995）において日本的経営の特徴であった長期継続雇用の範囲を限定していく方向性が示され，また現実に非正規雇用等が急速な拡大を示しており，他方で大学教育のユニバーサル化傾向も合わせて検討してみると，大学卒業生の雇用管理が企業によって，また企業単位でも一枚岩であるとは想定しにくい状況が広がっている。

本章では，大学教育の効果発現のプロセスやその場面として，以下の図２－１のモデルを設定し，卒業後の年数との関連での検討を行う。

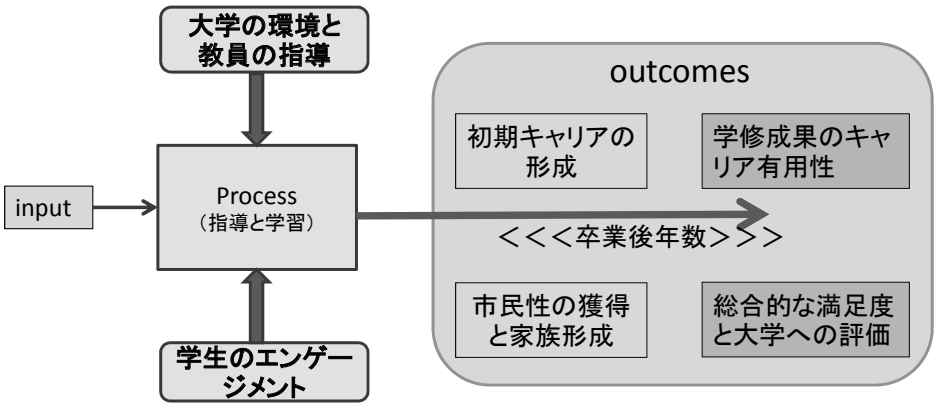


図２－１　第２章の要因枠組み

1-2. 総合的な満足度と専門分野間の差異

総合的に振り返って自校の満足度をみてみると，表２－１に示すように，多くの卒業生が５件法での満足度の高いほうから「５ とても満足している」が29.7%，「４」が38.7%であり，両者を合計すると68.4%が満足しているとみることができる。

これを専門分野別に見ると，「国家資格等（福祉・保育）」の卒業生の86.0%が満足していると回答している。次に満足度が高いのは，「国家資格（栄養・管理栄養）」の79.0%であり，この分野も国家資格等を目標として人材養成を行う学部である。「観光」や「人文・ビジネス」などと比較して，目的が明確な学部学科で学んだ学生が大学教育に満足しているとみることができるのかもしれない。

他方，「観光」は満足度が最も低く，卒業生の57.2%，６割弱しか満足と回答していない。「人文・ビジネス」も65.8%で国家資格系の学部・学科との開きが大きい。国家資格取得を目指す学部学科とそうでない学部学科の満足度の違いは明瞭である。なお，本調査での専門分野は極めて大括りであるため，「国家資格等（福祉・保育）」といっても，福祉学科や子ども心理学科など，個々の学科のもつ専門分野特性がどの程度影響しているのか，本サンプルの範囲で詳細な分析は難しい。本調査は参加機関相互による調査結果を用いたIRを引き続き実施しているため，各大学でのIR分析の中で分野の特性や学部学科の内容などを考慮した検討が課題となるであろう。量的データで得られた傾向は，＜協働IR＞の中で，他の指標等と突合させていく中で検討していくこととなろう。

表２－１　大学教育の総合的な満足度（分野別）

（%）

	5 とても満足している	4	3	2	1 とても不満である	計	*n*
観光	28.6	28.6	31.0	11.9	0.0	100.0	*42*
人文・ビジネス	26.6	39.2	25.6	7.5	1.0	100.0	*293*
国家資格等（福祉・保育）	45.6	40.4	14.0	0.0	0.0	100.0	*57*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	31.6	47.4	15.8	5.3	0.0	100.0	*19*
計	29.7	38.7	24.1	6.8	0.7	100.0	*411*

1-3. 卒年別にみる満足度の変化

大学教育の満足度の傾向を卒年別にみるために，表２－２では，卒業後の年数で３グループに分け，５件法の回答を機械的に１から５までの得点として平均スコアで示した。

表２－２　卒年別満足度の平均値（分野別）

		平均値	標準偏差	*n*
観光	卒後３年まで	4.13	0.81	*16*
	卒後４－６年	3.36	1.08	*14*
	卒後７－10年	3.64	1.12	*11*
	計	3.73	1.03	*41*
人文・ビジネス	卒後３年まで	3.90	0.92	*136*
	卒後４－６年	3.75	0.98	*91*
	卒後７－10年	3.76	0.93	*63*
	計	3.82	0.94	*290*
国家資格等（福祉・保育）	卒後３年まで	4.07	0.70	*15*
	卒後４－６年	4.61	0.50	*18*
	卒後７－10年	4.29	0.78	*21*
	計	4.33	0.70	*54*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	卒後３年まで	3.86	0.69	*7*
	卒後４－６年	4.71	0.49	*7*
	卒後７－10年	3.25	0.96	*4*
	計	4.06	0.87	*18*
計	卒後３年まで	3.93	0.88	*174*
	卒後４－６年	3.88	1.00	*130*
	卒後７－10年	3.84	0.84	*99*
	計	3.89	0.94	*403*

「観光」と「人文・ビジネス」では卒業後３年目までの若年卒業生の方が，より年長の卒業生よりも大学教育に対し高い評価をする傾向が見られる。他方，「国家資格等（福祉・保育)」では，卒業後４年目をこえるより年長の卒業生の方が，若年卒業生より高い満足度となっている。なお，「国家資格(栄養・管理栄養)」についてはむしろ中間層が高いという点で，「国家資格等（福祉・保育)」と類似した傾向を示している。

これは，吉本（2010）の Reflex 日欧大卒者調査等で明らかにされてきた「大学教育の効用の逓増傾向」，短大・専門学校調査で明らかになってきた「ガラスの天井」としての「効用の逓減傾向」のいずれの先行研究の知見とも直接対応しておらず，これらの仮説で解釈することは難しい。国家資格系と非資格系の教育と労働市場でのキャリアの関係性の違いなど，分野の特徴を考慮すべきであるのかもしれない。

２．18歳時点の進路選択を振り返っての機関と専門分野の評価

2-1．18歳進路の再選択可能性としての母校と出身専門分野の評価

吉本（2007，2010，2011）に代表されるように，これまでの卒業生調査でも多く使われてきた「母校への愛着や評価」を測る設問として，「18歳時点の進路選択を振り返っての機関と専門分野の評価」がある。本調査でも，仮想的な設問として，18歳時点に戻り再度進路選択ができる場合，自校や現在の専門分野を選択するかと尋ねたところ，表２－３に示すように進学就職や学校種の選択に関して，「本学を選ぶ」という比率は，全体では54.5％と二人に一人は再度，当該大学を選択したいと回答していた。この回答から，一定の母校の教育やそこで獲得したものへの肯定的な評価があることがうかが

える。

他の志向性を見ると，「他の４年制大学」が48.0％と大きな割合を占めており，さらには「専門学校進学」が12.6％あった。専門学校を志向するということは，現在獲得している大学の学歴よりも短い学歴を希望していることになる。大学よりも短い学習期間の専門学校を選択すれば良かったということは，大学の学歴よりも他の希望が強かったことを示しているものと考えられる。大学教育に満足できなかったのか，職業教育の方が大学教育に勝ると考えているのか，回答者の理由をさらに検討する必要があるだろう。なお，他には「短大進学」希望は1.1％，「就職など」が5.6％であった。

表２－３　18歳時点での再進路選択の志向性（分野別）

（複数回答，％）

	本学を選ぶ	他の四年制大学に進学	専門学校に進学	短期大学に進学	就職，自営など仕事をしたい	その他	計	*n*
観光	50.0	44.4	18.5	3.7	11.1	3.7	100.0	*54*
人文・ビジネス	55.4	49.6	11.3	0.3	4.7	1.6	100.0	*379*
国家資格等（福祉・保育）	58.6	35.7	15.7	2.9	7.1	4.3	100.0	*70*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	42.9	60.0	11.4	2.9	2.9	2.9	100.0	*35*
計	54.5	48.0	12.6	1.1	5.6	2.2	100.0	*538*

「本学を選ぶ」比率をさらに専門分野別に見ると，「国家資格等（福祉・保育）」が最も高く58.6％，続いて「人文・ビジネス」が55.4％である。逆に低いのは，同じく資格系の「国家資格（栄養・管理栄養）」で60.0％が「他の４年制大学」を希望している。ただし，専門分野というよりも，個別の大学の総合的な評価にかかる問題であるのかもしれない。

表２－４に示すように，同じく専門分野についてみると，むしろ「国家資格（栄養・管理栄養）」は同じ分野を希望しており，先の傾向と合わせて，同じ分野の他大学の方が良かったと評価する卒業生が多いことがわかる。これに対し，「観光」分野では，「今の仕事に対応した」他の専門分野18.4％，「今の仕事とも出身専攻とも異なる」他の専門分野30.6％と，半数近くが出身専攻分野以外を学びたいと回答している。先の設問においても「観光」は，専門学校希望者が一定数いたため，分野・学校ともに評価が高くない者が相当数いることが明らかになっている。

表２－４　18歳時点における進路再選択での専門分野に対する志向性（分野別）

（％）

	本学で学んだのと同じ専門分野がよい	本学で学んだこととは違うが現在の仕事に合うような専門分野がよい	本学で学んだことや今の仕事とは関係しない別の専門分野がよい	よくわからない	計	*n*
観光	46.9	18.4	30.6	4.1	100.0	*49*
人文・ビジネス	48.4	16.4	28.8	6.3	100.0	*347*
国家資格等（福祉・保育）	50.0	21.9	25.0	3.1	100.0	*64*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	57.1	5.7	31.4	5.7	100.0	*35*
計	49.1	16.6	28.7	5.7	100.0	*495*

2-2. 総合的な満足度と18歳での進路再選択可能性評価との関連

では，18歳時点での進路再選択に対する志向性と大学教育への満足度にはどのような傾向が見られるのだろうか。18歳時点の再帰的な進路選択の傾向と大学評価の満足度を示したものが表２－５である。

この結果を見ると，再帰的な進路選択可能性評価は，総合的な満足度と明瞭に対応していることば

分かる。すなわち，再度「本学を選択する」という学生は，総合的な満足度では「５とても満足している」が44.7%あり，または次の評定の「４」も同様であり，合計で89.4%と高い満足度になっていた。これに対し，「他の４年制大学」など他の進路を選択する場合においては，「５とても満足」の比率は20%以下にとどまっている。

表２－５　18歳時点の進路再選択と満足度

（%）

	5 とても満足している	4	3	2	1 とても不満である	計	*n*
本学を選ぶ	44.7	44.7	10.2	0.5	0.0	100.0	*215*
他の四年制大学に進学	16.4	37.0	34.9	10.1	1.6	100.0	*189*
専門学校に進学	14.8	42.6	29.6	13.0	0.0	100.0	*54*
短期大学に進学	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	100.0	*5*
就職，自営など仕事をしたい	17.4	47.8	21.7	13.0	0.0	100.0	*23*
その他	20.0	40.0	40.0	0.0	0.0	100.0	*5*

３．大学教育の効用の諸側面

3-1. 大学教育の職業・キャリアにかかる効用

卒業生は，大学教育が職業や将来のキャリアを展望する上で，どの程度役立ったと考えているのだろうか。職業・キャリアに対する大学教育の効用を分野別に示したのが，表２－６である。

表２－６　職業・キャリアに対する大学教育の効用（分野別）

		就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	人格を形成していく上で
観光	平均値	3.69	3.60	3.46	3.65	3.87
	標準偏差	1.13	1.03	0.95	1.00	1.04
	n	*54*	*55*	*54*	*55*	*55*
人文・ビジネス	平均値	3.44	3.32	3.22	3.31	3.84
	標準偏差	1.26	1.19	1.15	1.15	1.04
	n	*381*	*377*	*378*	*378*	*380*
国家資格等（福祉・保育）	平均値	3.94	4.08	3.94	3.82	4.06
	標準偏差	1.07	0.98	1.04	0.97	0.82
	n	*72*	*72*	*71*	*72*	*72*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	平均値	3.95	4.46	4.27	3.84	4.03
	標準偏差	1.27	0.87	1.10	1.19	0.93
	n	*37*	*37*	*37*	*37*	*37*
計	平均値	3.57	3.53	3.41	3.45	3.88
	標準偏差	1.24	1.18	1.16	1.13	1.01
	n	*544*	*541*	*540*	*542*	*544*

職業・キャリアに関わる大学教育の効用観を専門分野別に比べると，どの側面についても，「国家資格（栄養・管理栄養）」が大学教育の効用をもっとも高く評価していた。次いで，「国家資格等（福祉・保育）」が高い評価となっていた。これに対して，「人文・ビジネス」がもっとも低く，「観光」も同様の低さとなっている。国家資格系の学部学科は，職業やキャリアを展望する上で，大学時の教育を有

用と捉えているが，非資格系の学部学科の学生は，職業やキャリア展望に大学教育が有用と捉えていなかった。国家資格系の学部学科には，職場や現場での実習がカリキュラムに組み込まれていることも影響しているのだろうか。

また，表２－７に示すように，卒業年数による差異を見てみると，大学教育の長期的な効用の逓増傾向は見られなかった。「就職先を見つける上で」の項目では，一部の分野では「卒業４－６年」の方が効用感が高いなどの例外はあるものの，多くの側面で，卒業直後の方が評価が高い傾向があり，むしろ効用の逓減傾向がみられた。

表２－７　職業・キャリアに対する大学教育の効用（卒年別）

			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	人格を形成していく上で
観光	卒後３年まで	平均値	3.77	3.95	3.76	3.95	4.05
		標準偏差	1.07	0.84	0.89	1.00	0.95
		n	*22*	*22*	*21*	*22*	*22*
	卒後４－６年	平均値	3.76	3.35	3.41	3.41	3.88
		標準偏差	1.25	1.17	0.94	0.80	1.05
		n	*17*	*17*	*17*	*17*	*17*
	卒後７－10年	平均値	3.36	3.40	3.13	3.47	3.60
		標準偏差	1.08	1.06	0.99	1.19	1.18
		n	*14*	*15*	*15*	*15*	*15*
	計	平均値	3.66	3.61	3.47	3.65	3.87
		標準偏差	1.13	1.04	0.95	1.01	1.05
		n	*53*	*54*	*53*	*54*	*54*
人文・ビジネス	卒後３年まで	平均値	3.57	3.45	3.29	3.49	3.93
		標準偏差	1.17	1.13	1.13	1.08	0.99
		n	*176*	*174*	*175*	*175*	*175*
	卒後４－６年	平均値	3.50	3.26	3.18	3.21	3.79
		標準偏差	1.29	1.25	1.19	1.18	1.06
		n	*121*	*120*	*119*	*119*	*121*
	卒後７－10年	平均値	3.04	3.16	3.14	3.05	3.68
		標準偏差	1.35	1.19	1.10	1.17	1.09
		n	*81*	*80*	*81*	*81*	*81*
	計	平均値	3.44	3.33	3.22	3.30	3.83
		標準偏差	1.26	1.18	1.14	1.14	1.04
		n	*378*	*374*	*375*	*375*	*377*
国家資格等（福祉・保育）	卒後３年まで	平均値	3.84	4.21	4.05	4.00	4.21
		標準偏差	0.96	0.86	0.91	0.94	0.71
		n	*19*	*19*	*19*	*19*	*19*
	卒後４－６年	平均値	4.09	4.17	4.13	3.87	4.22
		標準偏差	1.08	1.11	1.18	1.14	0.80
		n	*23*	*23*	*23*	*23*	*23*
	卒後７－10年	平均値	3.96	4.00	3.79	3.68	3.84
		標準偏差	1.17	1.00	1.06	0.90	0.94
		n	*25*	*25*	*24*	*25*	*25*
	計	平均値	3.97	4.12	3.98	3.84	4.07
		標準偏差	1.07	0.99	1.06	0.99	0.84
		n	*67*	*67*	*66*	*67*	*67*

			就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	人格を形成していく上で
国家資格（栄養士・管理栄養士）	卒後３年まで	平均値	3.71	4.57	4.57	4.07	4.00
		標準偏差	1.59	0.85	1.09	1.27	0.96
		n	*14*	*14*	*14*	*14*	*14*
	卒後４－６年	平均値	4.29	4.53	4.18	3.82	4.24
		標準偏差	1.05	0.87	1.19	1.19	0.90
		n	*17*	*17*	*17*	*17*	*17*
	卒後７－10年	平均値	3.60	4.00	3.80	3.40	3.40
		標準偏差	0.89	1.00	0.84	1.14	0.89
		n	*5*	*5*	*5*	*5*	*5*
	計	平均値	3.97	4.47	4.28	3.86	4.03
		標準偏差	1.28	0.88	1.11	1.20	0.94
		n	*36*	*36*	*36*	*36*	*36*
計	卒後３年まで	平均値	3.62	3.63	3.47	3.61	3.97
		標準偏差	1.17	1.12	1.15	1.09	0.96
		n	*231*	*229*	*229*	*230*	*230*
	卒後４－６年	平均値	3.68	3.51	3.42	3.38	3.90
		標準偏差	1.26	1.27	1.23	1.16	1.03
		n	*178*	*177*	*176*	*176*	*178*
	卒後７－10年	平均値	3.28	3.39	3.29	3.24	3.69
		標準偏差	1.31	1.17	1.10	1.14	1.06
		n	*125*	*125*	*125*	*126*	*126*
	計	平均値	3.56	3.53	3.41	3.44	3.88
		標準偏差	1.24	1.18	1.16	1.14	1.01
		n	*534*	*531*	*530*	*532*	*534*

3-2. 総合的な満足度とそれぞれの効用観との関係

大学教育はどのような側面で評価されているのだろうか。総合的な満足度と各側面での効用観を相関係数で示したのが表２－８である。

この結果をみると，いずれの側面でも，効用観の高さと満足度とは強い優位な相関がみられた。特に「将来のキャリアを展望する上で」大学の効用を感じている者ほど，総合的に母校の教育に満足していることがわかる（.522)。その「将来展望」と比べた場合に，「仕事で必要な学習を続けていく上での効用」という観点は，満足度との関連が相対的に低いとも言える（.418)。

また，18歳時点の進路再選択についても，「本学を選ぶ」と回答した者は満足度が高い（.492)。それに対し，「他の四年制大学に進学」を希望した者は満足度が最も低くなっている（-.329)。

表２－８　総合的な満足度と効用感との関係

	就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で	本学を選ぶ	他の四年制大学に進学	専門学校に進学
Pearson の相関係数	0.437**	0.432**	0.420**	0.418**	0.522**	0.492**	-0.329**	-0.128**
有意確立（両側）	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.010
n	*409*	*407*	*406*	*409*	*409*	*411*	*411*	*411*

〈参考文献〉

稲永由紀・吉本圭一（2013）「高等教育修了者の初期キャリアにおける仕事と教育の有用性－大学と非大学型高等教育機関との比較を通して－」『短期高等教育研究』vol.3，1-8頁

短期大学基準協会（2005）『短大卒業生の進路・キャリアと短大評価』

日本経営者団体連盟（1995）『新時代の「日本的経営」』

吉本圭一（2004）「高等教育と人材育成－「30歳社会的成人」と「大学教育の遅効性」－」，高等教育研究所紀要『高等教育研究紀要』第19集，245-261頁

吉本圭一（2007）「卒業生を通した「教育の成果」の点検・評価方法の研究」大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第５号，75-107頁

吉本圭一編（2010）『柔軟性と専門性－大学の人材養成課題の日欧比較－』高等教育研究叢書，第109号，広島大学高等教育研究開発センター

吉本圭一（2011）「短大教育における総合評価」，小方直幸編『大学から社会へ』玉川大学出版部，353-367頁

第３章　大学の教育指導と学生のエンゲージメント

椿　　明　美（札幌国際大学短期大学部）

１．研究の目的と方法

1-1. 研究の目的と分析の枠組み

大学の教育指導と学生のエンゲージメントについてここでは検討したい。大学が提供している教育や指導と学生のエンゲージメントは，アウトカムすなわち学生の満足度にどのような影響を与えているのだろうか。これらの関係について，本章では図３－１に示すような分析を行うことにする。

まず，学生の大学へのエンゲージメントを探究してみたい。「学習時間」，「在学時の出席と成績」，「多面的なエンゲージメント」としては学生自身の授業や活動への取り組み度合（熱心に取り組んだか）はどのようであったかを分析する。

次に，大学における教育の充実を検討する。「授業の充実」，「カリキュラムと教育支援」つまり，授業の教育手法の充実はどうであったのかを，学生のエンゲージメントと対比しながら検討していきたい。

これらの結果を踏まえ，学生のアウトカム，「総合的に見て大学に満足しているか」という満足度への回答と「学習時間」，「在学時の出席と成績」，「多面的なエンゲージメント」との相関関係，および，同満足度と「授業の充実」，「カリキュラムと教育支援」との相関関係を見ることで，大学への満足度を規定する学校生活とは何かを分析する。

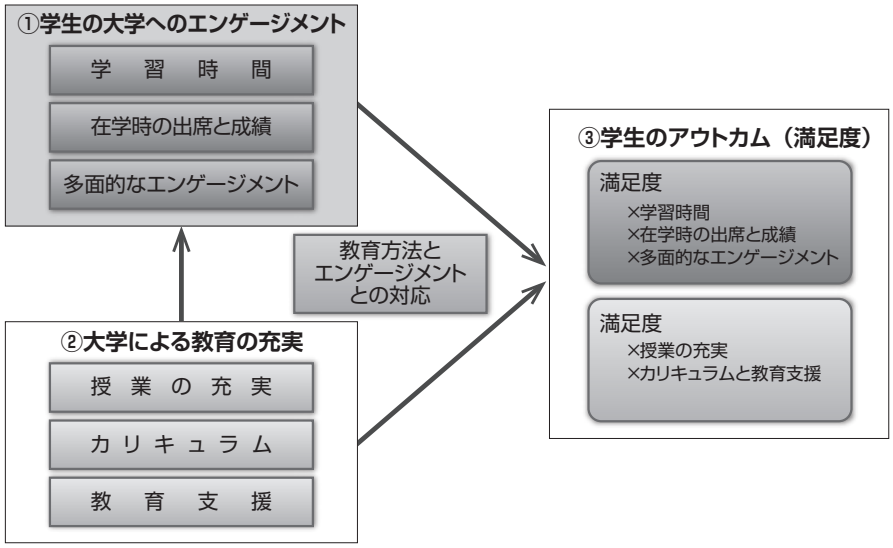


図３－１　分析の枠組み

1-2. 大学教育と学生のエンゲージメント

大学教育の質保証が問われる中，学生のエンゲージメントが注目されるようになった。小方（2008）は，アメリカにおけるエンゲージメント研究を整理する中で，学生の能力獲得や成績等のアウトカムを規定する決定的な要素は，学生個人のエンゲージメント，すなわち学生の学びへの取組・関与であ

るとする（Pascarella and Terensini, 2005）先行研究等を提示し，さらに，葛城（2006）の教育の成果は，どういう教育を提供するかより，実際に学生がどういう学習を行ったかに規定される点で日米が整合的であるとしている。

また堺（2015）は，学生のエンゲージメントを規定する要因として，学生生活の充実は，「教育満足」と「学生間交流」が強く影響するとし，教員の学生に対する関与の仕方がこれらを高めることに繋がると示唆している。

そこで本研究ではこれらの研究成果を援用し，学生のエンゲージメントを授業や活動に対する関わりとして，学生の大学の授業や活動への取組状況と教育機関が用意している教育プログラムや教育方法・指導の充実の観点から大学生活への満足度との相関関係を分析することとする。分析方法としては，「観光」，「人文・ビジネス」，「国家資格（福祉・保育）」，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の４分野において，その差異を探り特徴を見てみることとする。

２．大学での学習と成績

2-1. 在学時の学習時間

学生達は在学期間中，授業以外の時間でどの程度の学習時間を確保していたのだろうか。表３－１に示すように「授業以外での学習時間（授業期間中）」の学習状況で「ほぼ毎日勉強をしていた」と回答した割合（５＋４の計）をみると，「観光」17.5%，「人文・ビジネス」19.2%，「国家資格（福祉・保育）」15.5%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」29.7% で「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が最もよく勉強していた。また，反対に「授業以外ほとんど勉強しなかった」（１＋２の計）をみると，「人文・ビジネス」が46.8％で授業以外の勉強をしていないことがわかる。

分野別の学習時間の特徴として，「人文・ビジネス」は授業以外で勉強をしない者が半数近くおり，反面，毎日勉強をするのは２割弱である。また，「観光」も「人文・ビジネス」に近い傾向がみられた。

授業以外の時間もよく勉強する「国家資格（栄養士・管理栄養士）」，あまり勉強時間を確保していない「人文・ビジネス」と「観光」というように，分野別の特徴が学習時間に現れている。

表３－１　授業以外での学習時間（授業期間中）

（%）

	1 授業以外はほとんど勉強しなかった	2	3	4	5 授業以外でもほぼ毎日勉強していた	計	*n*
観光	20.6	23.8	38.1	14.3	3.2	100.0	*63*
人文・ビジネス	21.7	25.1	34.0	14.3	4.9	100.0	*406*
国家資格等（福祉・保育）	17.8	16.7	50.0	11.1	4.4	100.0	*90*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	12.8	12.8	44.7	19.1	10.6	100.0	*47*
計	20.3	22.8	37.6	14.2	5.1	100.0	*606*

2-2. 授業への出席状況

授業への出席状況に分野別の特徴はみられるのだろうか。表３－２のとおり，「授業への出席」について４段階尺度で尋ねたところ，単位認定にかかわる１「欠席は1/3以上」，２「欠席は1/4くらい」，

3「欠席は1/5」，そして４「ほとんど出席」の割合をみると，「ほとんど出席」は，「観光」の74.6%，「人文・ビジネス」の65.0%，「国家資格（福祉・保育）」の72.2%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の82.6%であった。

「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が最も高く，授業以外の勉強の時間を確保し，授業にもほぼ出席している。「人文・ビジネス」は授業以外の学習時間の確保は最も低く，授業出席率も低い傾向にあることがわかる。

表３－２　授業への出席

（%）

	1　欠席は1/3以上	2　欠席は1/4くらい	3　欠席は1/5以下	4　ほとんど出席	計	*n*
観光	1.6	4.8	19.0	74.6	100.0	*63*
人文・ビジネス	2.2	10.3	22.4	65.0	100.0	*406*
国家資格等（福祉・保育）	3.3	6.7	17.8	72.2	100.0	*90*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	0.0	6.5	10.9	82.6	100.0	*46*
計	2.1	8.9	20.5	68.4	100.0	*605*

2-3. 在学時の成績

分野別の在学時の成績はどうであったのだろうか。表３－３に示すように，在学時の成績を５段階で回答してもらった。成績が「上の方」だった５＋４の計を成績上位者としてみると，「観光」が59.3%，「人文・ビジネス」48.9%，「国家資格（福祉・保育）」40.2%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」26.7%であった。

成績上位の割合が最も高かったのは，「観光」で６割近くの者が上位と回答していた。逆に，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の成績は「下の方」と答えた割合が４割近くであり，成績上位者も３割に満たなかった。「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は，授業以外の学習時間が最も長く，出席状況もほぼ出席するなど勉強熱心であることがうかがえるが，成績に関しては，厳しい評価がくだされているようである。

表３－３　在学中の成績

（%）

	1 下の方	2	3	4	5 上の方	計	*n*
観光	1.7	3.4	35.6	35.6	23.7	100.0	*59*
人文・ビジネス	2.2	8.9	40.0	29.5	19.4	100.0	*403*
国家資格等（福祉・保育）	6.9	8.0	44.8	27.6	12.6	100.0	*87*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	28.9	8.9	35.6	11.1	15.6	100.0	*45*
計	4.9	8.2	39.9	28.5	18.5	100.0	*594*

３．大学での授業の特徴

3-1. 教育プログラムの充実

在学時の大学での教育プログラムはどのように充実していたのか。１「全く充実していなかった」，５「とても充実していた」の５段階尺度で答えたものを項目ごとに見てみる。

3-1-1. 高校までの基礎学力を学び直す授業や指導

高校までの学習を学び直す授業や指導が充実していたかを尋ねたところ，図３－２に示すように「充実していた（４＋５）」と回答した者が26.9％と約４分の１いる。反対に「充実していなかった（１＋２）」と回答したのが27.1％，また約半数は，高校での学習の学び直しについてどちらでもないという回答をしている。

3-1-2. 大学での学習方法を学ぶ授業

次に，レポートの書き方など大学での学習方法を学ぶ授業が充実していたかをみると，図３－３に示すように「充実していた（４＋５）」が44.3％で，半数近くの学生が大学での学習方法を授業等で受講する機会に恵まれていたことがわかる。

3-1-3. 知識を広げ教養を身に付ける授業

知識を広げたり教養を身に付けたりする授業の充実度はどうだろうか。図３－４に示すように，「充実していた（４＋５）」と回答したのは70.5％と高く，グラフでも明確であるように，知識を広げ教養を身に付ける授業は充実傾向にある。「充実していなかった（１＋２）」は4.5％と僅少である。

3-1-4. 外国語を修得するための授業

図３－５に示すように，外国語を学ぶ授業の充実度は，「充実していた（４＋５）」は39.2％と約４割。「充実していなかった（１＋２）」は21.8％であった。

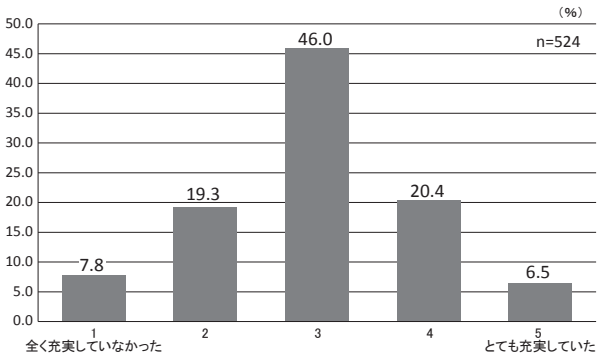


図３－２　高校までの基礎学力を学び直す授業や指導

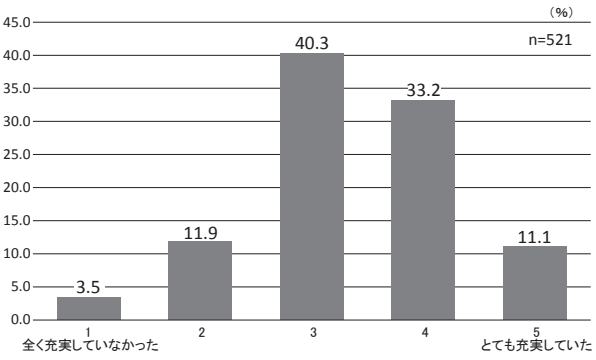


図３－３　大学での学習方法を学ぶ授業

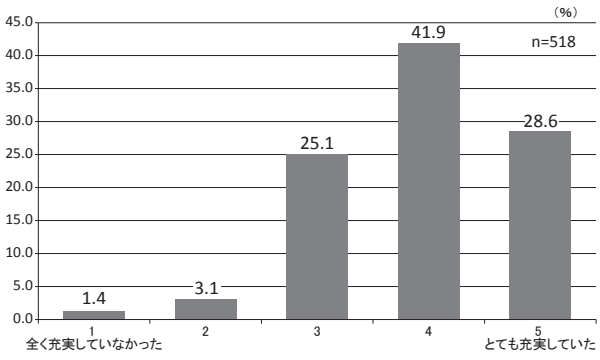


図３－４　知識を広げ教養を身に付ける授業

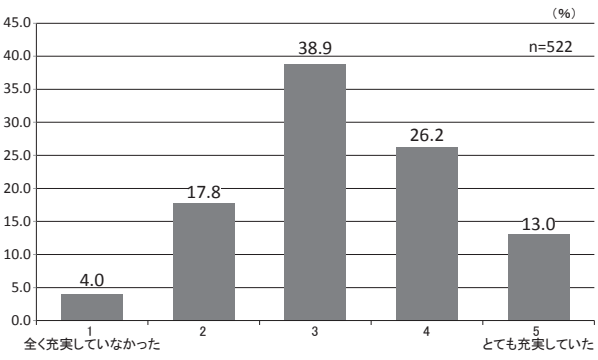


図３－５　外国語を習得するための授業

3-1-5. 専門の授業（講義や演習）

大学での専門の授業の充実度はどうだろうか。図３－６に示すように，「充実していた（４＋５）」との回答は75.6％と高く，反面「充実していなかった（１＋２）」は3.9％であり，大学の専門の授業は充実度が高いことがわかる。

3-1-6. インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験

大学が用意したインターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験の状況はどうであったかを図３－７で見てみると，「充実していた（４＋５）」との回答は，35.8％，「充実していなかった（１＋２）」は27.7％であった。

3-1-7. 資格取得に関わる準備・指導

次に，資格取得に関わる準備や指導について図３－８で見てみると，「充実していた（４＋５）」は53.2％で，「充実していなかった（１＋２）」は18.2％，半数以上が「充実していた」と捉えている。

3-1-8. 卒業論文，卒業制作，卒業発表

卒業論文，卒業制作，卒業発表についてどう見ていたかを図３－９で見ると，「充実していた（４＋５）」は61.7％で，「充実していなかった（１＋２）」は14.0％であった。専門の授業に続き，６割以上が「充実していた」と捉えている。

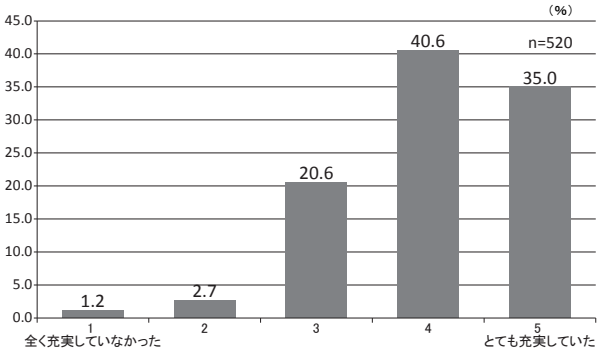


図３－６　専門の授業（講義や演習）

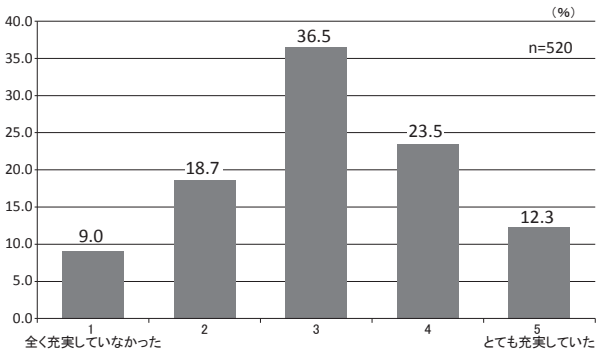


図３－７　インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験

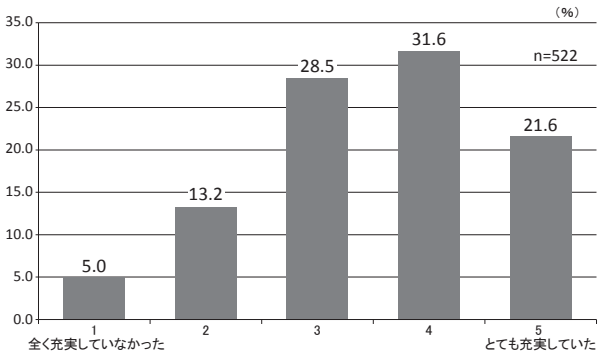


図３－８　資格取得に関わる準備・指導

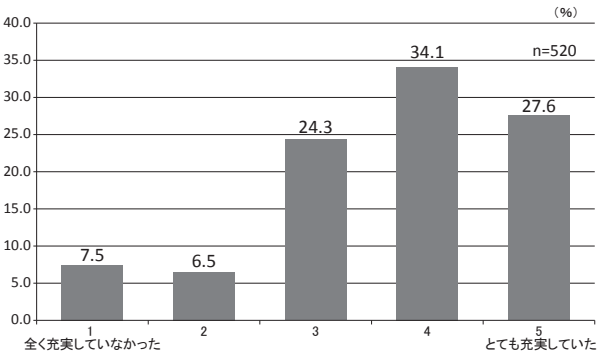


図３－９　卒業論文、卒業制作、卒業発表

3-1-9. 海外研修や留学のための機会や指導

海外研修や留学のための機会や指導について図３－10で見ると，「充実していた（４＋５）」は25.2%，「充実していなかった（１＋２）」は37.1%で，本調査10項目の中で，充実してないと捉えている者が最も多いことがうかがえる。

3-1-10. 研究室・ゼミでの授業や活動

研究室・ゼミでの授業や活動について図３－11が示すように，「充実していた（４＋５）」は66.2%，「充実していなかった（１＋２）」は9.9%であった。研究室・ゼミでの授業活動に関しては，７割近くが「充実していた」と捉えており，卒業生から評価されていることがわかる。

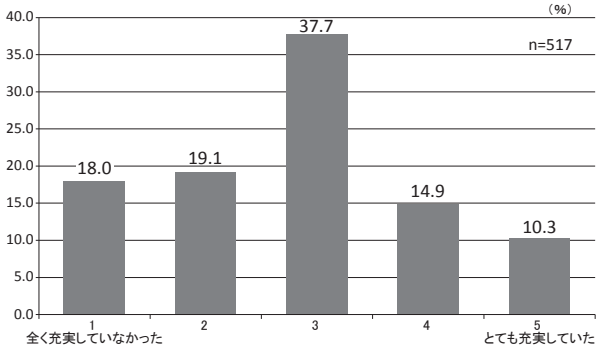


図３－10　海外研修や留学のための機会や指導

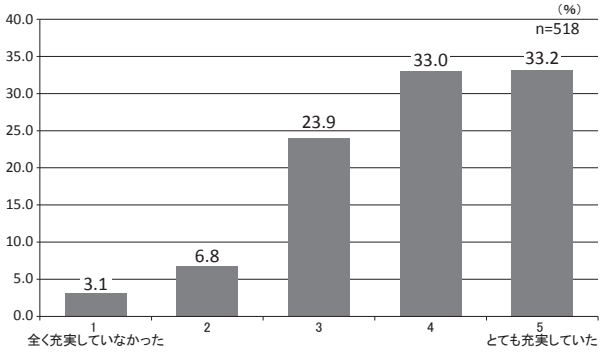


図３－11　研究室・ゼミでの授業や活動

大学での教育プログラムの充実度は，「知識を広げ教養を身に付ける授業」，「専門の授業（講義や演習）」，「研究室・ゼミでの授業活動」が充実していたと捉えられ，「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」，「インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験」，「海外研修や留学のための機会や指導」において充実度が低く捉えられていることがわかる。（表３－４）

表３－４　大学での教育プログラムの充実

(%)

		1 全く充実していなかった	2	3	4	5 とても充実していた	計	*n*
①	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	7.8	19.3	46.0	20.4	6.5	100.0	*524*
②	大学での学習方法を学ぶ授業	3.5	11.9	40.3	33.2	11.1	100.0	*521*
③	知識を広げ教養を身に付ける授業	1.4	3.1	25.1	41.9	28.6	100.0	*518*
④	外国語を習得するための授業	4.0	17.8	38.9	26.2	13.0	100.0	*522*
⑤	専門の授業（講義や演習）	1.2	2.7	20.6	40.6	35.0	100.0	*520*
⑥	インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験	9.0	18.7	36.5	23.5	12.3	100.0	*520*
⑦	資格取得に関わる準備・指導	5.0	13.2	28.5	31.6	21.6	100.0	*522*
⑧	卒業論文，卒業制作，卒業発表	7.5	6.5	24.3	34.1	27.6	100.0	*522*
⑨	海外研修や留学のための機会や指導	18.0	19.1	37.7	14.9	10.3	100.0	*517*
⑩	研究室・ゼミでの授業や活動	3.1	6.8	23.9	33.0	33.2	100.0	*518*

3-2. 分野ごとの授業の充実

次に，大学での教育プログラムの充実度を，「観光」,「人文・ビジネス」,「国家資格（福祉・保育）」,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の４分野別に，１「全く充実していなかった」，５「とても充実していた」の５段階尺度で回答したものの平均値を，表３－５を見ながらその特徴を見てみる。

3-2-1. 高校までの基礎学力を学び直す授業や指導

「観光」2.88,「人文・ビジネス」2.96,「国家資格（福祉・保育）」2.94,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.37で，高校までの基礎を学び直す授業の充実度は全体的に低い傾向にあり、「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が若干高い。

3-2-2. 大学での学習方法を学ぶ授業

「観光」3.32,「人文・ビジネス」3.41,「国家資格（福祉・保育）」3.47,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」2.93で,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が４分野において最も低い。

3-2-3. 知識を広げ教養を身に付ける授業

「観光」4.00,「人文・ビジネス」3.92,「国家資格（福祉・保育）」3.95,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.91と，４分野においてほぼ充実している傾向にある。

3-2-4. 外国語を習得するための授業

「観光」3.37,「人文・ビジネス」3.27,「国家資格（福祉・保育）」3.29,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.07と，４分野において大差はなく充実度は高くもなく低くもない。

3-2-5. 専門の授業

「観光」3.93,「人文・ビジネス」4.00,「国家資格（福祉・保育）」4.22,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.33で,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が最も高く，次いで「国家資格（福祉・保育）」で，国家資格系の専門の授業に対する充実度は高い。

3-2-6. インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験

「観光」が3.08,「人文・ビジネス」が2.98,「国家資格（福祉・保育）」3.48,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.48で，実習や就業経験を伴う授業の充実度は「人文・ビジネス」が低い。

3-2-7. 資格取得に関わる準備・指導

「観光」3.38,「人文・ビジネス」3.28,「国家資格（福祉・保育）」4.11,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.33で，国家資格系で充実度が高く，「観光」,「人文・ビジネス」と比較して，１ポイント以上の差がある。

3-2-8. 卒業論文，卒業制作，卒業発表

「観光」3.58,「人文・ビジネス」3.83,「国家資格（福祉・保育）」3.95,「国家資格（栄養士・管理

栄養士)」2.17となっており,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」が極端に低く，卒業論文等の授業は充実度は低い傾向にあることがうかがえる。

3-2-9. 海外研修や留学のための機会や指導

「観光」3.34,「人文・ビジネス」2.85,「国家資格（福祉・保育)」2.80,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」1.76となっており，全体的に充実度は低い傾向にあるが，特に「国家資格（栄養士・管理栄養士)」は極端に低く，海外研修，留学の授業は充実していなかったと捉えられる。

3-2-10. 研究室・ゼミでの授業や活動

「観光」3.98,「人文・ビジネス」3.87,「国家資格（福祉・保育)」が4.28,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」は2.93となっており,「国家資格（福祉・保育)」が高く,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」は充実していないと捉えられ，分野によって開きが見られた。

総合的に見て，専門の授業は４分野において充実しており，資格取得は国家資格系で高く，研究室・ゼミは国家資格（福祉・保育）で充実していた。

表３－５　大学での教育プログラムの充実（分野別平均値）（上段は平均値，下段は *n*）

分　　野	①高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	②大学での学習方法を学ぶ授業	③知識を広げ教養を身に付ける授業	④外国語を習得するための授業	⑤専門の授業（講義や演習）	⑥インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験	⑦資格取得に関わる準備・指導	⑧卒業論文、卒業制作、卒業発表	⑨海外研修や留学のための機会や指導	⑩研究室・ゼミでの授業や活動
観光	2.88	3.32	4.00	3.37	3.93	3.08	3.38	3.58	3.34	3.98
	60	*60*	*59*	*60*	*59*	*60*	*60*	*60*	*59*	*59*
人文・ビジネス	2.96	3.41	3.92	3.27	4.00	2.98	3.28	3.83	2.85	3.87
	333	*330*	*328*	*332*	*330*	*330*	*332*	*332*	*331*	*330*
国家資格等（福祉・保育）	2.94	3.47	3.95	3.29	4.22	3.48	4.11	3.95	2.80	4.28
	85	*85*	*85*	*84*	*85*	*84*	*84*	*84*	*81*	*83*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	3.37	2.93	3.91	3.07	4.33	3.48	4.33	2.17	1.76	2.93
	46	*46*	*46*	*46*	*46*	*46*	*46*	*46*	*46*	*46*
計	2.98	3.37	3.93	3.26	4.06	3.11	3.52	3.68	2.80	3.86
	524	*521*	*518*	*522*	*520*	*520*	*522*	*522*	*517*	*518*

４．大学の教育・指導と学生の学習

4-1. 大学の教育方法・指導の充実

大学で経験した授業の教育方法や指導には，どのような特徴があったのかを,「１．ほとんどなかった」,「５．よくあった」の５段階尺度で平均値を出した。表３－６で９項目ごとの分野平均値を見てみる。

4-1-1. 学問的な理論や概念枠組みの授業

「観光」3.78,「人文・ビジネス」3.53,「国家資格（福祉・保育）」3.88,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.78で4分野ほとんど差はなく，どの分野においても学問的な理論，概念的枠組みの授業は一定に取り組まれていることがわかる。

4-1-2. 経験的・実務的な知識の授業

「観光」3.85,「人文・ビジネス」3.41,「国家資格（福祉・保育）」3.81,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.02で,「人文・ビジネス」は実務系授業が少なめで,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は実務系の授業が多いことがわかる。

4-1-3. 学生の関心や理解度に配慮した授業

「観光」は3.56,「人文・ビジネス」は3.35,「国家資格（福祉・保育）」3.47,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.56であった。分野間における差異はほとんど見られず、理解度を考えた授業は幾分なされているが多くはない。

4-1-4. グループワークなど学生が参加する授業

「観光」3.19,「人文・ビジネス」3.36,「国家資格（福祉・保育）」3.78,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.71で,「国家資格系」はグループワークが多めで,「観光」は少ない傾向にある。

4-1-5. プロジェクト型・問題解決型学習

「観光」2.95,「人文・ビジネス」2.91,「国家資格（福祉・保育）」3.14,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が3.04で，全体的に，プロジェクト型・問題解決型授業は多くはないことがわかる。

4-1-6. 自分の意見や考えが求められる授業

「観光」3.15,「人文・ビジネス」3.25,「国家資格（福祉・保育）」3.51,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.27，意見や考えを述べる授業は「国家資格（福祉・保育）」が若干高いが大差はない。

4-1-7. 小テストやレポートなどの課題が出される授業

「観光」が3.59,「人文・ビジネス」3.85,「国家資格（福祉・保育）」3.76で,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が4.20で，分野のなかでは「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が高い。

4-1-8. 適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される授業

「観光」が2.63で,「人文・ビジネス」と「国家資格（福祉・保育）」は同様に2.81,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が3.13，コメントが付されたきめ細かい授業は少ない傾向にある。

4-1-9. フィールドワークや地域など学外と交流する授業

「観光」2.85,「人文・ビジネス」2.80,「国家資格（福祉・保育）」が3.16で,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は2.22で,「国家資格（福祉・保育）」と「国家資格（栄養士・管理栄養士）」との差は

0.94ポイントで二者間に有意差が見られ，「国家資格（栄養・管理栄養士)」は学外と交流する授業は少ない傾向にある。

4-2. 大学の教育方法・指導の充実，分野ごとの特徴

大学の教育方法・指導の充実の状況を，４分野ごとにその特徴を見てみる。（表３－６）

4-2-1.「観光」分野の特徴

「観光」の特徴としては，「経験的・実務的な授業」や「学問的・理論的な授業」は高めであるが，「フィールドワーク」，「プロジェクト型授業」や「小テストやレポート課題」は，４分野で「観光」が最も低い。

4-2-2.「人文・ビジネス」分野の特徴

「人文・ビジネス」は，４分野の中で高数値，低数値が１か所もないところが特徴である。すなわち，際立って充実している点や充実していない点が見えないということである。「小テストやレポート課題の授業」が少々多めであるが，他は目立った特徴はみられない。「フィールドワーク等の授業」や「プロジェクト型授業」など能動的学習は少ない傾向にあることが分かる。

4-2-3.「国家資格（福祉・保育)」分野の特徴

「学問的・理論的授業」，「グループワーク等」，「自分の意見や考えを求められる授業」，「フィールドワーク等の授業」の４点で高い数値である。座学授業だけではなく，能動的学習が多い傾向がうかがえる。

4-2-4.「国家資格（栄養士・管理栄養士)」の特徴

「経験的・実務的授業」，「小テストやレポート課題」で４点台の高い数値が示されたが，「フィール

表３－６　大学で経験した授業の教育手法

（上段は平均値，下段は *n*）

分　　野	①学問的な理論や概念枠組みの授業	②経験的・実務的な知識の授業	③学生の関心や理解度に配慮した授業	④グループワークなど学生が参加する授業	⑤プロジェクト型・問題解決型学習	⑥自分の意見や考えが求められる授業	⑦小テストやレポートなどの課題が出される授業	⑧適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される授業	⑨フィールドワークや地域など学外と交流する授業
観光	3.78	3.85	3.56	3.19	2.95	3.15	3.59	2.63	2.85
	59	*59*	*59*	*59*	*59*	*59*	*59*	*59*	*59*
人文・ビジネス	3.53	3.41	3.35	3.36	2.91	3.21	3.85	2.81	2.80
	396	*394*	*393*	*395*	*394*	*391*	*395*	*393*	*394*
国家資格等（福祉・保育）	3.88	3.81	3.47	3.78	3.14	3.51	3.76	2.81	3.16
	81	*79*	*81*	*81*	*81*	*81*	*80*	*81*	*79*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	3.78	4.02	3.56	3.71	3.04	3.27	4.20	3.13	2.22
	45	*44*	*45*	*45*	*45*	*44*	*45*	*45*	*45*
計	3.62	3.56	3.40	3.43	2.96	3.25	3.84	2.82	2.81
	581	*576*	*578*	*580*	*579*	*575*	*579*	*578*	*577*

ドワーク等の授業」は先述のとおり極端に低い。この分野は，国家資格取得のための学習が重点的に行われているため，フィールドワークのような授業は展開が難しいのではないかと推測する。

4-3. 大学の授業，活動へのエンゲージメント

前節は大学側が提供する授業やプログラムであったが，ここでは，学生自身がどのように取り組んだのか，学生のエンゲージメントについて分析をする。設問は，「大学が提供する授業・指導や各種の活動に対して，どの程度熱心に取り組みましたか」で，１「熱心に取り組まなかった」，５「熱心に取り組んだ」の５段階尺度で回答したものの特徴的な点のみを挙げてみる（表３－７）。

4-3-1. 知識を広げ教養を身に付ける授業

「観光」4.00，「人文・ビジネス」3.83，「国家資格（福祉・保育）」3.83，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.69で全体的に高めであり，「知識を広げ教養を身に付ける授業」には，ある程度熱心に取り組んだと回答している。

4-3-2. 外国語を習得するための授業

「観光」が3.14であるが，他の３分野は３を下回っており，特に，「国家資格（福祉・保育）」は2.77で，外国語の習得にはあまり熱心に取り組んではいない。

4-3-3. 専門の授業（講義や演習）

「観光」4.24，「人文・ビジネス」3.87，「国家資格（福祉・保育）」4.11，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.27で，専門の授業は，４分野とも全体的に高く，熱心に取り組んだことがわかる。

4-3-4. インターンシップなど，仕事現場や地域での実習や就業経験

「観光」2.88，「人文・ビジネス」2.13，「国家資格（福祉・保育）」3.51，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.69で，「観光」，「人文・ビジネス」は低く，インターンシップ等就業体験には熱心に取り組んではいない傾向にある。

4-3-5. 資格取得

「国家資格（福祉・保育）」4.02，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.58と非常に高く，資格取得に熱心に取り組んだことが分かる。反面，「人文・ビジネス」は2.88と低く，資格取得に対して熱心に取り組む傾向にはなかった。

4-3-6. 卒業論文・卒業制作・卒業発表

「観光」3.77，「人文・ビジネス」3.90，「国家資格（福祉・保育）」3.80，で，これら３分野に関して大差はないが，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は1.31と極端に低い数値となっており，この分野の特徴といえる。

4-3-7. 海外研修・留学

「観光」2.40,「人文・ビジネス」1.43,「国家資格（福祉・保育）」1.18，そして「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は0.38と，４分野全体において調査項目の中で最も低い数値となった。海外研修・留学には取り組んでいない傾向がうかがえる。

4-3-8. 研究室・ゼミでの授業や活動

「観光」3.97,「人文・ビジネス」は3.86と,「国家資格（福祉・保育）」が4.15，これら３分野においては高めの数値となったが,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は2.96と低かった。

このほかに，学生生活上の取り組みへの熱心さに関しては，⑪「部活やサークル活動，学校行事」は「国家資格（福祉・保育）」が3.73で高く,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が2.76と低い。また⑫「友達との交流」は,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が2.00と極端に低い。⑬「授業外での教員との交流」は,「人文・ビジネス」が2.93と低めであった。

さらに⑭「アルバイト」は,「観光」が3.78,「人文・ビジネス」3.60,「国家資格（福祉・保育）」3.51,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」3.60で，全体にやや高めである。

そして，⑮「就職活動」は,「観光」3.59,「人文・ビジネス」3.52,「国家資格（福祉・保育）」3.44と３分野ほぼ同じ数値であったが,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」のみ，2.89で，他の３分野に比べ低い。

表３－７　大学での授業・活動への取り組み度合（熱心に取り組んだか）

（上段は平均値，下段は *n*）

分　野	①高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	②大学での学習方法を学ぶ授業や指導	③知識を広げ教養を身に付ける授業	④外国語を習得するための授業	⑤専門の授業（講義や演習）	⑥インターンシップなど、仕事現場や地域での実習や就業経験	⑦資格取得	⑧卒業論文・卒業制作・卒業発表	⑨海外研修・留学	⑩研究室・ゼミでの授業や活動	⑪部活やサークル活動、学校行事	⑫友だちとの交流	⑬授業外での教員との交流	⑭アルバイト	⑮就職活動
観光	2.75	3.43	4.00	3.14	4.24	2.88	3.54	3.77	2.40	3.97	3.46	3.20	3.53	3.78	3.59
	59	*58*	*59*	*59*	*59*	*58*	*59*	*57*	*58*	*59*	*57*	*59*	*59*	*59*	*58*
人文・ビジネス	2.48	3.31	3.83	2.99	3.87	2.13	2.88	3.90	1.43	3.86	2.93	3.09	2.93	3.60	3.52
	395	*395*	*393*	*394*	*391*	*394*	*394*	*393*	*392*	*393*	*395*	*394*	*392*	*395*	*393*
国家資格等（福祉・保育）	2.56	3.28	3.83	2.77	4.11	3.51	4.02	3.80	1.18	4.15	3.73	3.62	3.62	3.51	3.44
	82	*81*	*81*	*81*	*81*	*81*	*81*	*80*	*80*	*81*	*79*	*81*	*79*	*80*	*80*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	3.41	3.11	3.69	2.89	4.27	3.69	4.58	1.31	.38	2.96	2.76	2.00	3.29	3.60	2.89
	46	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*45*	*44*
計	2.59	3.30	3.84	2.97	3.97	2.52	3.24	3.67	1.41	3.84	3.08	3.09	3.11	3.61	3.47
	582	*579*	*578*	*579*	*576*	*578*	*579*	*575*	*575*	*578*	*576*	*579*	*575*	*579*	*575*

4-4. 大学の教育プログラムの充実と個人の取り組みの比較

大学が提供する教育・指導の充実と，学生の教育・指導・活動への取り組みの熱心度合いを，分野別の特徴を見ながら比較検討してみたい。

4-4-1.「観光」分野

図３－12に示すように「観光」は,「知識を広げ教養を身に付ける授業」と「研究室・ゼミでの授業や活動」は，大学が提供するプログラム，学生の取り組みの双方の平均値が4.0程度で高い。また，学生の取り組みが大学の提供するプログラムより高くなっているのが,「専門の授業（講義や演習)」で,大学3.93に対し，学生4.24と専門の授業には熱心に取り組む傾向が見られる。さらに,「卒業論文，卒業制作，卒業発表」,「資格取得に関わる準備・指導」においても，学生が熱心に取り組んでいる。

また,「海外研修，留学の機会」は，大学の充実度3.34と学生の熱心度合2.40との間に9.4ポイントと二者間に最も差が見られる。

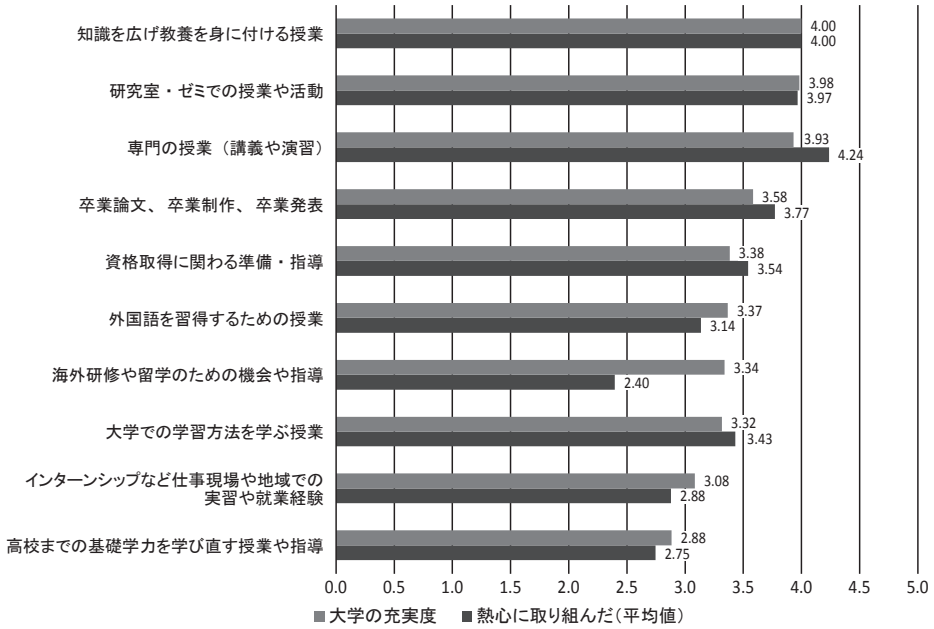


図３－12 「大学教育・指導の充実」と「本人の教育・指導，活動への熱心度」の比較（観光）

4-4-2.「人文・ビジネス」分野

「人文・ビジネス」は，図３－13に示すように「専門の授業（講義や演習)」の大学の充実度（平均値）は4.0と高く，学生の取り組みも3.87と高かった。大学のプログラムの充実より，学生の取り組みの熱心度合が若干高いものは,「卒業論文・卒業制作・卒業発表」で大学3.83，学生3.90ある。

大学のプログラム提供に対し，学生の熱心度合が低く開きがあるものは,「インターンシップなど，仕事現場や地域での実習や就業経験」,「高校までの基礎学力を学び直す授業や指導」,「海外研修，留学」で，最も差が大きかったのは,「海外研修，留学」であった。

4-4-3.「国家資格（福祉・保育)」分野

「国家資格（福祉・保育)」は，図３－14に示すように，他の分野に比べプログラムの充実度は全体的に高めであり,「専門の授業（講義や演習)」と「研究室・ゼミでの授業や活動」「資格取得に関わる準備指導」は大学側の充実度，学生の取り組みがどちらも４以上で充実度，熱心さ双方が高くなっているところで特徴が見える。また,「海外研修，留学」は，プログラムの充実2.80に対して，学生が熱心に取り組んだと答えたもの1.18で他分野同様有意差が見られる。

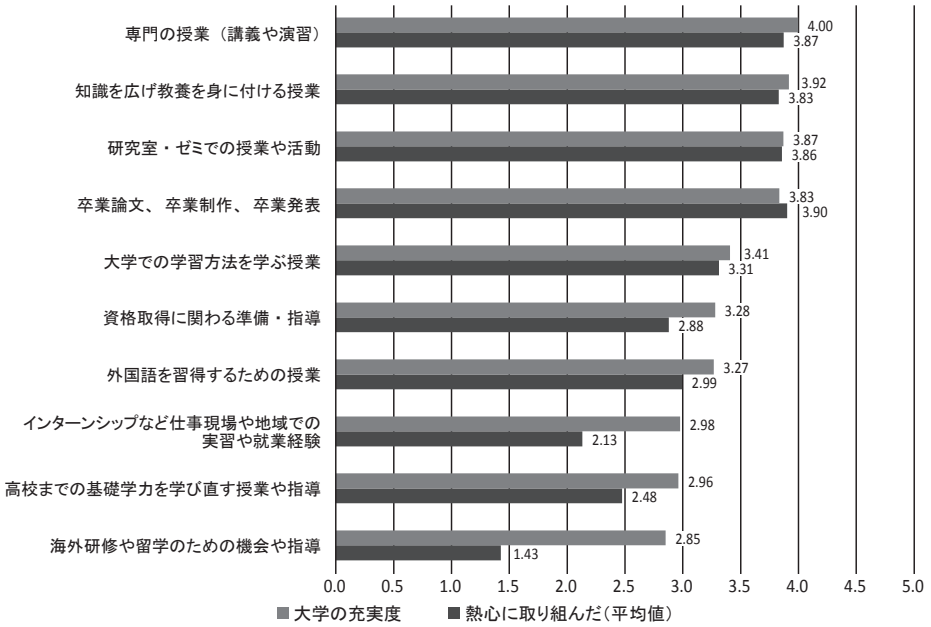


図３－13 「大学教育・指導の充実」と「本人の教育・指導への熱心度」の比較（人文・ビジネス）

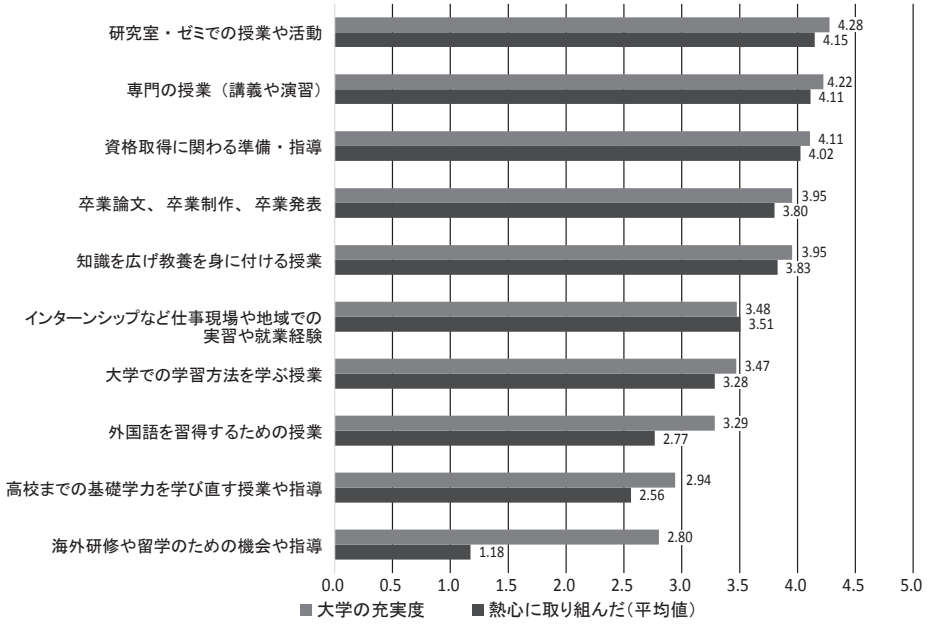


図３－14 「大学の教育・指導の充実」と「本人の教育・指導，活動への熱心度」の比較（国家資格（福祉・保育））

4-4-4.「国家資格（栄養士・管理栄養士）」分野

「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は図３－15が示すように，「専門の授業（講義や演習）」と「資格取得に関わる準備・指導」が，大学側，学生側双方が4.0を上回る高い数値を示しているが，特に，「資格取得に関わる準備・指導」は学生の熱心度合が4.58と，４分野において最も高く特徴づけられる。

反面，「卒業論文・卒業制作・卒業発表」は充実度も熱心さも極端に低く，さらに，「海外研修や留学」は大学のプログラムの充実も低いが，熱心さも0.38で４分野の中で最も低く，この分野は海外研修・留学の機会には恵まれてはいないようである。

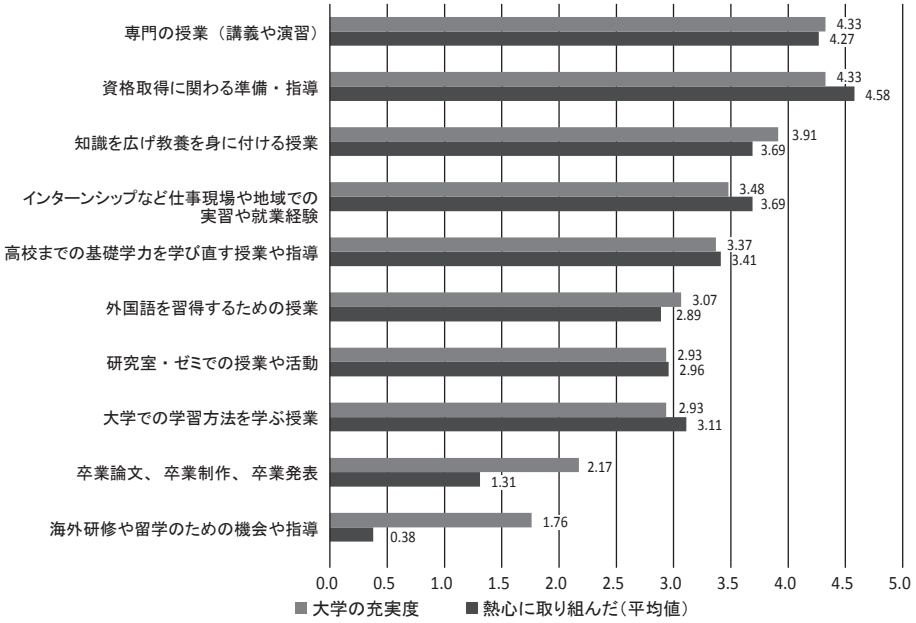


図３－15 「大学教育・指導の充実」と「本人の教育・指導への熱心度」の比較（国家資格（栄養士・管理栄養士））

５．大学教育・学生の学習活動と満足度の関係

5-1. 大学への総合的な満足度

「総合的に振り返って大学に満足しているか」を表３－８で，「１ とても不満である」，「５ とても満足している」の５段階尺度で４と５の合計を見てみる。「観光」は57.2%，「人文・ビジネス」は65.8%，「国家資格（福祉・保育）」が86.0%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が79.0%であった。最も満足度が高かったのは「国家資格（福祉・保育）」で，次いで，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」であった。一方，「観光」の満足度は低いという結果であった。

表３－８　総合的に振り返って本学に対する満足度

（%）

分　　野	1 とても不満である	2	3	4	5 とても満足している	計	*n*
観光	0	11.9	31.0	28.6	28.6	100.0	*42*
人文・ビジネス	1.0	7.5	25.6	39.2	26.6	100.0	*293*
国家資格等（福祉・保育）	0	0.0	14.0	**40.4**	**45.6**	100.0	*57*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	0	5.3	15.8	**47.4**	**31.6**	100.0	*19*
計	0.7	6.8	24.1	38.7	29.7	100.0	*411*

5-2. 学生の学習活動と満足度の関係

5-2-1. 授業への出席・学習時間と満足度

在学中の授業への出席や学習時間と学生の満足度との間に相関関係があるのかを分析すると，表３－９に示すように，授業への出席と大学への満足度を Pearson の相関係数で見ると，0.187で正の相関関係にあるが，有意確率０で有意差は見られない。

授業以外での学習時間と満足度の関係は，相関係数0.096，有意確率0.051で，こちらも有意差は見ら

れない。すなわち，授業への出席が良く，授業時間以外に学習をした学生が，大学への満足度が高いというわけではないということである。

5-2-2. 成績と満足度

在学中の成績と満足度の相関関係については，相関係数－0.032，負の相関関係にあり，有意確率0.514で有意差が見られた。すなわち，成績が良いとするものの満足度は低いということになる。

表３－９　学習時間，成績と満足度（相関係数）

	総合的に振り返って本学に対する満足度	*n*
授業への出席	.187**	*410*
授業以外での学習時間（授業期間中）	.096	
在学中の成績	－.032	*405*

** １％水準で有意

5-3. 学生の多面的なエンゲージメントと満足度

5-3-1. 学生のエンゲージメントと満足度

学生が熱心に取り組んだとするものと満足度の相関関係を見ると，表３－10が示すように，「研究室・ゼミでの授業や活動」が相関係数0.443，「学生の関心や理解度に配慮した授業」が0.417となり有意差が見られた。すなわち，研究室・ゼミでの授業や活動を熱心に行った学生は満足度が高いということである。さらに，「学生の関心や理解度に配慮した授業」を受けることで，満足度が高くなり，授業が影響を及ぼすことがわかる。

表３－10　学生のエンゲージメントと満足度（相関係数）

教育プログラム 熱心に取り組んだ（B4-1）／よくあった（B4-2）	総合的に振り返って本学に対する満足度	*n*
研究室・ゼミでの授業や活動	.432**	
学生の関心や理解度に配慮した授業	.417**	
学問的な理論や概念枠組みの授業	.384**	
経験的・実務的な知識の授業	.369**	
自分の意見や考えが求められる授業	.369**	
授業外での教員との交流	.361**	
グループワークなど学生が参加する授業	.360**	*374*
プロジェクト型・問題解決型学習	.343**	
大学での学習方法を学ぶ授業や指導	.333**	
知識を広げ教養を身に付ける授業	.326**	
専門の授業（講義や演習）	.302**	
卒業論文・卒業制作・卒業発表	.285**	
フィールドワークや地域など学外と交流する授業	.282**	

** １％水準で有意

5-3-2. 大学での教育プログラムの充実と卒業生の満足度

大学での教育プログラム，すなわち大学の教育・指導の充実と，卒業生の大学に対する満足度との相関関係を見てみる。表３－11が示すように，「知識を広げ教養を身に付ける授業」が0.518と最も高

い満足度を示している。次いで,「専門の授業（講義や演習）」0.498,「研究室・ゼミでの授業や活動」が0.484,「大学での学習方法を学ぶ授業」0.442,「部活やサークル，学校の行事」0.424,「資格取得に関わる準備・指導」0.421の順であった。「知識を広げ教養を身に付ける授業」,「専門の授業（講義や演習）」という，大学として本来の教育である専門の授業が満足度を上げていることがわかる。

表３－11　大学での教育プログラムの充実と満足度（相関係数）

教育プログラム とても充実していた（B3）	総合的に振り返って 本学に対する満足度	*n*
知識を広げ教養を身に付ける授業	.510**	
専門の授業（講義や演習）	.493**	
研究室・ゼミでの授業や活動	.479**	
大学での学習方法を学ぶ授業	.431**	
資格取得に関わる準備・指導	.429**	*359*
部活やサークル，学校の行事	.421**	
卒業論文，卒業制作，卒業発表	.398**	
学習支援	.392**	
就職支援	.388**	

** １％水準で有意

６．小　括

6-1．学生のアウトカム（満足度）と学習時間，出席と成績，多面的なエンゲージメント

授業への出席が良く，授業以外の時間に学習をした学生の大学への満足度は高くはなかった。学生時に真面目に学習に取り組んだ学生が，必ずしも大学に対して満足しているということではない。大学への満足度が最も高かった「国家資格（福祉・保育）」は，学習時間が最も低い。すなわち，学習時間が満足度を規定する要因として影響を及ぼす確率は低いということになる。小方（2008）は，授業の出席率は成績を高める要因として機能しているということであるが，授業の出席率や成績は大学への満足度へと連なり影響するということにはならなかった。

４分野で関係性を見ると，成績が上位であると認識している割合は,「観光」59.3%,「人文・ビジネス」48.9%,「国家資格（福祉・保育）」40.2%,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」26.7%の順であり，総合的満足度の順は「国家資格（福祉・保育）」86.0%,「国家資格（栄養士・管理栄養士）」79.0%「人文・ビジネス」65.8%,「観光」57.2%，で，成績に対する認識と満足度とはほぼ反比例していることが分かり，成績が満足度に影響を及ぼす確率は低い。成績の負の相関関係に関しては，成績の低い学生が大学での教育により伸びた場合の満足感，成績の高い学生はより高度な教育への願望に対する不満足感などを含め，さらに分析が必要となる。

学生の多面的なエンゲージメントと満足度を見ると,「研究室・ゼミでの授業や活動」や「学生の関心や理解度に配慮した授業」に熱心に取り組んだと答えた者の大学への満足度が高かった。研究室やゼミという少人数体制で個人の存在が価値づけられる授業が，学生の満足感に影響を及ぼす傾向にある。さらに，学生の関心や理解度という観点から，教員主体ではなく学生主体に考えられた授業には熱心に取り組めるという点と，それが満足度を規定する要因になる可能性が高いということがわかる。

6-2．学生のアウトカム（満足度）と授業の充実，カリキュラムと教育支援

大学での教育プログラムの充実においては，「知識を広げ教養を身に付ける授業」，「専門の授業（講義や演習）」，「研究室・ゼミでの授業や活動」と満足度に相関関係が見られた（表３－11）。表３－５が示すように，大学での教育プログラムが充実していたと答えているのも，４分野とも同じ項目で数値が高く，教育プログラムの充実が満足度に並行的に影響を及ぼす傾向が見られた。

また，学生のエンゲージメント，熱心に取り組んだものの最上位要因が「研究室・ゼミの授業や活動」で，大学側が準備していた教育プログラムや学習制度の満足度の相関と比較すると，こちらにも「研究室・ゼミの授業や活動」が入っており，これが学生の満足度を規定する要因になり得るということがわかる（表３－12）。

さらに４分野でみると，総合的満足度の高い「国家資格（福祉・保育）」，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」と，大学での教育プログラムの充実度を比較すると「資格に関わる準備・指導」では，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」，「国家資格（福祉・保育）」の順で高い。他の教育プログラムでも両分野とも充実度が高いが，１点だけ明らかな相違が見られる。「研究室・ゼミでの授業や活動」が「国家資格（福祉・保育）」は４分野で最も高いが「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は４分野で最も低い。この点が全体的に「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が高い数値を示していたにもかかわらず，満足度の順位で「国家資格（福祉・保育）」を１位に押した，すなわち順位を逆転する要因になっているのではないかと考える。上述のとおり「研究室・ゼミでの授業や活動」が満足度に関連性があるとするなら，この逆転現象により理由づけられると見ることもできる。

また，教育プログラムの充実が全体的に低い数値となった観光分野は，総合的満足度も４分野で最も低かった。したがって，教育プログラムの充実は大学教育への満足度を規定する要因になり得ると考える。

表３－12　教育指導・学習と卒業生の満足度の相関関係順位比較

順位	大学の教育指導の充実	授業・活動への取り組み度合
１位	知識を広げ教養を身に付ける授業	研究室・ゼミでの授業は活動
２位	専門の授業（講義や演習）	学生の関心や理解度に配慮した授業
３位	研究室・ゼミでの授業や活動	学問的な理論や概念枠組みの授業

〈参考文献〉

小方直幸（2008）「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」，日本高等教育学会編『高等教育研究』第11集，45-61頁

葛城浩一（2006）「在学生によるカリキュラム評価の可能性と限界」，日本高等教育学会編『高等教育研究』第９集，161-180頁

堺完・木村拓也・西郡大・山田礼子（2015）「短期大学におけるエンゲージメントの構造－重回帰分析，分散分析，多重対応分析を用いた検討」，『短期大学コンソーシアム九州紀要』，vol.5，短期大学コンソーシアム九州研究センター，15-24頁

Pascarella, Ernest T. and Terensini, Patrick T., 2005, “How college affects students”, vol.2, Jossey-Bass, higher education. series.

第４章　職業統合的学習と就業観

椿　　明　美（札幌国際大学短期大学部）

１．研究の枠組み

本章では，図４－１に示すとおり，職業統合的学習（WIL）を大学の学習活動として実施されているインターンシップ，資格実習だけではなく，近似体験として海外経験，専門に関係するアルバイトを含めて，その取り組み状況を分析する。PBL，サービス・ラーニングなども近似体験としての職業統合的学習（WIL）と言えるが，今回の調査では外すこととした。

また，インターンシップ体験が学生の進路意識・就業観にどのように影響を与え，さらには大学への満足度を規定している要因として職業統合的学習（WIL）と卒業生の満足度の相関関係について分析をする。

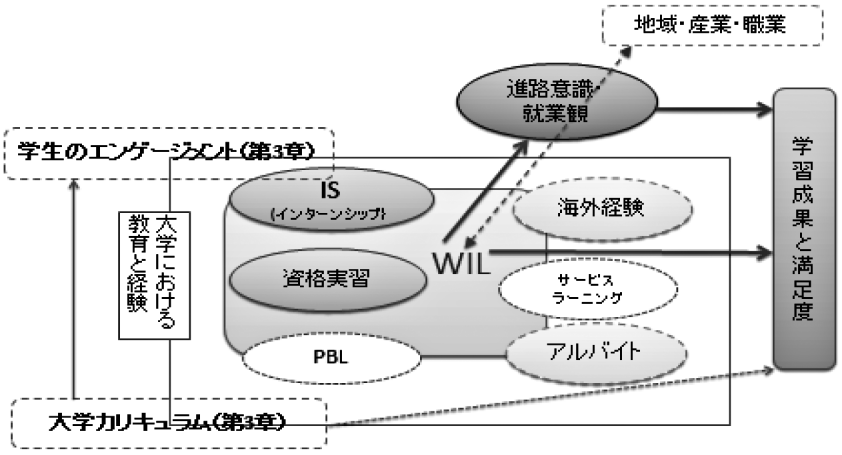


図４－１　分析の枠組み

２．職業統合的学習（Work Integrated Learning：WIL）とは

現在，大学における社会への移行を促す学習活動として，多様な形態のインターンシップや，インターンシップと同等の効果を発揮する多様な取組の推進について検討されており，ワークショップやPBL，地域フィールドワーク，共同研究プロジェクト，特定の資格取得を目的として実施する実習，サービス・ラーニングなどが期待できるものとして挙げられている。そして，これらを，「職業統合的学習（Work Integrated Learning: WIL）」という包括的な概念として捉えられている(1)。

「職業統合的学習（以下：WIL）」とは，「目的を持ってデザインされたカリキュラムの中で理論と職業実践とを統合したアプローチおよび戦略の総称」（Patrick et al.2009）であると定義づけられ，カリキュラムを中心に据えているものであるとしている(2)。すなわち，各専門分野の学問体系に基づく大学教育のカリキュラムと職業実践とを統合させた学習で，大学での学習と関連することが必須である

ことが重要な点とされている(3)。

本報告書では，WIL の観点から，国家資格取得を目的として実施する資格実習と，大学教育と関連するインターンシップ，大学教育と関連するアルバイト，加えて海外留学に焦点をあて，これらを WIL 経験として総合的満足度との関連性について分析をする。

3．さまざまな職業統合的学習（WIL）および近似体験

3-1. インターンシップ（4分野）

3-1-1. 大学におけるインターンシップ・実習制度の充実

「観光」,「人文・ビジネス」,「国家資格（福祉・保育)」,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」の４分野における「インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業経験」は，大学内で制度としてどの程度充実していたのかを表４－１で見ると,「充実していた」（４＋５）は,「観光」38.3%,「人文・ビジネス」29.7%,「国家資格（福祉・保育)」48.8%,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」が52.1%と，国家資格系の２分野ではほぼ半数が,「充実していた」と答えており，他の２分野と比べ有意差が見られた。

また,「充実していなかった」（１＋２）を見ると,「観光」28.3%,「人文・ビジネス」30.3%で,「国家資格（福祉・保育)」20.3%,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」21.7%であり,「観光」,「人文・ビジネス」が，国家資格系に比して充実していなかったと答える割合が高かった。

表４－１　インターンシップなど仕事現場や地域での実習や就業制度の充実

（%）

分　　野	1 全く充実していなかった	2	3	4	5 とても充実していた	計	*n*
観光	10.0	18.3	33.3	30.0	8.3	100.0	*60*
人文・ビジネス	10.9	19.4	40.0	20.6	9.1	100.0	*330*
国家資格等（福祉・保育）	3.6	16.7	31.0	26.2	22.6	100.0	*84*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	4.3	17.4	26.1	30.4	21.7	100.0	*46*
計	9.0	18.7	36.5	23.5	12.3	100.0	*520*

3-1-2. インターンシップ・実習など就業経験への取組状況

インターンシップや実習といった就業経験に対する取組状況をみると，表４－２が示すとおり，特に「熱心に取り組んだ」（４＋５）は,「観光」34.5%,「人文・ビジネス」27.2%,「国家資格（福祉・保育)」51.9%,「国家資格（栄養士・管理栄養士)」62.2%で，国家資格系は熱心に取り組んだ割合が高く，他の２分野と比較して明確に有意差が見られた。なかでも「人文・ビジネス」は３割を切っており，制度の充実も低く，熱心に取組んでいない点で特徴的である。

また，インターンシップや実習等を「全く経験しなかった」とした者は,「人文・ビジネス」が33.5%で３人に１人が実習や就業経験をしていなかった。

表４－２　インターンシップなど，仕事現場や地域での実習や就業経験

（%）

分　　野	0 経験がない	1 熱心に取り組まなかった	2	3	4	5 熱心に取り組んだ	計	*n*
観光	12.1	5.2	12.1	36.2	22.4	12.1	100.0	*58*
人文・ビジネス	33.5	8.6	9.6	21.1	13.7	13.5	100.0	*394*
国家資格等（福祉・保育）	4.9	2.5	12.3	28.4	21.0	30.9	100.0	*81*
国家資格（栄養士･管理栄養士）	11.1	0.0	2.2	24.4	20.0	42.2	100.0	*45*
計	25.6	6.7	9.7	23.9	16.1	18.0	100.0	*578*

3-1-3. インターンシップと専門分野の関係

インターンシップ参加者が82サンプルと少ないため，限られた中での結果であるが，インターンシップは専門分野と関連があったのかどうかを表４－３でみると，「全くあてはまらない」(1)，「よくあてはまる」(5) の五件法で「インターンシップの内容は，在籍していた学科・専攻と関連していた」の問いの平均値を算出してみると，「観光」4.18で最も高く，他は「国家資格（福祉・保育)」，「国家資格（栄養士・管理栄養士)」は共に3.00，「人文・ビジネス」2.44であった。「観光」は，専門分野と関連性のあるインターンシップ経験をする機会が高く，「人文・ビジネス」は最も低かった。

ここでは，「観光」という専門性の明確な分野と「人文・ビジネス」という大学教育での専門と職業が結びつきにくい分野との差が明確に見られた。

表４－３　インターンシップと専門分野の関係

（平均値）

分　　野	インターンシップの内容は，在籍していた学科・専攻と関連していましたか	*n*
観光	4.18	*11*
人文・ビジネス	2.44	*63*
国家資格等（福祉・保育）	3.00	*6*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	3.00	*2*
計	2.73	*82*

3-2. 海外経験（海外研修や留学）（４分野）

3-2-1. 海外研修や留学のための制度

「ギャップターム」を利用することにより海外や長期間でのインターンシップなどの多様な活動も主体的学習として期待されている。海外研修や留学の機会や指導について，WIL との比較，関連性を見るため，大学側が用意する制度が充実していたのかを，表４－４で分野別に分析する。「充実していた」（４＋５）は，「観光」で44.1%，「人文・ビジネス」は24.2%，「国家資格（福祉・保育)」が29.6%，「国家資格（栄養士・管理栄養士)」はゼロであった。

また，「充実していなかった」（１＋２）と答えたのは，「国家資格（栄養士・管理栄養士)」71.8%で最も高く特徴的である。

表４－４　海外研修や留学のための機会や指導

（%）

分　　野	1 全く充実していなかった	2	3	4	5 とても充実していた	計	*n*
観光	5.1	11.9	39.0	32.2	11.9	100.0	*59*
人文・ビジネス	14.8	20.5	40.5	13.0	11.2	100.0	*331*
国家資格等（福祉・保育）	21.0	18.5	30.9	18.5	11.1	100.0	*81*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	52.2	19.6	28.3	0.0	0.0	100.0	*46*
計	18.0	19.1	37.7	14.9	10.3	100.0	*517*

3-2-2. 海外経験（海外研修や留学）への取組状況（４分野）

海外研修や留学に，どの程度熱心に取り組んだのかを表４－５で見ると，「熱心に取り組んだ」（４＋５）は，「観光」32.7％で，「人文・ビジネス」は19.9％，「国家資格（福祉・保育）」13.8％，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」０％であった。また，「経験がない」が，「観光」29.3％，「人文・ビジネス」54.1％，「国家資格（福祉・保育）」61.3％で，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」77.8％であった。「海外研修や留学の経験」は，観光が高めで，国家資格系は低い傾向が見られた。「人文・ビジネス」も半数以上が経験をしていない。

表４－５　海外研修や留学への取組

（％）

分　　野	0 経験がない	1 熱心に取り組まなかった	2	3	4	5 熱心に取り組んだ	計	*n*
観光	29.3	5.2	10.3	22.4	17.2	15.5	100.0	*58*
人文・ビジネス	54.1	11.2	5.9	8.9	6.6	13.3	100.0	*392*
国家資格等（福祉・保育）	61.3	7.5	6.3	11.3	5.0	8.8	100.0	*80*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	77.8	11.1	6.7	4.4	0.0	0.0	100.0	*45*
計	54.4	10.1	6.4	10.3	7.0	11.8	100.0	*575*

表４－６で，海外研修や留学の内容はどうであったのか４分野の特徴を見ると，「１か月程度の語学研修」は，「人文・ビジネス」が9.1％で高く，「海外旅行」は「観光」37.3％で突出している。また，「１か月程度の語学研修」，「３か月～半年の留学」，「半年以上の留学」の合計を見ると，「観光」8.5％，「人文・ビジネス」18.4％で，語学留学では「人文・ビジネス」が最も高い数値となっている。

海外経験・留学の制度は，「観光」が充実しており，学生の取組も「観光」が熱心に取組んでいる。また留学は「人文・ビジネス」が高く，この分野の特陵として捉えられる。「観光」は海外旅行，「人文・ビジネス」は語学留学という傾向が見られる。

表４－６　在学中の海外経験

（複数回答，％）

分　　野	1ヵ月程度の語学研修	3ヵ月から半年未満の留学	半年以上の留学	海外でのボランティアやインターンシップ	海外旅行	海外経験はない	計	*n*
観光	1.7	5.1	1.7	3.4	37.3	59.3	100.0	*59*
人文・ビジネス	9.1	6.5	2.8	2.8	17.9	71.2	100.0	*386*
国家資格等（福祉・保育）	2.5	0.0	2.5	4.9	8.6	85.2	100.0	*81*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4	95.6	100.0	*45*
計	3.3	2.9	1.8	2.8	17.1	77.8	100.0	*571*

3-3. 資格実習（4分野）

資格取得のための実習への取り組みを４分野ごとに表４－７で見ると，「熱心に取り組んだ」（４＋５）は，「観光」54.2％，「人文・ビジネス」42.2％，「国家資格（福祉・保育）」76.5％，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」88.9％であった。「熱心に取り組んだ」(5) は国家資格（栄養士・管理栄養士）が80.0％で突出して高い。「熱心に取組まなかった」（１＋２）をみると，「人文・ビジネス」21.6％で４分野の中で最も高い。さらに，「経験がない」は「人文・ビジネス」が14.5％と他の分野に比べ高い。

表４－７　資格取得

（%）

分　　野	経験がない	1 熱心に取組まなかった	2	3	4	5 熱心に取組んだ	計	*n*
観光	3.4	5.1	8.5	28.8	25.4	28.8	100.0	*59*
人文・ビジネス	14.5	9.4	12.2	21.8	22.1	20.1	100.0	*394*
国家資格（福祉・保育）	1.1	3.7	6.2	12.3	33.3	43.2	100.0	*81*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	2.2	0	4.4	4.4	8.9	80.0	100.0	*45*
計	5.3	4.6	7.8	16.8	22.4	43.0	100.0	*579*

3-4. アルバイト（4分野）

アルバイトの取り組み状況は，表４－８に示すように「熱心に取り組んだ」（４＋５）は，「観光」が64.4%，「人文・ビジネス」は59.7%，「国家資格（福祉・保育）」56.3%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」66.6%であった。アルバイトに関しては，「観光」と「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の２分野で６割を超えてはいるが大きな差は見られない。

表４－８　アルバイト

分　　野	経験がない	1 熱心に取組まなかった	2	3	4	5 熱心に取組んだ	計	*n*
観光	5.1	3.4	6.8	20.3	22.0	42.4	100.0	*59*
人文・ビジネス	5.8	5.3	6.6	22.5	24.8	34.9	100.0	*395*
国家資格（福祉・保育）	7.5	7.5	2.5	26.3	21.3	35.0	100.0	*80*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	8.9	2.2	8.9	13.3	33.3	33.3	100.0	*45*
計	6.8	4.6	6.2	20.6	25.4	36.4	100.0	*579*

3-5. WIL 変数の合成×分野

本調査では，「インターンシップ」，「資格実習」，「専門と関連するアルバイト」を，WIL の枠に入れ，「専門と関連しないアルバイト」，「就業体験なし」を比較として分析する。なお，大学の「専門と関連するアルバイト」は，学生が様々な気付きを得る点では一定の評価を与えることができるが，その位置付けについては検討を要するということを踏まえている。

インターンシップ経験は表４－９が示すように，「観光」が18.3%，「人文・ビジネス」15.7%，「国家資格（福祉・保育）」7.4%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.4%であり，「観光」「人文・ビジネス」が高く，国家資格系２分野は低い。「資格実習」は，「国家資格（福祉・保育）」74.1%，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」86.7%で他の２分野に比べ非常に高い値を示している。「専門関連アルバイト」は「国家資格（福祉・保育）」が19.8%で高め，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は8.9%で低めであった。「専門非関連アルバイト」は全体的に高く，「国家資格（福祉・保育）」が71.6%であるが，他の３分野は８割を超えて経験している。つまり，多くの学生が専門に関連しないアルバイトを経験しているということになる。

表４－９　インターンシップ，資格取得実習などの職業統合的学習（WIL）経験

（複数回答，%）

分　　野	インターンシップ	資格実習	専門関連アルバイト	専門非関連アルバイト	就業体験なし	計	*n*
観光	18.3	28.3	13.3	80.0	1.7	*100.0*	*60*
人文・ビジネス	15.7	16.2	12.9	81.1	4.3	*100.0*	*396*
国家資格等（福祉・保育）	7.4	74.1	19.8	71.6	3.7	*100.0*	*81*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	4.4	86.7	8.9	82.2	2.2	*100.0*	*45*
計	*13.9*	*30.9*	*13.6*	*79.7*	*3.8*	*100.0*	*582*

４．インターンシップ，海外経験と進路意識・就業観

4-1. インターンシップと進路意識・就業観

インターンシップ経験は就業意識にどのように影響したかを表４－10でみるが，インターンシップ経験者のサンプル数が82であるため一傾向であることは否めないことを踏まえて分析をする。アンケートは５件法の平均値で，「卒業後の進路を選択する上で役に立った」は，「観光」3.91，「人文・ビジネス」3.44，「国家資格（福祉・保育）」3.17，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が4.50で，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」が最も高いが，サンプル数が少ないため，傾向を捉えることができない。先に示したように，観光は専門分野と関連があるインターンシップを経験する割合が高く，進路選択に役立ったと回答している割合も高い。

「自信を持って積極的に行動できるようになった」は，「観光」3.60，「人文・ビジネス」3.63，「国家資格（福祉・保育）」3.67，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」4.00であった。

「働くことの楽しさ，厳しさがわかった」の全体平均は4.01で最も高い数値を示した。「就職したい業界が明確になった」は，全体平均値3.33で調査項目の中で最も低かった。「自分の適性に気づくことができた」は，全体平均3.63で，分野では「観光」が4.20で最も高かった。「卒業時の職業選択の参考になった」は，全体平均3.77，分野では「観光」4.00で高かった。

観光の学生は，インターンシップが適性に気づき職業選択への機会となり就業観育成に効果が見られる傾向がうかがえた。

表４－10　インターンシップと進路意識・就業観

（上段は平均値，下段は *n*）

分　　野	インターンシップは卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	自信をもって積極的に行動できるようになった	働くことの楽しさ，厳しさがわかった	就職したい業界が明確になった	自分の適性に気づくことができた	卒業時の職業選択の参考になった
観光	3.91	3.60	3.90	3.80	4.20	4.00
	11	*10*	*10*	*10*	*10*	*10*
人文・ビジネス	3.44	3.63	3.97	3.24	3.48	3.73
	63	*62*	*63*	*63*	*63*	*63*
国家資格等（福祉・保育）	3.17	3.67	4.33	3.50	4.17	3.50
	6	*6*	*6*	*6*	*6*	*6*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	4.50	4.00	5.00	3.50	4.00	4.50
	2	*2*	*2*	*2*	*2*	*2*
計	3.51	3.64	4.01	3.33	3.63	3.77
	82	*80*	*81*	*81*	*81*	*81*

4-2. 海外経験と進路意識・就業観

海外経験が進路意識・就業観にどのような影響を与えたかを分野別平均値（表４－11）で見ると，「海外での学習経験は卒業後の進路選択をする上で役立った」が，「観光」3.40，「人文・ビジネス」3.86，「国家資格（福祉・保育）」3.29であった。「自信を持って積極的に行動できるようになった」は，「観光」3.35，「人文・ビジネス」が3.86，「国家資格（福祉・保育）」3.91で，全体平均が3.78であった。

海外経験が進路意識・就業観に与える影響とインターンシップのそれらへの影響を比較すると，「卒業後の進路選択」に関しては，インターンシップが3.77，海外経験が3.75とほぼ同じ，「自信を持って行動」はインターンシップが3.64，海外経験が3.78で海外経験が若干高めであった。また，「自分の適性」については，インターンシップが3.63，海外経験が3.41で，インターンシップが若干高めであった。

表４－11　海外経験と進路意識・就業観

（上段は平均値，下段は *n*）

分　　野	海外での学習経験を振り返っての評価	海外での学習経験は卒業後の進路選択をする上で役立ちましたか	自信を持って積極的に行動できるようになった	自分の適性に気づくことができた	多文化・異文化に関する理解や関心が深まった	日本に対する理解や関心が深まった	外国語の能力が向上した
観光	3.60	3.40	3.35	3.04	4.35	3.96	2.52
	5	*5*	*23*	*23*	*23*	*23*	*23*
人文・ビジネス	3.53	3.86	3.86	3.44	4.55	3.94	3.50
	43	*43*	*107*	*107*	*107*	*107*	*107*
国家資格等（福祉・保育）	3.14	3.29	3.91	3.91	4.64	4.27	3.09
	7	*7*	*11*	*11*	*11*	*11*	*11*
国家資格（栄養士･管理栄養士）	0	0	3.50	3.50	5.00	5.00	2.50
	0	*0*	*2*	*2*	*2*	*2*	*2*
計	3.49	3.75	3.78	3.41	4.53	3.99	3.29
	55	*55*	*143*	*143*	*143*	*143*	*143*

4-3. 海外経験と満足度の関係

海外経験と満足度の関係を表４－12で見ると，統計的に有意ではないが，「海外でのボランティアやインターンシップ」，「半年以上の留学」，「３ヶ月から半年未満の留学」などの経験が満足度を上げる要因になり得ることがうかがえる。特に，ボランティアやインターンシップなど目的が明確な体験は，誰かのために役立つことや，自分が認められ評価を得られる体験であり，満足度を高める傾向にあることがわかる。１ヶ月程度の短期間語学研修が低くなっていることから，海外経験はある程度の時間の長さが影響することも考えられる。

表４－12　海外経験と満足度

	平均値	標準偏差	*n*
海外でのボランティアやインターンシップ	4.38	0.96	*13*
半年以上の留学	4.30	1.25	*10*
３ヶ月から半年未満の留学	4.25	0.72	*20*
海外旅行	4.02	0.97	*66*
１ヶ月程度の語学研修	3.83	0.87	*24*
海外での経験はない	3.87	0.93	*303*

５．職業統合的学習（WIL）と満足度

WIL 体験は，総合的に大学に対する満足度にどのような影響を与えているのかを分析してみる。満足度は「とても不満である」(1)，「とても満足している」(5) の５件法で回答したものを４分野の WIL 体験「インターンシップ」，「資格実習」，「専門関連アルバイト」と，「専門非関連アルバイト」，「就業体験なし」の相関関係を表４－13で見てみる。

「資格実習」体験の満足度平均値は，「観光」4.27で最も高いが，他の３分野においても高く，全体平均が4.14であった。「資格実習」体験者の大学に対する満足度については，有意に影響していると見られ，大学生活への満足感を与える要因となり得る傾向にある。

「インターンシップ」については，度数が少ない中で，「国家資格（福祉・保育）」が4.80と高く全体平均も3.91で高めであった。

「専門関連アルバイト」は，「人文・ビジネス」が4.03で満足度が高く，平均値も4.02で「資格実習」経験に次いで満足度を上げる要因となり得る可能性を示している。最も体験者が多かった「専門非関連アルバイト」経験は，「国家資格（福祉・保育）」において4.34と高い満足感が見てとれるが，全体平均は3.89で最も平均値は低く，「資格実習」や「専門関連アルバイト」，「インターンシップ」よりも満足度に対して影響は低めの傾向にある。

また，「就業体験がない」は，全体平均が3.74で，その他の経験に比して，満足感が若干低く，何も経験しないことは満足度を上げる要因に影響しない傾向が見て取れる。

表４－13　職業統合的学習（WIL）の分野別満足度　（上段は平均値，下段は *n*）

区　　分	観　光	人文・ビジネス	国家資格等（福祉・保育）	国家資格（栄養士・管理栄養士）	計
資格実習	4.27	4.02	4.24	4.11	4.14
	11	*43*	*41*	*18*	*113*
インターンシップ	3.25	3.87	4.80	4.00	3.91
	4	*46*	*5*	*2*	*57*
専門関連アルバイト	3.80	4.03	4.00	5.00	4.02
	5	*34*	*10*	*1*	*50*
専門非関連アルバイト	3.74	3.82	4.34	4.00	3.89
	35	*236*	*41*	*16*	*328*
就業体験なし	3.00	3.54	4.50	3.63	3.74
	1	*13*	*2*	*16*	*42*

６．職業統合的学習（WIL）の効用

WIL 経験の有無が，大学への満足度や就業観にどのように影響するのかを，５件法の平均値で見てみる。表４－14で示すとおり，「インターンシップ」経験の有無は，「総合的満足度」に影響はみられないが，「経験有」が「将来のキャリアを展望するうえで」が4.17で高い。また「資格実習」の「経験有」を見ると「総合的満足度」4.14で高く，さらに「仕事に必要な基礎を身につける上で」4.15，「将来のキャリアを展望する上で」4.12と高く，「資格実習」の経験は就業観に影響を与える傾向がうかがえる。

表４－14　職業統合的学習（WIL）の効用

（上段は平均値，下段は *n*）

区　分	経験の有　無	総合的に振り返って本学に対する満足度	就職先を見つける上で	仕事に必要な基礎を身につける上で	仕事で一人前になる上で	仕事で必要な学習を続けていく上で	将来のキャリアを展望する上で
インターンシップ	有	3.91	3.99	3.76	3.66	3.97	4.17
		57	*76*	*74*	*76*	*75*	*76*
	無	3.90	3.50	3.49	3.37	3.37	3.84
		354	*468*	*467*	*464*	*467*	*468*
資格実習	有	4.14	4.04	4.15	3.99	3.88	4.12
		113	*161*	*160*	*160*	*161*	*161*
	無	3.81	3.37	3.27	3.17	3.27	3.78
		298	*383*	*380*	*380*	*381*	*383*
専門関連アルバイト	有	4.02	3.89	3.90	3.62	3.81	4.10
		50	*72*	*71*	*71*	*72*	*72*
	無	3.88	3.52	3.47	3.38	3.40	3.85
		361	*472*	*470*	*469*	*470*	*472*
専門非関連アルバイト	有	3.89	3.54	3.46	3.39	3.42	3.87
		76	*428*	*426*	*425*	*426*	*429*
	無	3.95	3.72	3.81	3.53	3.59	3.97
		328	*107*	*106*	*106*	*107*	*106*
就業体験	有	3.91	3.60	3.54	3.43	3.48	3.90
		395	*522*	*519*	*518*	*520*	*523*
	無	3.91	2.82	3.23	2.91	2.86	3.52
		16	*22*	*22*	*22*	*22*	*21*

次に，「専門関連アルバイト」の「経験有」をみると，「総合的満足度」4.02，「将来のキャリアを展望する上で」4.10で高くなっている。「専門非関連アルバイト」は経験の有無に関係なく4.00を超えるものはなく，「専門非関連アルバイト」経験の有無が就業観に影響を与えている傾向は低い。「インターンシップ」，「資格実習」，「専門関連アルバイト」経験の有無の差を見ると，すべてにおいて「経験有」が「経験無」を上回る数値を示し，経験が有ることが，無いよりも満足度や就業観に影響があることがわかる。

さらに「就業体験」の有無を見ると，「経験無」が「就職先を見つける上で」2.82，「仕事で一人前になる上で」2.91，「仕事で必要な学習を続けていく上で」2.86と２点台を示し，就業経験が有る者と比べ有意差が見られた。

７．小　括

7-1. 国家資格系分野と WIL 経験

分野別の特徴として，「国家資格（福祉・保育）」，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」は，教育課程と関連する「資格実習」に取り組むため，制度の充実，熱心に取組む姿勢では高い数値を示し，教育課程と関連する実習の教育上の効用がうかがえた。また第３章では，この２分野は成績が上位ではないのに満足度が高いという結果が出ており，これの分野においては，授業での資格への取組，それに関連する「資格実習」経験，つまり WIL 経験が総合的満足度を規定する要因になり得ることがわかる。

7-2.「観光」，「人文・ビジネス」分野と WIL 経験

この２分野は，インターンシップ等の就業制度の充実はあまり高くはなく，取組もあまり熱心では

ない傾向にあった。特に「人文・ビジネス」は，インターンシップなどの就業制度の充実も、熱心な取組も４分野で最も低く，さらにインターンシップは専門分野とは関連していない。「人文・ビジネス」分野は，学修している専門の教育が職業に直接結びつくものは少なく，教育とインターンシップを関連させることが難しい事情にあるものと推測できる。国家資格系の分野の学習や「資格実習」への取組の熱心さを鏡にすると，この分野における専門と関連する WIL の検討が必要であり，それがこの分野の社会への接続問題を改善する重要な点であると考える。

次に，「観光」分野の特徴として，専門と関連するインターンシップを経験している割合が最も高かったが，教育内容が観光という専門性を持っており，職業と関連する教育であるため，旅行，航空，ホテル等の大学での学修にダイレクトに結びつくインターンシップが展開されていると考えられる。また，海外旅行経験者も多かったが，WIL の概念と適合しているかは今回の調査ではわからなかった。語学留学という観点だけではなく，観光という観点からの研修であれば WIL としてその効果を上げるものと考えられる。

7-3. WIL 経験と社会への接続

「資格実習」経験は，仕事についての視野，理解への影響が大きく，「インターンシップ」経験は働く意義，「専門分野に関連するアルバイト」は，仕事の厳しさを知る機会となっており，就業観に影響していることがわかり，WIL がある程度の効果を生み出す傾向が見られた。

「専門関連アルバイト」は「人文・ビジネス」分野において満足度と相関関係を示した。「インターンシップ」や「資格実習」といったものが，専門と関連することが難しいこの分野においては，「専門関連アルバイト」は，教育の延長線上に位置づけて考えてもよい現状を把握した。

今回の分析から，専門と関連する WIL が学生の意欲を喚起し，学習に向かわせ，大学への満足度を上げる規定要因となる可能性を秘めていることがわかり，今後，WIL という概念をもとに形成されたカリキュラムで，専門と関連したインターンシップの開発，資格実習や専門関連アルバイトの在り方や方法を検討してみる必要性がある。

〈注〉

（１） 文部科学省（2013）「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ」平成25年８月，（体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議）

（２） 吉本圭一・稲永由紀編（2013）『諸外国の第三段階教育における職業統合的学習』高等教育研究叢書122，広島大学高等教育研究開発センター

（３）「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について意見のとりまとめ」平成25年８月，（体系的なキャリア教育・職業教育の推進に向けたインターンシップの更なる充実に関する調査研究協力者会議，文部科学省）

第５章　大学卒業後の初期キャリアとコンピテンシーの形成

吉　本　圭　一（九州大学）

１．大学教育と初期キャリアの分析視角

卒業生の就職率などの職業への＜移行関係指標＞は，大学教育の学修成果に着目する評価モデルにおいて重要な評価指標である。そして，卒業時点よりもクリティカルな指標となるのが，卒業後の一定年数を経て形成される＜初期キャリアにかかわる指標＞である。なぜなら，仕事の内容などについては，卒業時点での情報は卒業生の見極めとキャリアへの方向づけが明確でない段階での，表面的，形式的なものになっていることが多いからである。

そうした一定の初期キャリア形成を経た段階こそ，企業等職場での人材育成の方向や，そのキャリアと仕事で用いられる知識・技能・態度等の＜コンピテンシー＞が明確になり，「学修成果」へのアプローチとして仕事のコンピテンシーと大学教育の学修とを結びつけて吟味するのにふさわしいものとなる。

ここでの「初期キャリア」とは，本報告書でも著者らがこれまで実施してきた卒業生調査において視野に入れてきた大学卒業後10年程度までの範囲を「初期」と位置づけ，その範囲での職業や社会的経験とそれを通して獲得されるコンピテンシー等の能力形成の成果とを指すこととしている。それは，企業等において業務に必要な研修期間を経て「一人前の」職業人としてのコンピテンシーを獲得し，さらに指導やマネジメントの機能などが求められ，キャリアの分岐を経験していく前の段階までを視野に入れるためである。過去の卒業生調査においても，初職について「一人前」になるまでの期間を卒業生に調査（吉本編2009など）しており，大学卒業生の場合に１～３年までの回答もあるが，むしろ10年までの期間にそうした一人前になるまでと想定されているキャリアが多くあった。そこで，本調査でも同様の大卒後の10年間を初期キャリアとして位置づけている。さらに，IR として大学教育の点検評価と改善の観点からも，適切な示唆を得るための基礎データとして，近年の一定範囲の教育実態に観察の焦点を絞り込むことが相応しい。

本章では，以下，卒業直後および初期キャリア段階でのキャリア形成実態を把握し，また知識・技能などをここではコンピテンシーとまとめておくが，その獲得・形成がどのような時期・機会を通してなされ，また初期キャリア形成や学修成果の有用性評価にどのように影響しているのかを分析していく。本章の分析で扱う要因関連の枠組みは，図５－１に示すとおりである。

特に，本章においては，個人の自立と社会的役割とをつなぐ指標としての＜職業＞に注目し，IR としての必要な大学・専門分野ごとの個別性と相互比較やベンチマーキングのための比較可能性とを両立させるための方法論提起を行っている。また，同じ IR 目的から，知識・技能やその応用，態度などなどの学修成果を，実際に初期キャリア段階で活用しているコンピテンシーとして把握するモデルを提示している。

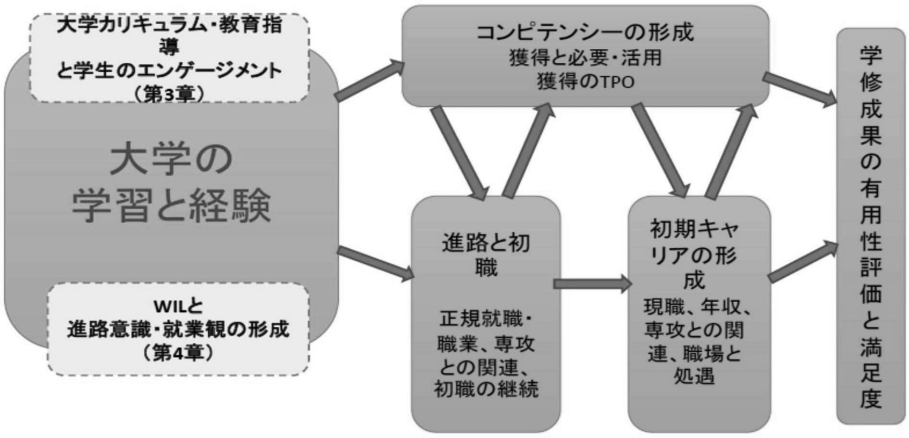


図５－１　本章の要因関連の枠組み

２．大学卒業からの進路と初職

2-1. 進路と初職

大学卒業後の進路と初職には，どのような傾向がみられるのだろうか。４分野別の卒業直後（卒業６ヶ月以内）の進路状況を示したものが，表５－１である。どの分野も卒業直後に８割以上の学生が就職しており，分野別では，就職率が高い順に，「国家資格（福祉・保育)」，「人文・ビジネス」，「観光」，「国家資格（栄養)」とつづく。「国家資格（栄養)」は，進学率が14.0％と，他分野よりも高くなっていることが相対的に卒業者を分母とする就職率を低く見せている。本報告書ではこれ以上に分析を進めることはしないが，この「国家資格（栄養)」での進学率の高さは，在学中の取得資格よりも上位資格の取得を目指すためのものなのか，周辺資格の取得により幅を広げるためのものなのか，検討の余地のあるところである。

表５－１　卒業直後の進路

（％）

		卒業直後（卒業６ヶ月以内）の進路					
		1 就職	2 進学	3 進学も就職もしていない	4 その他	計	*n*
1 観光	1 男性	80.0	8.0	12.0	0.0	100.0	*25*
	2 女性	84.4	6.3	3.1	6.3	100.0	*32*
	計	82.5	7.0	7.0	3.5	100.0	*57*
2 人文・ビジネス	2 男性	81.0	6.3	9.5	3.2	100.0	*189*
	3 女性	86.5	5.0	6.0	2.5	100.0	*200*
	計	83.8	5.7	7.7	2.8	100.0	*389*
3 国家資格等（福祉・保育）	2 男性	80.0	12.0	0.0	8.0	100.0	*25*
	3 女性	90.9	2.3	0.0	6.8	100.0	*44*
	計	87.0	5.8	0.0	7.2	100.0	*69*
4 国家資格（栄養士・管理栄養士）	3 男性	22.2	55.6	22.2	0.0	100.0	*9*
	4 女性	91.2	2.9	2.9	2.9	100.0	*34*
	計	76.7	14.0	7.0	2.3	100.0	*43*
計	3 男性	78.6	8.9	9.3	3.2	100.0	*248*
	4 女性	87.4	4.5	4.5	3.5	100.0	*310*
	計	83.5	6.5	6.6	3.4	100.0	*558*

2-2. 初職における就業の状況と専門教育との関連性

次に，初職の雇用形態や就業先の産業や職業についてみてみよう。その仕事は在学時に学んだ専門分野と関連あるものかどうか，さらに，初期キャリアとしてどのような就業パターンを辿っているのか，検討を進めていきたい。

表５－２　専攻分野・性別の初職就業形態

（%）

	初職の就業形態						
	1 正規の社員・職員として勤務	2 自営業・家業の仕事に就いた	3 契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	4 パートタイム・臨時などの仕事に就いた	9 その他	計	*n*
非資格系・男子	81.8	2.0	10.8	3.9	1.5	100.0	*203*
非資格系・女子	74.1	0.0	18.6	7.3	0.0	100.0	*220*
資 格 系・男子	74.2	0.0	12.9	12.9	0.0	100.0	*31*
資 格 系・女子	75.6	0.0	14.1	9.0	1.3	100.0	*78*
計	77.3	0.8	14.7	6.6	0.8	100.0	*532*

本節でのこれ以後の初期キャリアに関わる分析では，一部で，専攻分野４分野をそのまま用いるのではなく，国家資格系の保育・福祉と栄養を「資格系」に，人文・ビジネスと観光を「非資格系」に括って２分類とする。保育・福祉や栄養などの国家資格を人材養成の目的とする分野は，職業資格が専門教育の中に組み込まれており，人文・ビジネスや観光と異なり，教育における人材養成目的も明確で一定範囲の職業等をめざすものとなっているためである。また職業キャリアの検討には性別を考慮すべきであり，専門分野・性別でのサンプル確保の必要を重視したためでもある。

まず「資格系」「非資格系」別に，男女別の初職就業形態を示したのが，表５－２である。正規雇用で初職に就いた割合が最も高いのは，「非資格系・男子」（81.8%）であり，他は75%前後でほぼ並んだ状況であった。

つぎに，在学中の専攻教育分野と初職との関連性を示したのが，表５－３である。在学時に「専攻した分野と関連した仕事」に就いている割合が高いのは，「資格系・女子」（82.9%），「資格系・男子」（74.2%）であった。他方，人文・ビジネスや観光などの「非資格系」では，逆に，男女とも関連のない仕事に就職している割合が「非資格系・男子」（76.9%），「非資格系・女子」（70.2%）となっており，７割以上の学生が初職として，大学で学んだことと関連のない仕事に就いていることがわかる。

表５－３　初職と在学時の専攻との関連性

（%）

	初職は本学で専攻した分野と関連がありますか			
	1 関連分野である	2 関連分野でない	計	*n*
非資格系・男子	23.1	76.9	100.0	*199*
非資格系・女子	29.8	70.2	100.0	*218*
資 格 系・男子	74.2	25.8	100.0	*31*
資 格 系・女子	82.9	17.1	100.0	*76*
計	37.6	62.4	100.0	*524*

初職の移行段階での「産業」「職業」「就業先規模」等も，本研究会において大きな関心を寄せる指標である。本章では，初職の職業についての実態を明らかにしておく。

今回の大卒調査で用いた職業の分類は，短大・専門学校卒業生調査（EQ1卒業生調査）で17の専門分野に対して作成した分類表にもとづいて，IR 調査参加大学の進路特性に応じて改訂したものである。

実際の web 調査画面上では，それぞれの分野ごとに，EQ1調査と同様に，第一層の選択肢として主な就業先の職業の10カテゴリー程度を示し，第二層の選択肢には第一層で就業者が多いことが見込まれさらに細分類が可能な項目，あるいは就業者は少なく「その他」に分類される職業標準分類の大分類項目を設定している。EQ2調査の４専門分野についての職業の二層構造の調査項目カテゴリーは表５－４－１から表５－４－４のとおりである。ここでも，この分類カテゴリーは，それぞれの分野を有する参加大学関係者が＜協働 IR ＞として協議・検討した結果として採用されたものである。

表５－４－１　二層での職業調査項目－観光分野－

	【第１層】
23b	旅行企画などの営業・販売の事務
25a	グランドホステスなど旅客・貨物係事務
25a	総合職の事務
20q	一般事務
17j	その他の事務の職業
37c	ホテルスタッフ
39d	ブライダルスタッフ
39e	添乗員・観光ガイド
31i	その他のサービスの職業
7	営業の職業
27	販売の職業
	その他

⇒

	【第２層】
1	管理的な職業
2	専門的・技術的職業
40	保安の職業
44	農林漁業の職業
45	生産工程の職業
46	輸送・機械の運転
47	建設・採掘
48	運搬・清掃・包装等
49	その他（具体的に　　）

注１）２段階の職種項目は関係する短大専門学校調査項目をもとに大卒調査票に適用

注２）濃い網掛けは大卒調査票のみで採用されている職種

表５－４－２　二層での職業調査項目－人文・ビジネス分野－

	【第１層】
25a	総合職の事務
20d	一般事務
21	会計事務
20e	医療事務
22	生産・関連事務
23	営業・販売関連事務
17d	その他の事務
7	営業の職業
8	販売の職業
10	情報処理技術者
2g	その他の専門的・技術的職業
37	接客・給仕の職業
31e	その他のサービスの職業
	その他

⇒

	【第２層】
1	管理的な職業
40	保安の職業
44	農林漁業の職業
45	生産工程の職業
46	輸送・機械の運転
47	建設・採掘
48	運搬・清掃・包装等
49	その他（具体的に　　）

注１）２段階の職種項目は関係する短大専門学校調査項目をもとに大卒調査票に適用

注２）濃い網掛けは大卒調査票のみで採用されている職種

表５－４－３　二層での職業調査項目－国家資格等（福祉・保育）分野－

	【第１層】
12c	介護福祉士として福祉施設指導専門員
12d	その他の介護・福祉指導の専門的職業
33a	訪問介護員、ヘルパー
37b	接客・給仕
31d	その他サービス職業
12a	保育士
13a	幼稚園教員
13b	その他の教育の職業
2e	その他の専門的・技術的職業
28d	福祉用具などの販売
27c	その他の販売の職業
23a	福祉に関わる営業販売関連の相談事務
20b	介護、医療に関わる一般事務
17b	その他の事務の職業
	その他

⇒

	【第２層】
1	管理的な職業
40	保安の職業
44	農林漁業の職業
45	生産工程の職業
46	輸送・機械の運転
47	建設・採掘
48	運搬・清掃・包装等
49	その他（具体的に）

注１）２段階の職種項目は関係する短大専門学校調査項目をもとに大卒調査票に適用

注２）濃い網掛けは大卒調査票のみで採用されている職種

表５－４－４　二層での職業調査項目－国家資格（栄養士・管理栄養士）－

	【第１層】
10h	管理栄養士（主に調理）
10i	管理栄養士（主に栄養指導）
10j	管理栄養士（販売その他）
10k	栄養士（主に調理）
10l	栄養士（販売その他）
13c	栄養教諭
13d	その他の教員
2c	その他の専門的・技術的職業
45a	食料品検査の職業
45b	その他の生産工程の職業
20a	商品開発
25a	総合職の事務
17a	その他の事務
	その他

⇒

	【第２層】
1	管理的な職業
27	販売の職業
31	サービスの職業
40	保安の職業
44	農林漁業の職業
46	輸送・機械の運転
47	建設・採掘
48	運搬・清掃・包装等
49	その他（具体的に）

注１）２段階の職種項目は関係する短大専門学校調査項目をもとに大卒調査票に適用

注２）濃い網掛けは大卒調査票のみで採用されている職種

これらの職業分布を専門分野横断的に集計・分析する際には，まず表５－５のように統合分類（小分類）を作成し，それをもとに，日本職業標準分類の大分類カテゴリーに準ずる大分類を作成している。

表５－５　EQ2大卒調査の職業分類表（４分野統合版）

100	管理的な職業
200	専門的・技術的職業
240	情報処理技術者
250	管理栄養士（主に調理）
251	管理栄養士（主に栄養指導）
252	管理栄養士（販売その他）
253	栄養士（主に調理）
254	栄養士（販売その他）
270	介護福祉士として福祉施設指導専門員
275	その他の介護・福祉指導の専門的職業
280	保育士
287	栄養教諭
288	その他の教育の職業
289	その他の教員
290	その他の専門的・技術的職業
300	事務の職業
310	総合職の事務
320	一般事務
321	介護、医療に関わる一般事務
324	商品開発
325	医療事務
330	会計事務
340	生産・関連事務
350	営業・販売関連事務
355	旅行企画などの営業・販売の事務
390	その他の事務の職業
395	グランドホステスなど旅客・貨物係事務
399	営業の職業
400	販売の職業
490	その他の販売の職業
520	訪問介護員、ヘルパー
550	接客・給仕の職業
560	ホテルスタッフ
590	その他のサービスの職業
595	ブライダルスタッフ
600	保安の職業
700	農林漁業の職業
800	生産工程の職業
830	食料品検査の職業
850	輸送・機械の運転
870	建設・採掘
900	運搬・清掃・包装等
990	その他

今回の卒業生調査データによる，「資格系」「非資格系」での初職の職業を大分類レベルで比較したもの（性別の分類を含む）が表５－６である。資格系で専門的技術的職業に多数が就業するのに対して，「非資格系」では事務の職業が男女とも半数程度となっている。さらに，一般には大卒学歴を求めないと考えられる販売やサービスの職業，生産工程等の職業についても非資格系では男女とも３割近くが就職している。

表５－６　性別・専攻分野別の初職職業の分布

（%）

	初職（大分類）								
	1 管理の職業	2 専門技術的職業	3 事務の職業	4 販売の職業	5 サービスの職業	6 保安・農林漁・生産工程・運搬	9 その他	計	*n*
非資格系・男子	2.5	16.5	47.5	11.5	10.0	6.5	5.5	100.0	*200*
非資格系・女子	1.9	13.1	54.9	10.8	14.1	0.9	4.2	100.0	*213*
資 格 系・男子	0.0	51.6	6.5	0.0	9.7	6.5	25.8	100.0	*31*
資 格 系・女子	0.0	76.0	8.0	1.3	9.3	1.3	4.0	100.0	*75*
計	1.7	25.8	42.4	9.1	11.6	3.5	6.0	100.0	*519*

大学教育の目的としての人材養成の範囲は，大学設置基準第２条などでその設定が求められている。もちろん，それが職業のカテゴリーに対応させることで大学教育の広範囲の展望を把握しきれるものではないが，本報告書においては，職業の範囲が大学教育の専門的知識と対応した分野であるのかどうか，４分野別で比較しておくこととする。

表５－７－１から表５－７－４は，左列に分野ごとの職業構成を小分類単位で示すとともに，右列ではそれぞれの職業に就職した卒業生が，その職業において大学の専攻分野との関連性がありと回答した比率を示している。例えば，表５－７－１の観光分野では「専門的技術的職業」への就職者が7.5%あり，しかしながら大学の専攻分野との関連性がありと回答した比率は50.0%にとどまっている。

他方，職業大分類「サービスの職業」の中でも，「ホテルスタッフ」の場合，7.5％の就職者があり，その全員100％が大学の専攻分野との関連性を認めている。考え方によっては，後者の方が大学専門教育として望ましい進路であると考えられる場合もあるかもしれない。

ともあれ，卒業生全体の初職とその専門関連性に係る傾向を要約的に考えてみると，「非資格系」の「観光」分野，「人文・ビジネス」分野では大学の専攻分野との関連性がそれぞれ43.4％，24.5％であるのに対して，「資格系」の「国家資格等（福祉・保育）」と「国家資格（栄養士・管理栄養士）」ではそれぞれ73.3％，89.7％と高い比率になっている。

この数値自身は表５－３で検討したものと同等の指標であるが，本表では要約指標をもうひとつ用意している。

すなわち，「専攻分野との関連性」がいろいろな「初職職業」によってどの程度分離しているのか，相関比（eata）である。典型的に表５－７－４で明らかなように，「栄養士」などの職業につけば全員が専攻分野と「関連あり」と回答し，「食料品検査の職業」の場合には「関連なし」と回答するというように，職業ごとに100％か０％かに分かれる場合は完全関連であり，相関比は1.000となる。これに対し，「人文・ビジネス」分野では同じ職業でも，ある卒業生は「関連あり」と回答し，別の卒業生は「関連なし」と回答するというように職業ごとの関連度の分離が明確ではなく，相関比が .422と低くなっている。この分野は，職業分類でみる限り「特定のまたは一定の職業を目的とする教育」に相当しないと判断することができる。本調査の４分野については，全体合計での「専門関連性」の高さと，クロス集計表における「職業間の分離度」である相関比の高さは連動しているが，調査対象分野を拡げていけば「専門関連性」は低いが特定の職業における関連性と別の職業における関連性の開きが大きい分野も想定される。

ともあれ，産業における関連性など他の職業観連次元での指標も可能であるが，この相関比などの関連度指標が，職業教育特性を示す指標として適切に位置づけることができ，また教育改善にかかる職業目的の適切性にかかる評価指標として位置づけることができるのである。

表５－７－１　初職の職業構成とそれぞれの職業の専攻分野との関連性（観光）　（％）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
100 管理的な職業	1.9	0.0
200 専門的・技術的職業	7.5	50.0
310 総合職の事務	5.7	0.0
320 一般事務	13.2	42.9
355 旅行企画などの営業・販売の事務	1.9	100.0
390 その他の事務の職業	1.9	0.0
395 グランドホステスなど旅客・貨物係事務	1.9	100.0
399 営業の職業	9.4	20.0
400 販売の職業	22.6	33.3
560 ホテルスタッフ	7.5	100.0
590 その他のサービスの職業	9.4	60.0
595 ブライダルスタッフ	1.9	0.0
850 輸送・機械の運転	1.9	100.0
900 運搬・清掃・包装等	1.9	0.0
990 その他	11.3	50.0
計	100.0	43.4
n	*53*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=.564

表５－７－２　初職職業と専攻分野との関連性（人文・ビジネス）

（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
100 管理的な職業	2.2	37.5
240 情報処理技術者	3.0	72.7
290 その他の専門的・技術的職業	12.8	53.2
310 総合職の事務	8.7	13.3
320 一般事務	12.5	11.1
325 医療事務	1.9	0.0
330 会計事務	0.5	50.0
350 営業・販売関連事務	10.1	10.8
390 その他の事務の職業	3.8	28.6
399 営業の職業	16.1	25.4
400 販売の職業	9.5	2.9
550 接客・給仕の職業	4.4	31.3
590 その他のサービスの職業	6.8	20.0
600 保安の職業	0.3	0.0
800 生産工程の職業	1.1	0.0
850 輸送・機械の運転	1.4	20.0
900 運搬・清掃・包装等	1.1	25.0
990 その他	3.8	50.0
計	100.0	24.5
n	*367*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=.422

表５－７－３　初職職業と専攻分野との関連性（国家資格等（保育・福祉））

（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
100 管理的な職業	1.3	0.0
270 介護福祉士として福祉施設指導専門員	10.5	100.0
275 その他の介護・福祉指導の専門的職業	34.2	100.0
280 保育士	1.3	0.0
288 その他の教育の職業	5.3	100.0
290 その他の専門的・技術的職業	5.3	75.0
321 介護、医療に関わる一般事務	2.6	50.0
390 その他の事務の職業	5.3	50.0
490 その他の販売の職業	1.3	0.0
520 訪問介護員、ヘルパー	10.5	87.5
550 接客・給仕の職業	2.6	50.0
590 その他のサービスの職業	2.6	100.0
800 生産工程の職業	1.3	0.0
900 運搬・清掃・包装等	2.6	0.0
990 その他	13.2	20.0
計	100.0	73.3
n	*76*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=.802

表５－７－４　初職職業と専攻分野との関連性（国家資格（栄養士・管理栄養士））（％）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
250 管理栄養士（主に調理）	20.0	100.0
251 管理栄養士（主に栄養指導）	20.0	100.0
252 管理栄養士（販売その他）	5.0	100.0
253 栄養士（主に調理）	17.5	100.0
254 栄養士（販売その他）	5.0	100.0
287 栄養教諭	5.0	100.0
289 その他の教員	7.5	100.0
290 その他の専門的・技術的職業	5.0	100.0
324 商品開発	2.5	100.0
390 その他の事務の職業	5.0	0.0
830 食料品検査の職業	2.5	0.0
990 その他	5.0	0.0
計	100.0	89.7
n	*40*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=1.000

３．初期キャリア形成と現在の就業状況

3-1. 卒業後から現在までの初期キャリアの調査項目について

卒業後１年から10年の範囲において初期キャリアがどのように形成されているのか，現職までのキャリア形成過程をここでは検討したい。卒業生調査において初期キャリアから現在の状況の把握する方法として，細大漏らさず把握しようとすると，さまざまに生じるキャリアイベントの生起順序を尊重して逐次質問していく方法と，卒業から現在までのカレンダーの時間軸を固定し，それぞれの時期に何をしていたのかを尋ねる方法とがあるが，それぞれ一長一短である。ここではさらにこれらの観点を省略して，卒業直後と現在の状況を尋ねる構造をとっている。このため，いくつかのキャリアイベントを飛ばして現在の状況に設問を移す必要がある。本卒業生調査では，図５－２のような設問構造を設定している。

一見，自然な調査項目の流れのモデルとなっているが，「初職継続」の回答者は，「現在の状況」についての設問が表示されず，すべて「主に仕事」の選択肢を仮定して以下の分岐に誘導されていく。初職は継続しながらも，「その初職」が「主になされる他の活動」の「従たる活動」になっていくことも想定されるし，そもそも「リカレント学習者」の場合，仕事に就いたとして，それは「従」であるなどの可能性を否定できない。

結局のところこの調査項目の流れの「自然さ」と見えるのは，新規学校卒業後に初期キャリアをスタートするという伝統的大学生モデルを前提としており，そうした仮定に依拠した設問構造であり，それに沿った集計を以下行っている。すなわち，リカレントな学習者を抱えるという課題を日本の第三段階教育がクリアーしていくときには，こうした設問構造は不適切になっていき，さらなる個人ごとの調査票カスタマイズが必要となるはずである。

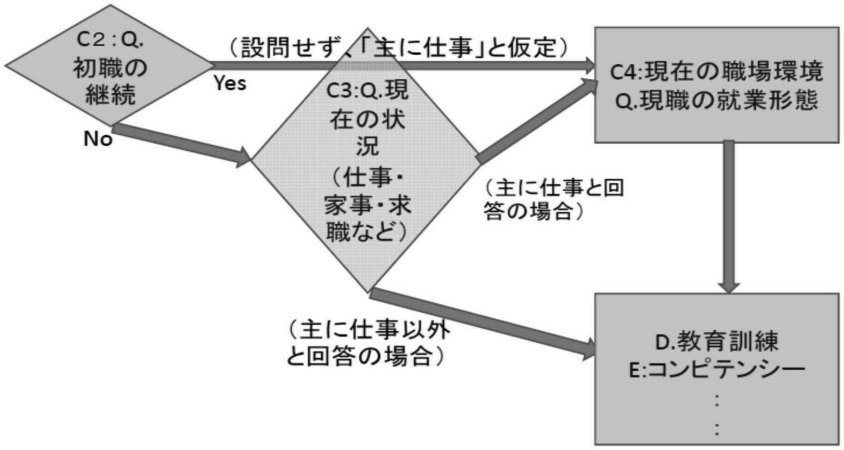


図５－２　卒業後の進路・初職から現在の状況への調査項目のながれ

3-2. 初職継続から現在の就業までの初期キャリア

上述の前提のもとで，初期キャリアと現在の状況を検討する。まず初職の継続状況を「資格系」と「非資格系」で比較したものが，表５－８である。初職の継続率が高かったのは「非資格系・女子」(63.9%)，「資格系・男子」(58.1%）であったが，「非資格系・男子」「資格系・女子」は，約半数が初職を辞めていた。今回の調査対象の国家資格は，福祉や保育を対象としているため，この業界は離職率が高いという課題も抱えている。

初職継続率については，就職後の年数とともに減少するものであるため，その傾向を卒業年３カテゴリーでみることとした。表５－９のとおり，「卒後７－10年」で初職を継続しているのは全体として34.6% であり，「卒後７－10年」までで６割以上が初職を離職していることが明らかになった。他方で，卒業直後の３年以内の初職継続状況では，資格系の女子では94.4% と９割以上が初職を継続している。「卒後７－10年」での初職継続状況の割合が高いのは，「資格系・女子＞非資格系・女子＞資格系・男子＞非資格系・男子」であった。他方で卒業３年までの初職継続率は全体として８割前後であり，逆にいえば，卒業３年まで，平均的に卒業２年程度で２割の卒業生が初職を離職していることも留意すべきところであろう。

表５－８　初職の継続状況（専門分野・性別）　（%）

	初職の継続		計	*n*
	初職を続けている	初職は辞めている		
非資格系・男子	51.5	48.5	100.0	*202*
非資格系・女子	63.9	36.1	100.0	*219*
資 格 系・男子	58.1	41.9	100.0	*31*
資 格 系・女子	50.6	49.4	100.0	*77*
計	56.9	43.1	100.0	*529*

表５－９　卒年グループ別の初職の継続率（専攻分野・性別）

	初職の継続率					
	卒業３年まで		卒業４－６年		卒業７－10年	
	%	*n*	%	*n*	%	*n*
非資格系・男子	70.1	*77*	49.3	*69*	27.8	*54*
非資格系・女子	82.9	*105*	52.2	*67*	38.3	*47*
資 格 系・男子	83.3	*12*	40.0	*10*	28.6	*7*
資 格 系・女子	94.4	*18*	32.3	*31*	44.0	*25*
計	79.2	*212*	46.9	*177*	34.6	*133*

3-3. 調査時現在の状況と現職

卒業生の調査時点現在の状況を専門分野４分類と性別で示したのが，表５－10である。求職者が，専攻分野・性別にかかわらず５％くらい発生しており，また大卒女性の３～９％が「主に家事・育児・介護等」の状況となっている。

表５－10　現在の状況

（%）

		現在の状況						
		1 主に仕事をしている	2 主に学生として教育機関に在籍	3 主に家事、育児、介護など	4 主に求職活動	5 その他	計	*n*
観光	男性	79.2	4.2	0.0	8.3	8.3	100.0	*24*
	女性	96.6	0.0	3.4	0.0	0.0	100.0	*29*
	計	88.7	1.9	1.9	3.8	3.8	100.0	*53*
人文・ビジネス	男性	90.9	0.0	0.6	6.8	1.7	100.0	*176*
	女性	80.5	1.1	8.9	5.3	4.2	100.0	*190*
	計	85.5	0.5	4.9	6.0	3.0	100.0	*366*
国家資格等（福祉・保育）	男性	87.5	4.2	0.0	4.2	4.2	100.0	*24*
	女性	84.1	2.3	9.1	4.5	0.0	100.0	*44*
	計	85.3	2.9	5.9	4.4	1.5	100.0	*68*
国家資格（栄養士・管理栄養士）	男性	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	*7*
	女性	90.9	0.0	9.1	0.0	0.0	100.0	*33*
	計	92.5	0.0	7.5	0.0	0.0	100.0	*40*
専攻分野計	男性	89.6	0.9	0.4	6.5	2.6	100.0	*231*
	女性	83.8	1.0	8.4	4.1	2.7	100.0	*296*
	計	86.3	0.9	4.9	5.1	2.7	100.0	*527*

就業者の就業形態は，表５－11のとおりであり，多数が正規就業しているものの，非資格系出身の女性では，「契約・派遣などの非正規」が22.2％あり，「パートタイム・臨時」も加えて30.1％となっている。

表５－11　現職の就業形態

（%）

	現職の就業形態						
	1 正規の社員・職員として勤務	2 自営業・家業の仕事に就いた	3 契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	4 パートタイム・臨時などの仕事に就いた	9 その他	計	*n*
非資格系・男子	80.0	3.3	10.6	5.6	0.6	100.0	*180*
非資格系・女子	68.8	0.5	22.2	7.9	0.5	100.0	*189*
資 格 系・男子	78.6	3.6	10.7	3.6	3.6	100.0	*28*
資 格 系・女子	79.4	0.0	10.3	8.8	1.5	100.0	*68*
計	75.3	1.7	15.3	6.9	0.9	100.0	*465*

続いて，表５－12は，現在の職業（大分類）である。初職を辞めている者も多いが，初職（表５－６）と極めて類似する職業構成となっていることが確認できる。

表５－12　専門分野・性別による現職の職業（大分類）

（%）

	現職（大分類）							計	*n*
	1 管理の職業	2 専門技術的職業	3 事務の職業	4 販売の職業	5 サービスの職業	6 保安・農林漁・生産工程・運搬	9 その他		
非資格系・男子	3.2	18.2	43.3	9.6	11.8	8.6	5.3	100.0	*187*
非資格系・女子	1.6	14.6	57.8	8.3	11.5	1.0	5.2	100.0	*192*
資 格 系・男子	0.0	51.7	6.9	3.4	6.9	6.9	24.1	100.0	*29*
資 格 系・女子	0.0	79.1	10.4	0.0	7.5	3.0	0.0	100.0	*67*
計	1.9	27.4	42.3	7.4	10.7	4.6	5.7	100.0	*475*

次に，現在の年収を専門分野・性別に示したのが，表５－13である。表５－13から明らかなように，同じタイプの専門分野でも，男性の方が女性よりも高い年収を得ており，ここから平均値を推計すると，「非資格系・男子」が307.4万円と最も高く，「非資格系・女子」では225.9万円と80万円近い平均年収の差がある。これに対して「資格系」では，男子294.8万円に対して女子256.7万円であり，性別格差は40万円で，相対的に格差は小さい。

表５－13　現職の年収

（%）

	現在の現職からの年収								計	*n*
	100万円未満	100-150万円	150-200万円	200-300万円	300-400万円	400-500万円	500-600万円	600万円以上		
非資格系・男子	4.2	7.4	11.6	31.1	24.2	14.7	4.7	1.6	100.0	*190*
非資格系・女子	5.6	12.8	24.5	39.8	13.8	3.1	0.5	0.0	100.0	*196*
資 格 系・男子	0.0	17.2	3.4	27.6	34.5	17.2	0.0	0.0	100.0	*29*
資 格 系・女子	4.5	10.4	13.4	40.3	25.4	4.5	1.5	0.0	100.0	*67*
計	4.6	10.6	16.6	35.7	20.7	8.7	2.3	0.6	100.0	*482*

現職の１週間あたりの労働時間を専攻分野・性別に示したのが，表５－14である。専攻分野別にみると，「非資格系」では，一方で労働時間30時間未満の卒業生が男女とも１割以上あるが，長時間労働の者も多いため，平均すると「資格系」とほとんど労働時間に違いは見られなかった。むしろ男性の方が，「資格系」でも「非資格系」でも長時間労働が多い。本調査サンプルにおける大卒者の労働時間は平均週43.2時間であり，それぞれの専攻分野で男性の方が５～９時間長く労働している。

表５－14　現職の労働時間

（%）

	週当たり労働時間									計	*n*
	週 1-9時間	週 10-19時間	週 20-29時間	週 30~34時間	週 35~40時間	週 41~45時間	週 46~50時間	週 51-59時間	週 60時間以上		
非資格系・男子	5.3	1.6	4.3	0.0	13.3	21.3	21.3	16.0	17.0	100.0	*188*
非資格系・女子	6.7	2.1	3.1	4.7	23.3	25.9	15.0	13.5	5.7	100.0	*193*
資 格 系・男子	0.0	0.0	6.9	3.4	10.3	20.7	20.7	20.7	17.2	100.0	*29*
資 格 系・女子	3.0	3.0	4.5	4.5	38.8	19.4	16.4	6.0	4.5	100.0	*67*
計	5.2	1.9	4.0	2.7	20.8	22.9	18.0	13.8	10.7	100.0	*477*

3-4. 大学での専攻分野と現職との関連性

現在の職業と在学時の専門との関連性を専攻分野・性別で示したのが，表５－15である。この傾向は，初職と近似しており，「非資格系」では「関連分野でない」という回答が男女とも７割以上，「資格系」では「関連分野である」という回答が男女とも７割以上となっている。

表５－15　現職の大学専攻分野との関連性　（%）

	現職は本学で専攻した分野と関連がありますか			
	１関連分野である	２関連分野でない	計	*n*
非資格系・男子	21.0	79.0	100.0	*186*
非資格系・女子	28.3	71.7	100.0	*191*
資 格 系・男子	72.4	27.6	100.0	*29*
資 格 系・女子	83.6	16.4	100.0	*67*
計	35.9	64.1	100.0	*473*

表５－16－１から表５－16－４は，職業小分類ごとに専門との関連性を検討したものである。卒業直後の初職における大学専門分野との関連性（表５－７－１～５－７－４）の傾向と比較してみると，それぞれの分野で移動はあるものの，在学時の専門分野との関連性はほとんど変化していないこと，つまりそれぞれの専攻分野から関連する職業の範囲についての評価が，卒業直後と初期キャリア継続後で変化していないことがわかる。これは，調査の性格上，現時点の関連性の認識が卒業時の評価にまで及んでいるといったバイアスを検討する必要があることも示唆している。

表５－16－１　現職と在学時の専攻分野との関連性－観光分野－　（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
200 専門的・技術的職業	12.0	50.0
310 総合職の事務	4.0	0.0
320 一般事務	16.0	25.0
355 旅行企画などの営業・販売の事務	4.0	100.0
395 グランドホステスなど旅客・貨物係事務	2.0	100.0
399 営業の職業	10.0	20.0
400 販売の職業	22.0	18.2
560 ホテルスタッフ	4.0	100.0
590 その他のサービスの職業	12.0	50.0
595 ブライダルスタッフ	2.0	0.0
850 輸送・機械の運転	4.0	100.0
990 その他	8.0	25.0
計	100.0	36.7
n	*50*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=0.570

表５－16－２　現職と在学時の専攻分野との関連性－人文・ビジネス分野－　（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
100 管理的な職業	2.7	33.3
240 情報処理技術者	2.4	75.0
290 その他の専門的・技術的職業	14.9	44.9
310 総合職の事務	9.2	16.7
320 一般事務	11.9	7.5
325 医療事務	2.7	0.0
330 会計事務	0.6	50.0
330 生産・関連事務	1.2	25.0
350 営業・販売関連事務	8.9	10.3
390 その他の事務の職業	5.4	35.3
399 営業の職業	12.8	20.9
400 販売の職業	6.8	4.5
550 接客・給仕の職業	5.1	18.8
590 その他のサービスの職業	5.7	15.8
600 保安の職業	0.9	0.0
700 農林漁業の職業	0.3	0.0
800 生産工程の職業	1.2	0.0
850 輸送・機械の運転	1.2	25.0
870 建設・採掘	0.3	0.0
900 運搬・清掃・包装等	1.2	25.0
990 その他	4.8	33.3
計	100.0	22.2
n	*367*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=0.388

表５－16－３　現職と在学時の専攻分野との関連性－国家資格等（福祉・保育）　（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
270 介護福祉士として福祉施設指導専門員	10.5	100.0
275 その他の介護・福祉指導の専門的職業	34.2	95.2
288 その他の教育の職業	5.3	100.0
290 その他の専門的・技術的職業	5.3	57.1
321 介護、医療に関わる一般事務	2.6	50.0
390 その他の事務の職業	5.3	33.3
490 その他の販売の職業	1.3	0.0
520 訪問介護員、ヘルパー	10.5	100.0
550 接客・給仕の職業	2.6	66.7
590 その他のサービスの職業	2.6	0.0
800 生産工程の職業	1.3	0.0
900 運搬・清掃・包装等	2.6	0.0
990 その他	13.2	42.9
計	100.0	74.6
n	*76*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=0.714

表５－16－４　現職と在学時の専攻分野との関連性－国家資格（栄養士・管理栄養士）－（%）

	構成比	大学の専攻分野と関連あり
250 管理栄養士（主に調理）	8.3	100.0
251 管理栄養士（主に栄養指導）	38.9	100.0
252 管理栄養士（販売その他）	11.1	100.0
253 栄養士（主に調理）	8.3	100.0
287 栄養教諭	2.8	100.0
289 その他の教員	8.3	66.7
290 その他の専門的・技術的職業	5.6	100.0
324 商品開発	2.8	100.0
390 その他の事務の職業	8.3	0.0
830 食料品検査の職業	2.8	0.0
990 その他	2.8	0.0
計	100.0	82.9
n	*36*	

注）関連性に関する相関比（Eata）=0.931

ここで，初職と現職の相関比をまとめながら，IR としての卒業生調査において固有の職業分類を用いることの適切性について評価をしてみよう。表５－17は，上段に本章の表５－７－１～表５－７－４および表５－16－１～表５－16－４までで明らかにしている，IR 機関固有の職業分類をもとにした相関比を，下段に学校基本調査等でも用いられている日本標準職業分類・大分類にもとづく相関比を表示している。

大学教育が職業への移行に適切に対応していることへのひとつの基準・観点として，より多くの卒業生が大学専攻分野と関連する職業へ就職することが望ましいはずである。しかし，大学教育が「特定のまたは一定の職業」のための教育という，職業の必要に対応していくために，どのような職業が専攻分野と関連するものなのか，どのような職業が専攻分野と関連しないのか，その識別が重要である。表５－17から明らかなように，特に観光分野においてはこの２つの職業分類による相関比に大きな違いが見られる。この固有指標で見れば観光分野は国家資格等の職業教育を担う分野ほどではないにしても，それに近い程度に，職業と専攻分野との関連性の識別が可能となるのである。「人文・ビジネス」においては２つの分類間で明確な差はないが，狭義の職業だけでなく産業分野など職業の各要素を検討していくことで，「人材養成の目的」の明確化とその成果について，実証的な検証が可能となるのである。職業への移行を評価するための，専攻分野固有の職業の分類が適切であることが確認できるのである。

表５－17　職業と大学専攻との関連度の指標比較（職業分類指標による相関比）

		観光	人文・ビジネス	国家資格等（福祉・保育）	国家資格（栄養士・管理栄養士）
IR 機関対応小分類	初職	.564	.422	.802	1.000
	現職	.570	.388	.714	.931
日本標準職業大分類	初職	.310	.385	.738	.902
	現職	.335	.326	.645	.809

3-5. 現在までの職業キャリアの評価と職業キャリアにかかる満足度

現在までのキャリア・仕事の評価として，「昇進・昇格」「賃金水準」「責任の重さ」に関して「学歴に相応しい評価をされているのかどうか」を尋ねた。表５－18は，上の部分でその回答分布を，下の部分で専門分野・性別の平均値を示したものである。「責任の重さ」についてはほぼ半数が「学歴に相応しい評価」（５または４）をされていると回答しているものの，「賃金水準」はそれに見合ったものになっておらず，昇進・昇格も「学歴に相応しい評価をされていない」（１または２）という回答が多くなっている。

専門分野・性別では，「資格系」出身者の方が，「非資格系」よりも「責任の重さ」「賃金水準」という点で，より学歴に相応しい高い評価をされている。

また，性別には「賃金水準」について，男性の方が女性よりも，相対的に「学歴に相応しい評価」がなされていないと感じている。表５－14で明らかにしているように，同じ調査サンプル大学出身者の中で，絶対額としては男子の方が女子のよりも高い年収額になっていた。すなわち，他の大卒者等と比較して，あるいは他の企業の大卒者と比較した相対的な不満感が，女子よりも男子の方が強いと見ることができる。

表５－18　学歴処遇についての評価と現職への満足度

（%）

		昇進や昇格	賃金水準	責任の重さ	*n*
学歴処遇	5 学歴にふさわしい評価	13.3	14.3	19.4	
	4	20.0	22.8	29.6	
	3	27.4	30.4	28.2	
	2	13.9	16.1	7.3	
	1 学歴にふさわしい評価されていない	25.4	16.3	15.5	
計（比率）		100.0	100.0	100.0	*496*

（上段：平均値，*下段：標準偏差*）

	昇進や昇格	賃金水準	責任の重さ	*n*
1 非資格系・男子	2.69 1.30	2.85 1.24	3.17 1.26	*190*
2 非資格系・女子	2.82 1.40	3.05 1.29	3.26 1.32	*195*
3 資 格 系・男子	2.93 1.54	2.89 1.42	3.46 1.53	*28*
4 資 格 系・女子	3.00 1.32	3.38 1.17	3.57 1.19	*68*
計（平均値と*標準偏差*）	2.80 1.36	3.01 1.27	3.28 1.29	*481*

次に，大卒者の現在の職場環境やそこでの処遇についての回答結果が，表５－19である。「社会に役立つ機会」「仕事をする上での自律性」「新たなことを学ぶ機会」「男女差別のない処遇がなされている」「職場の雰囲気のよさ」という項目について，５件法の平均値で４近くとなっているのに対して，「本学で得た知識・技能の活用」は，特に低い評価となっている。

これらを専攻分野別にみれば，特に「資格系」で「社会に役立つ機会」「仕事をする上での自律性」「新たなことを学ぶ機会」の評価が高く，「非資格系」で「本学で得た知識・技能の活用」が低い数字になっている。また，性別にみると，「本学で得た知識・技能の活用」は女子の方が高く，男子が低くなっている。すなわち，「非資格系」の男子と，「資格系」の女子はこの点での開きは特に大きい。「資

格系・女子」の63.2%が「本学で得た知識・技能を活用している」（５または４）と回答しているのに対して，「非資格系・男子」では24.9%にとどまり，逆に「非資格系・男子」では「本学で得た知識・技能を活用していない」（１または２）が51.9%あるのに対して，「資格系・女子」ではわずか10.3%にとどまっている。

表５－19　現在の職場と現職の特色とその満足度

（上段：平均値，*下段：標準偏差*）

	a 本学で得た知識・技能の活用	b 自分の適性を活かす機会	c 新たなことを学ぶ機会（能力開発）	d 仕事をする上での自律性	e 社会に役立つ機会	f 職場の雰囲気のよさ	g 男女差別のない処遇がなされている	h 収入や福利厚生の整備	*n*
1 非資格系・男子	2.55 1.33	3.43 1.16	3.77 1.20	3.75 1.11	3.82 1.06	3.67 1.10	3.73 1.18	3.39 1.19	*189*
2 非資格系・女子	3.16 1.29	3.73 0.97	3.81 1.12	3.88 0.98	3.91 1.06	3.88 1.12	3.89 1.05	3.46 1.17	*192*
3 資格系・男子	3.28 1.53	3.97 1.24	4.14 1.25	4.24 1.12	4.38 0.78	3.93 1.00	4.17 0.93	3.52 1.33	*29*
4 資格系・女子	3.84 1.08	4.03 1.01	4.18 0.94	4.18 0.89	4.24 0.92	3.99 1.01	4.03 1.03	3.81 1.06	*67*
計	3.02 1.36	3.67 1.09	3.87 1.14	3.89 1.04	3.95 1.04	3.81 1.09	3.86 1.10	3.48 1.18	*477*

注）各項目について、「５あてはまる」から「１あてはまらない」までの５件法回答

そして，職業生活のさまざまの諸側面を総合する評価として「現職の満足度」を示したのが，表５－20である。全体には，半数以上の54.3%が現職に「満足」（５＋４）と回答しているが，女子の比率は７割近くになっているのに対して，男子ではぎりぎり５割であり，性別での大きな開きがある。この点では専攻分野の「資格系」，「非資格系」での差異は相対的に小さいとみられる。

表５－20　現職の満足度（専門分野・性別）

（%）

	現職の満足度						
	5 とても満足している	4	3	2	1 とても不満である	計	*n*
非資格系・男子	19.0	30.7	29.1	15.9	5.3	100.0	*189*
非資格系・女子	17.2	51.7	17.2	10.3	3.4	100.0	*29*
資格系・男子	14.4	37.1	30.4	13.4	4.6	100.0	*194*
資格系・女子	10.3	58.8	23.5	2.9	4.4	100.0	*68*
計	15.8	38.5	28.1	12.7	4.8	100.0	*480*

４．進路・初期キャリア形成と総合的な大学教育に関する満足度

以上の卒業直後の進路や初期キャリアの状況は，大学教育の総合的な満足度に同関連しているのか，前節までで扱った指標の単相関を検討する。まずは，表５－21のとおり，卒業直後の進路と初職である。４つの変数を検討してみたところ，「初職を継続」しているかどうかということよりも，「初職が大学での専攻分野と関連」しているかどうかということが，大学への満足度とより強く関連している。また，「学卒未就業」や「非正規就業」が大学への不満足を高めるかどうか，本サンプルの限りでは相関係数は統計的に有意なものではなかった。

表５－21　卒後直後の進路・初職と総合的満足度

	相関係数	有意確率（両側）	*n*
初職の専攻分野との関連度	-.153	.003	*380*
初職の継続	-.115	.025	*384*
進路：「進学も就職もしない」ダミー	-.089	.080	*391*
初職就業形態：「契約・派遣など非正規」「パートタイム・臨時など」ダミー	.037	.475	*381*

注）網掛けは１％水準で有意

初期キャリアと現職の状況と大学教育への満足度の相関について，６変数で検討したのが，表５－22である。「現職が大学での専攻分野と関連」しているかどうかと大学教育の総合的な満足度が統計的に有意に相関していることが明らかである。反対に，「求職中」「主に家事・育児」「年収」「労働時間」「非正規就業」が満足度と統計的に有意な相関を示していないことも明らかになった。

表５－22　現職の状況と大学への総合的満足度との相関

	相関係数	有意確率（両側）	*n*
現職の大学専攻分野との関連度	-.146	.007	*340*
現職の状況：「家事・育児・介護など」ダミー	.077	.333	*162*
労働時間	-.042	.442	*345*
現職の就業形態：「契約・派遣など非正規」「パートタイム・臨時など」ダミー	.031	.562	*342*
現職の状況：［主に求職活動」ダミー	-.042	.594	*162*
年収	-.025	.645	*350*

注）網掛けは１％水準で有意

最後に，現職の職場環境や仕事内容への評価と大学教育の満足度との相関を示したのが，表５－23である。これまでの表５－21，表５－22では「専攻分野との関連度」のみが一定の相関を示していたのに対して，「職場の処遇と環境」の７指標，「職場での学歴評価」の３指標，「現職への満足度」のほとんどが大学教育への満足度と統計的に有意な相関を示している。

特に「本学で得た知識・技能の活用」を高く認識するものほど「大学総合的満足度」が高いという関係について，個々で検討している中で最も大きい相関係数が得られた。

表５－23　学歴処遇・職場の状況と満足度

	相関係数	有意確率（両側）	*n*
職場の処遇と環境１：本学で得た知識・技能の活用	.346	.000	*350*
職場の処遇と環境４：仕事をする上での自律性	.264	.000	*349*
職場の処遇と環境３：新たなことを学ぶ機会（能力開発）	.234	.000	*350*
職場の処遇と環境２：自分の適性を活かす機会	.233	.000	*350*
職場の処遇と環境７：男女差別のない処遇がなされている	.222	.000	*350*
職場の処遇と環境５：社会に役立つ機会	.220	.000	*350*
職場の処遇と環境６：職場の雰囲気のよさ	.189	.000	*350*
職場での学歴評価３：責任の重さ	.178	.001	*350*
現職の満足度	.171	.001	*350*
職場の処遇と環境８：収入や福利厚生の整備	.161	.002	*350*
職場での学歴評価２：賃金水準	.159	.003	*350*
職場での学歴評価１：昇進や昇格	.067	.208	*350*

注）網掛けは１％水準で有意

５．コンピテンシー形成と職業・社会生活での必要と活用

5-1. 学修成果・コンピテンシーの形成とその必要・活用に関する調査モデル

大学教育の質の保証・向上のための手段として，今日ディプロマポリシー，カリキュラムポリシー，アドミッションポリシーの一体となった運用が求められており，ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーの関係を結びつける鍵となるコンセプトが学修成果である。大学改革支援・学位授与機構編（2016）によれば，「学習（学修）成果 Learning Outcomes」とは，「学生が，授業科目，プログラム，教育課程などにおける所定の学習期間終了時に獲得し得る知識，技術，態度などの成果を指す」とされている。ここではその「知識，技術，態度など」は具体的に示されていないが，21世紀に入ってからのさまざまの中教審答申等において「学士力」や「キーコンピテンシー」，「社会人基礎力」「エンプロヤビリティ」など，さまざまの「○○力」が議論されてきている。国際的には，欧州の「学位資格枠組み European Qualifications Framework」におけるレベル説明指標（level descriptors）の「知識」「技能」「コンピテンス」などが広く用いられるようになっているが，日本ではその説明指標の次元をどう設定するのか社会的な合意までには至っていない。そして，それは各大学において設定するディプロマポリシーと直接連動するものであるため，各大学大学で独自に設定されるものとなっている。

本研究会（EQ 研）では，日欧比較卒業生調査研究（CHEERS および REFLEX）をもとにして IR のための卒業生調査 web システムを開発してきたが，本報告書の大学卒業生調査に先立ち，「非大学型高等教育」としての短大・専門学校卒業生調査のシステムの構築をまず手がけてきた。そこでも，この学修成果を教育プログラムの質保証として，向上させていくための重要な指標として位置づけ，検討してきた。その結果を踏まえて大学での調査を実施しているが，ここでは上述の学修成果の次元設定の問題もさることながら，より根源的な問題として学修成果の修得と活用，社会的な必要との関係性を理解することの重要性が明らかになってきた。

卒業時点で修得すべき「知識・技能・態度など」は，それ自体が人生を豊かにする目的的価値を有するとともに，職業生活などの社会生活において必要とされ，活用していく手段的価値を有している。後者の，職業生活等において必要とされ活用されるものとして，今日「知識・技能・態度など」は，ひろく「コンピテンシー」と総称されることがあり，本報告書でもそれらを「能力」というよりも「コンピテンシー」として取り扱う。「コンピテンシー」とは，職業等の場面において高いパフォーマンスを導く諸能力の総体，あるいは諸能力を操作して高いパフォーマンスを導くものという意味であり，職業生活に必要なものであり，学修成果として第三段階教育で議論されているものと同じ次元で記述できるものとして定義しておきたい。

この「コンピテンシー」の修得と職業生活での必要，職業生活への活用の関係性が，大学および学術的教育プログラムと職業・専門教育プログラムとで異なっている。ベクトルの向きが逆といってもよい。EQ1科研において，「非大学型高等教育」の調査のための議論をしていくと，関係者の認識の枠組みは，図５－３の右側のように，職業・社会生活への必要なコンピテンシーの理解が第一にあり，教育プログラムはその必要なコンピテンシーをいかに修得させるのかという観点から編成されていることが明らかになった。それらにしても，説明指標は一様ではなく，EQ1 短大・専門学校卒業生調査では55機関との協議と相互学習を行いながらコンピテンシーの次元を設定し，指標を確定していったわけである。

これをEQ2科研でEQ2大学卒業生調査システムを構築する際に，その修得と必要・活用のベクトルの違いに直面した。図５－３の左側に大学や学術型プログラムの関係者における認識を示している。大学では「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的」を定めることになっており，後者の目的に沿った教育において修得される学修成果，コンピテンシーは，特定のまたは一定範囲の職業で必要とされていないものも含まれているであろう。しかし，当該職業で必要とされていないコンピテンシーが職業のイノベーションを誘導したり，あるいは新たなイノベーション環境において有効に活用されたりしていくことが見込まれる。職業教育的ベクトルの象徴の一つとして医学教育は，典型的な目的養成のプログラムであるが，そうした教育プログラムを経て文芸領域まで含めた保健医療分野以外での人材の活躍が広く見られており，それは医学教育の随伴的効用であるとしても，その基礎として図５－３左側のモデルがそうした意図を有しているためと考えられるのである。

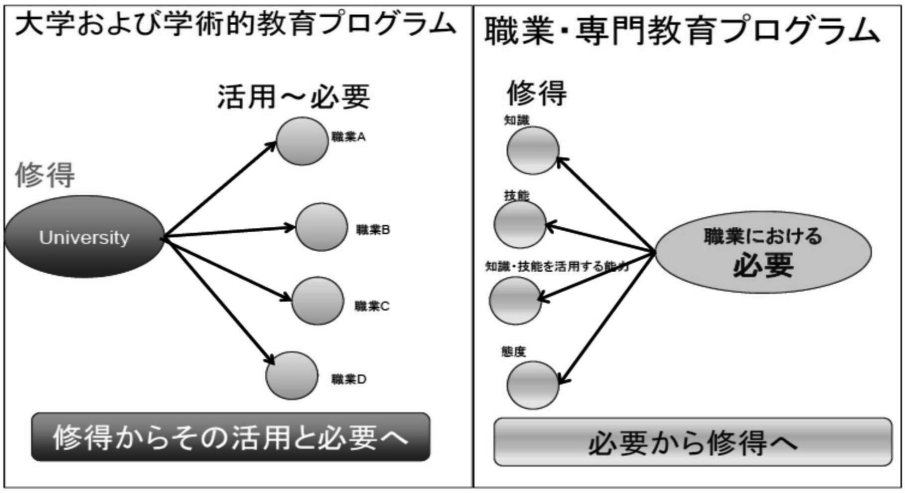


図５－３　コンピテンシーの獲得と活用・必要に関する大学教育と職業教育の差異

もちろん，２つの理念型的モデルが純粋な形で展開しているというものではなく，今日の専門職大学院と一般大学院との実質的な境界線が明確に設定できないように，個々の第三段階教育のプログラムの中にこの２つのベクトルが混在しており，これらは相対的な識別モデルと把握しておくことが適切であろう。

とはいえそうした混合モデルを理念的に把握していても，卒業生調査システムの開発においてはそれを操作的に具体化する必要がある。特に，開発段階での協議においては，図５－３右側の非大学型モデルについては，まず目的とする職業グループを設定し参加機関を募ることとなる。そしてその「職業のための必要性レベル」を把握し，次にその「コンピテンシーの修得レベル」の自己評価を尋ねることが相応しい。結果的には，第１章で説明しているとおり参加55機関（短大・専門学校）において17の職業教育分野を識別して，その職業の必要と教育プログラムでの修得を質問している。なお，現在就業していない卒業生には，職業における必要の質問が適切なものとならないため，当該分野の説明指標をもとに「教育プログラムによる修得」を先に質問し，「社会生活における活用」をその後に質問するという代替的アプローチをとっている。

EQ2科研における大学卒業生調査システムにおいては，そうした当初「人材の養成に関する目的」の分野を絞り込んで，参加機関を募集し開発していくことを検討した。しかしながら，吉本編（2016）

でも検討しているように，わが国の第三段階教育の専門分野分類は，大学にしても短大・専門学校にしても制度創設時からのマイナー・チェンジしかなされておらず，安定的な頑強な枠組みの中に，実際には多様化した教育プログラムがその中に含まれている。また「その他」概念においてもさまざまの教育プログラムを残余として扱っていくなど，教育プログラムの内容に感応的な枠組みとはなっていない。結果的に学術会議が教育にも用いるための「分野別参照基準」を，ほぼ学術分野区分のみで作成しており，その実効性は不明である。

こうしたモデル認識と現状の分野理解の状況のもとで，本研究会における大学卒業生調査システムにおいては，まず専門分野に固有の学修成果とコンピテンシーの修得を把握し，次にそれが職業生活で必要とされているものであるのかを問うこととした。当然，その説明指標の次元など，当初の雛形としてEQ1短大・専門学校調査システムを利用し，その対応する人材養成分野の設問を利用することとした。こうした異なるセクター間でのシステム移植のために，参加機関を限定しながら，関係者によるディプロマポリシーの解読から学修成果の整理を行い，かつ研究会においてそれを総合していくスタイルをとった。

EQ1短大・専門学校調査とEQ2大学調査とで，分野横断的に比較するための共通のコンピテンシー説明指標は，表５－24のとおりである。

表５－24　コンピテンシー項目の構造の大学・短大・専門学校比較

EQ1卒業生調査：短大・専門学校（F項目）

基礎知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識
	b	高校卒業までの教科・科目別の基礎知識
専門的な知識	c	**職業**に直接に関わる専門知識
	d	**職業**の周辺領域の専門知識
専門的な技能	e	**職業**に直接に関わる技能
	f	専門分野で課題を発見し問題解決する能力
基礎的、社会的な技能	g	仕事の段取りをデザインする**技能**
	h	**時間を管理する技能**
	i	職場の中でのチームワークやリーダーシップ
	j	顧客や外部とのコミュニケーション
	k	**マナー、倫理**
	l	生涯学び続ける力

EQ2卒業生調査：大学（E項目）

基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識
	b	高校卒業までの教科・科目別の基礎知識
専門的な知識	c	**専攻分野**に直接に関わる専門知識
	d	**専攻分野**の周辺領域の専門知識
専門的な技能	e	**業務**に直接関わる技能
	f	専門分野で課題を発見し問題解決する能力
基礎的・社会的な技能	g	仕事の段取りをデザインする**能力**
	h	職場の中でのチームワークやリーダーシップ
	i	顧客や外部とのコミュニケーション
	j	生涯学び続ける力
	k	**論理的思考力**
	l	**プレッシャーの中で活躍する力**
統合的な学習知識と創造的な思考力	m	**批判的・創造的思考力**
	n	**知識を横断的に活用する力**
グローバルな能力	o	**多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力**
	p	**外国語で書いたり話したりする技能**

まず説明指標となるコンピテンシーの次元を，短大・専門学校版では「基礎知識」「専門的な知識」「専門的な技能」「基礎的・社会的技能」の４次元を，大学版ではそれらに「統合的な学習知識と創造的な思考力」「グローバルな能力」を加えている。これらの議論のもとになっているのは，短大・専門学校版においては文部科学省・中央教育審議会（2011）答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」をもととしている。短大・専門学校在学中に獲得されるコンピテンシーだけでなく中等教育段階における「基礎知識」の形成なども含めた能力形成のTPO・積み上げモデルを用いている。また，そこでの「基礎的・汎用的能力」の議論を参考にしながら，その趣旨を的確に表現する概念として「基礎的・社会的技能」を位置づけている。さらに，大学版での「創造的な思考力」「グローバルな能力」は，中教審（2008）「学士課程教育の構築に向けて」（答申）およびその後の

グローバル化の政策課題の大学での取り込みの実態に即応して，それぞれ参加機関関係者とともに設定したものである。その意味で，この次元そのものの，今後の調査システム実施機関に応じて改訂の対象となるものである。

表５－25　大学４つの専門分野で具体化されたコンピテンシー項目

		共通項目	観光	人文・ビジネス	国家資格等（福祉・保育）	国家資格（栄養士・管理栄養士）
a	基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識
b		高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	高校までの科目（国語、英語、地歴・公民など）に関する知識	高校までの科目（国語、数学、英語、地歴・公民など）に関する知識	高校までの科目（生物、家庭科など）に関する知識	高校までの科目（理科、家庭科など）に関する知識
c	専門的な知識	専攻分野に直接に関わる専門知識	語学や国内外の文化・歴史等に関する基礎的な知識	経営や情報技術に関する基礎的な知識	人と生活、福祉等に関する知識	食品、栄養に関する知識
d		専攻分野の周辺領域の専門知識	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方
e	専門的な技能	業務に直接関わる技能	対人能力、ホスピタリティの実践と活用能力	PC を活用する能力	利用者の尊厳の保持・自立支援に関わる介護実践等の技能	調理や給食等を運営する技能
f		専門分野で課題を発見し問題解決する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力
g	基礎的・社会的な技能	仕事の段取りをデザインする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力
h		職場の中でのチームワークやリーダーシップ	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力
i		顧客や外部とのコミュニケーション	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	利用者や外部に対するコミュニケーション能力	顧客や外部とのコミュニケーション能力
j		生涯学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力
k		論理的思考力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力
l		プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力
m	統合的な学習知識と創造的な思考力	批判的・創造的思考力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	ものごとを批判的に検討する力
n		知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力
o	グローバルな能力	多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力
p		外国語で書いたり話したりする技能	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力

表５－24の説明を続けていくと，アルファベット記号の網掛けについては，その能力項目の順序を変更したもの，各項目の説明文の網掛けは，大学版で新規に採用した項目，ならびに短大・専門学校版では用いられていたが大学版で不要として削除した項目である。また，説明文の一部の単語が太字表示になっているが，「職業」と「業務」などセクターの特徴を考えながら改訂したものである。なお，これらの項目も，あくまでも今回の参加機関５機関による，大学４専門分野版の作成の範囲内での適用のものである。

コンピテンシーの概念モデル説明の都合上後になったが，表５－25は，参加機関と EQ2研究会事務局で協議を行いながら開発した分野別のコンピテンシー項目である。最左側の欄の共通項目の検討と，分野別に適用する項目は，ほぼ同時に，また相互に改訂が連動しつつ開発を進めたものである。

5-2. コンピテンシーの獲得と職業における必要性

それでは，コンピテンシーの構造の確認を経て，実際の調査結果の分析を進めることとしよう。表５－26－１から表５－26－４は，各分野の固有の選択肢による５件法回答として，コンピテンシーの獲得度と必要度の平均値を対比させたものである。なお，すでに説明している通り，現在職業を持っ

ていない卒業生に対しては，「生活における活用度」を質問しており，この傾向は単純集計のみであるため，巻末資料を参照いただきたい。

４分野の４つの表を横断的に眺めてみると，国家資格等（福祉・保育）においては必要とされるコンピテンシーが「基礎的・社会的技能」を中心に広範に認識されており，修得度についても一定の評価があり，それに続くのが非資格系ではあるが観光分野である。これらの分野では，「専門的な技能」の必要も認識されており，それぞれに修得度も一定程度ある。国家資格（栄養士・管理栄養士）では，「基礎的・社会的技能」や「専門的な技能」の多くが一定の修得度となっているものの，それ以上に必要度が高い項目があることがわかる。

人文・ビジネス分野では，獲得度も他の分野と比べて低くなっており，必要度も相対的に低く認識されている。

修得度と必要度のギャップのある項目としては，「取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力」については，上述２分野だけでなく総じて修得度の高くない項目である。また，「優先順位をつけて，仕事を段取りする能力」については，どの分野でも必要度がトップレベルであるのに対して，修得度とはギャップもあり，多くがその不足感を感じているものとみることができる。「専門的な技能」においても，「担当業務の課題を発見し，具体的な解決策を提案する能力」についてはその必要度と比較して修得度の低さがすべての分野でみることができる。

「統合的な学習知識と創造的思考力」については，「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」や「知識を横断的に活用する力」を４分野完全に共通に尋ねており，「国家資格等（福祉・保育）」の分野では修得度も一定程度高くなっており，その必要度も，他の分野と比較して高く認識されている。

「グローバルな能力」については，国家資格系で獲得度・必要度ともに低いレベルになっており，必要なもの，獲得されるものとそうでないものとが明確に識別されているということが分かる。他方，観光分野においても「多文化・異文化を理解し業務を遂行する能力」「外国語を用いて書いたり話したりする能力」など獲得度も必要性も低くなっている。観光では，むしろ専門的な技能として独自項目ではあるが「対人能力，ホスピタリティの実践と活用能力」において，高い修得度と必要性が認識されている。

表５－26－１　コンピテンシーの獲得水準とその必要水準－観光分野－

（平均値，標準偏差）

コンピテンシー項目			獲得度		必要度	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	3.64	0.98	3.64	1.25
	b	高校までの科目（国語、英語、地歴・公民など）に関する知識	3.54	0.81	3.36	1.15
専門的な知識	c	語学や国内外の文化・歴史等に関する基礎的な知識	3.52	0.79	3.20	1.22
	d	学際的な知識や考え方	3.38	0.78	3.08	1.08
専門的な技能	e	対人能力、ホスピタリティの実践と活用能力	3.80	0.92	4.32	0.95
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	3.59	0.80	3.92	1.00
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	3.91	0.94	4.16	1.03
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	3.86	0.86	4.08	1.08
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	3.73	0.96	4.32	0.95
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	3.89	0.82	4.04	1.06
	k	論理的に物事を考える力	3.73	0.84	3.88	1.13
	l	プレッシャーの中で活躍する力	3.64	0.86	3.92	1.04
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	3.38	0.96	3.76	1.01
	n	知識を横断的に活用する力	3.52	0.97	3.68	1.14
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	3.36	0.92	3.12	1.33
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	2.50	1.03	2.72	1.31
		n=	*56*		*25*	

表５－26－２　コンピテンシーの獲得水準とその必要水準－人文・ビジネス分野－

（平均値，標準偏差）

コンピテンシー項目			獲得度		必要度	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	3.38	1.00	3.27	1.10
	b	高校までの科目（国語、数学、英語、地歴・公民など）に関する知識	3.11	0.98	2.97	1.01
専門的な知識	c	経営や情報技術に関する基礎的な知識	2.98	1.01	3.19	1.26
	d	学際的な知識や考え方	3.04	0.92	2.92	1.22
専門的な技能	e	PC を活用する能力	3.72	0.98	3.88	1.20
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	3.30	0.98	3.95	1.14
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	3.56	0.99	4.36	0.91
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	3.48	0.96	4.17	1.11
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	3.43	1.10	4.10	1.21
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	3.54	0.99	3.93	1.19
	k	論理的に物事を考える力	3.33	0.91	3.78	1.17
	l	プレッシャーの中で活躍する力	3.11	1.06	3.81	1.22
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	3.12	0.99	3.79	1.19
	n	知識を横断的に活用する力	3.15	0.90	3.63	1.21
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	2.87	1.16	2.75	1.42
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	2.21	1.22	2.38	1.40
		n=	*359*		*175*	

表５－26－３　コンピテンシーの獲得水準とその必要水準－国家資格等（福祉・保育）分野－

（平均値，標準偏差）

コンピテンシー項目			獲得度		必要度	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	3.41	1.01	3.61	1.26
	b	高校までの科目（生物、家庭科など）に関する知識	3.31	0.96	3.43	1.11
専門的な知識	c	人と生活、福祉等に関する知識	3.90	0.85	4.32	1.03
	d	学際的な知識や考え方	3.57	0.77	3.82	1.08
専門的な技能	e	利用者の尊厳の保持・自立支援に関わる介護実践等の技能	3.77	1.00	4.14	1.27
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	3.53	0.99	4.25	1.18
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	3.77	0.98	4.52	0.73
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	3.84	0.96	4.50	0.82
	i	利用者や外部に対するコミュニケーション能力	3.91	0.94	4.61	0.58
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	3.73	0.93	4.25	0.97
	k	論理的に物事を考える力	3.59	0.97	4.05	0.99
	l	プレッシャーの中で活躍する力	3.33	1.05	4.09	0.98
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	3.53	0.86	4.05	0.96
	n	知識を横断的に活用する力	3.56	0.88	4.09	1.01
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	3.07	1.00	2.95	1.35
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	2.04	0.94	2.25	1.28
		n=	*70*		*44*	

表５－26－４　コンピテンシーの獲得水準とその必要水準－国家資格（栄養士・管理栄養士）分野－

（平均値，標準偏差）

コンピテンシー項目			獲得度		必要度	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	3.79	0.87	3.74	1.10
	b	高校までの科目（理科、家庭科など）に関する知識	3.76	0.85	3.37	1.11
専門的な知識	c	食品、栄養に関する知識	3.87	0.78	3.89	1.58
	d	学際的な知識や考え方	3.29	0.93	3.22	1.31
専門的な技能	e	調理や給食等を運営する技能	3.45	1.03	3.37	1.71
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	3.39	0.92	4.19	1.18
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	3.87	0.91	4.70	0.54
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	3.97	0.72	4.59	0.75
	i	顧客や外部とのコミュニケーション能力	3.82	0.83	4.48	0.89
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	3.79	0.78	4.41	1.01
	k	論理的に物事を考える力	3.55	0.89	4.15	0.91
	l	プレッシャーの中で活躍する力	3.32	0.74	3.93	1.11
統合的な学習知識と創造的思考力	m	ものごとを批判的に検討する力	3.18	0.90	3.52	1.09
	n	知識を横断的に活用する力	3.34	0.75	3.81	1.14
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	2.55	1.06	2.59	1.28
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	1.61	0.89	1.93	1.27
		n=	*38*		*27*	

5-3. コンピテンシー形成の TPO と大学教育

こうしたコンピテンシー形成には大学教育がその基礎として重要な役割を果たすと考えられている。次に，コンピテンシー形成の TPO，すなわち時間と場所と機会を検討してみよう。時間として，卒業後１年目から10年目までの調査時点を起点としてみると，「大学入学前」，「大学在学中」，「卒業後」の３つの段階で検討されることになり，また学習の機会として正規の教育課程としての講義や演習を通して意図的な教育が成果を生む場合もあれば，インターンシップなどのように必ずしも単位化されていない場合があるもの，部活・サークル活動など第一義的にコンピテンシー形成を想定されておらず「計画された偶然」としての位置づけられるもの，「アルバイト」のようにコンピテンシー形成がおよそ意図されず大学教育の教育指導の範囲としても想定されていないが「潜在的機能」としてそうした効果を生み出すものも位置付けている。

表５－27－１から表５－27－４までは，それぞれの分野ごとに，６つの能力グループをまとめて，その能力形成に寄与したと考えられる TPO（時間・場所・経験）について複数回答で質問している。

「基礎的な知識」は，どの分野でも「小中高」で学修していると回答しているが，「国家資格（栄養士・管理栄養士）」の場合には，「１・２年次の教養教育」などもその修得に寄与していると多くの卒業生回答している。

「専門的な知識，専門的な技能」については，国家資格系の２つの分野では「座学や理論的な授業」，「実習・演習など」を通して修得したと回答するものが多いのに対して，「観光」，「人文・ビジネス」などの「非資格系」ではこれらの活動を含めて在学中にコンピテンシー形成が完了しているとは見られていない。むしろ，「職場での経験や訓練」の方が高い回答比率となっている。国家資格系においてもこの「職場での経験・訓練」の重要さは同様に認識されている。

それでは，職業生活等での必要度の高い「基礎的・社会的技能」についてはいつどこで形成されるのかというと，どの分野でも「職場での経験や訓練」がもっとも重要で，次に在学中の「学外でのアルバイト」が挙げられている。「国家資格（栄養士・管理栄養士）」では「インターンシップなどの学外学習」や「実習・演習など」「家庭や小中高」などが関わっており，「国家資格等（福祉・保育）」でも類似する傾向があり，「非資格系」ではこれらとともに「部活・サークル活動」が貢献していると認識されている。

また，コンピテンシー形成の時間軸については，大学 IR としての観点から，「入学前」・「在学中」・「卒業後」の３時期区分による能力形成の比率を推測してもらった。表５－27－１から表５－27－４までの下段の数値は，現在の総合的な能力を100％としたときに，10％刻みでそれぞれの時期区分の能力形成評価をしてもらったものの平均値である。総合的にはどの分野でも大学在学中に30％以上の能力（コンピテンシー）を形成したと回答しており，大学教育の肯定的な評価があるものと想定される反面，卒業１年目の回答者でも３割程度の能力（コンピテンシー）を形成したと回答しており，職場経験のインパクトの大きさについては，詳細な検討が必要なところであり，今後の課題としておきたい。

表５－27－１　コンピテンシー形成の TPO －観光－

（複数回答，％）

1）コンピテンシー各要素別の形成時期と場面	入学前	大学在学中							大学卒業後			計	n
	家庭や小中高	座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験		
基礎的な知識	81.8	23.6	10.9	21.8	9.1	9.1	9.1	21.8	27.3	14.5	20.0	100.0	55
専門的な知識	18.2	40.0	29.1	32.7	14.5	20.0	10.9	16.4	49.1	18.2	16.4	100.0	
専門的な技能	9.1	16.4	23.6	14.5	16.4	9.1	14.5	29.1	54.5	16.4	12.7	100.0	
基礎的・社会的な技能	29.1	16.4	16.4	18.2	10.9	9.1	25.5	45.5	49.1	20.0	23.6	100.0	
統合的な学習知識と創造的思考力	20.0	29.1	27.3	12.7	3.6	20.0	20.0	30.9	38.2	16.4	20.0	100.0	
グローバルな能力	25.5	38.2	29.1	20.0	7.3	7.3	5.5	14.5	20.0	14.5	25.5	100.0	

（10％刻みでの回答の平均値）

2）コンピテンシー形成の時期	入学前	大学在学中	大学卒業後	平均値の合計	n
コンピテンシー形成の時期	36	33	31	100.0	55

表５－27－２　コンピテンシー形成の TPO －人文・ビジネス－

（複数回答，％）

1）コンピテンシー各要素別の形成時期と場面	入学前	大学在学中							大学卒業後			計	n
	家庭や小中高	座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験		
基礎的な知識	77.0	25.5	11.7	27.9	3.8	8.7	7.0	14.1	20.1	12.5	8.7	100.0	369
専門的な知識	13.8	35.8	33.6	23.0	6.8	29.5	4.3	10.0	35.0	18.2	11.1	100.0	
専門的な技能	11.9	20.6	38.2	21.1	5.1	21.1	7.0	11.4	41.5	20.1	11.7	100.0	
基礎的・社会的な技能	30.4	13.8	16.0	16.0	9.2	12.2	22.0	42.0	46.6	16.8	16.0	100.0	
統合的な学習知識と創造的思考力	30.1	20.1	25.5	15.4	6.5	19.2	13.8	17.6	38.2	15.4	14.9	100.0	
グローバルな能力	26.8	15.2	10.6	17.1	10.0	9.5	7.9	11.7	19.8	13.8	20.9	100.0	

（10％刻みでの回答の平均値）

2）コンピテンシー形成の時期	入学前	大学在学中	大学卒業後	平均値の合計	n
コンピテンシー形成の時期	38	30	32	100.0	381

表５－27－３　コンピテンシー形成の TPO －国家資格等（福祉・保育）－

（複数回答，％）

1）コンピテンシー各要素別の形成時期と場面	入学前	大学在学中							大学卒業後			計	n
	家庭や小中高	座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験		
基礎的な知識	64.7	22.1	19.1	20.6	10.3	11.8	8.8	17.6	23.5	17.6	17.6	100.0	68
専門的な知識	8.8	41.2	52.9	33.8	20.6	25.0	7.4	4.4	48.5	27.9	22.1	100.0	
専門的な技能	2.9	20.6	58.8	16.2	25.0	8.8	8.8	5.9	54.4	26.5	22.1	100.0	
基礎的・社会的な技能	27.9	14.7	25.0	22.1	19.1	7.4	19.1	35.3	58.8	17.6	26.5	100.0	
統合的な学習知識と創造的思考力	25.0	25.0	27.9	22.1	11.8	23.5	16.2	13.2	48.5	16.2	25.0	100.0	
グローバルな能力	23.5	19.1	11.8	16.2	8.8	4.4	14.7	5.9	14.7	13.2	19.1	100.0	

（10％刻みでの回答の平均値）

2）コンピテンシー形成の時期	入学前	大学在学中	大学卒業後	平均値の合計	n
コンピテンシー形成の時期	32	33	35	100.0	70

表５－27－４　コンピテンシー形成の TPO －国家資格等（栄養士・管理栄養士）－

（複数回答，％）

1）コンピテンシー各要素別の形成時期と場面	入学前	大学在学中							大学卒業後			計	n
	家庭や小中高	座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験		
基礎的な知識	81.6	34.2	26.3	42.1	5.3	0.0	0.0	7.9	15.8	5.3	7.9	100.0	38
専門的な知識	0.0	73.7	81.6	42.1	18.4	10.5	0.0	2.6	55.3	34.2	23.7	100.0	
専門的な技能	2.6	39.5	76.3	21.1	26.3	13.2	0.0	5.3	63.2	26.3	23.7	100.0	
基礎的・社会的な技能	31.6	13.2	26.3	15.8	26.3	7.9	10.5	36.8	52.6	15.8	26.3	100.0	
統合的な学習知識と創造的思考力	36.8	36.8	28.9	26.3	23.7	10.5	5.3	15.8	36.8	23.7	26.3	100.0	
グローバルな能力	26.3	15.8	5.3	13.2	5.3	5.3	7.9	15.8	10.5	13.2	18.4	100.0	

（10％刻みでの回答の平均値）

2）コンピテンシー形成の時期	入学前	大学在学中	大学卒業後	平均値の合計	n
コンピテンシー形成の時期	35	31	34	100.0	38

5-4. コンピテンシー形成と総合的な満足度

本節では，大学卒業者の学修成果の獲得と現在に至るまでのコンピテンシー形成の状況，その形成に係る時間・場所・機会（TPO），そしてコンピテンシーの職業生活等での必要度を検討してきたところであるが，こうした能力形成が，最終的に大学教育の総合的な評価にどのように関係しているのか，ここでは大学教育への満足度との単相関を比較しておくこととする。表５－28－１ではコンピテンシー各項目の修得と必要について，表５－28－２では能力獲得の TPO それぞれをダミー変数として，その TPO において当該能力が獲得されたと認識している場合の満足度との相関を，そして表５－28－３では能力形成の時期区分と大学教育満足度との相関を検討している。

表５－28－１をみると，左欄のコンピテンシー項目のほとんどについて，それを修得している者ほど出身大学への満足度が高く，修得していない者ほど満足度が低い結果となっている。特に，「顧客や外部とのコミュニケーション」（0.308）や「知識を横断的に活用する力」（0.298），「職場でのチームワークやリーダーシップ」（0.279）などの「基礎的・社会的能力」を中心に相関の高い項目が並んでいる。右欄の「仕事での必要性」でみれば，「社会的・基礎的能力」が高い水準で必要とされる職業についている者ほど，出身大学への満足度が高い傾向にある。

表５－28－１　能力の獲得水準と大学教育への満足度

	現在の獲得水準		仕事での必要性	
	相関係数	有意確率	相関係数	有意確率
高校卒業程度の基礎的な知識	0.193	0.000	0.071	0.370
高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	0.217	0.000	0.115	0.146
専攻分野に直接に関わる専門知識	0.235	0.000	0.165	0.035
専攻分野の周辺領域の専門知識	0.221	0.000	0.137	0.081
業務に直接に関わる技能	0.237	0.000	0.136	0.084
専門分野で課題を発見し問題解決する能力	0.241	0.000	0.156	0.048
仕事の段取りをデザインする能力	0.220	0.000	0.218	0.005
職場の中でのチームワークやリーダーシップ	0.279	0.000	0.200	0.011
顧客や外部とのコミュニケーション	0.308	0.000	0.298	0.000
生涯学び続ける力	0.245	0.000	0.262	0.001
論理的思考力	0.256	0.000	0.172	0.028
プレッシャーの中で活躍する力	0.254	0.000	0.224	0.004
批判的・創造的思考力	0.271	0.000	0.236	0.003
知識を横断的に活用する力	0.298	0.000	0.172	0.029
多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力	0.181	0.000	0.118	0.136
外国語で書いたり話したりする技能	0.120	0.019	0.099	0.208
n	*383*		*162*	

注）網掛けは１％水準で有意

表５－28－２　能力の獲得 TPO と大学教育への満足度

（上段は相関係数，下段は有意確率）

	入学前	大学在学中							大学卒業後		
n=411	家庭や小中高	座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	１・２年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験
a 基礎的な知識	-0.004 0.929	0.100 0.043	0.167 0.001	0.125 0.011	0.049 0.321	0.148 0.003	0.000 0.994	0.039 0.425	-0.018 0.709	0.012 0.801	0.007 0.882
b 専門的な知識	-0.090 0.067	0.071 0.153	0.209 0.000	0.082 0.097	0.080 0.105	0.202 0.000	0.050 0.317	0.063 0.206	-0.029 0.557	-0.075 0.131	-0.009 0.857
c 専門的な技能	0.001 0.988	0.056 0.260	0.154 0.002	0.058 0.242	0.100 0.042	0.154 0.002	0.071 0.151	0.025 0.615	-0.040 0.424	-0.069 0.163	-0.017 0.726
d 基礎的・社会的な技能	0.031 0.525	0.068 0.171	0.106 0.032	0.105 0.034	0.089 0.071	0.148 0.003	-0.026 0.606	0.077 0.120	0.046 0.350	-0.059 0.234	-0.029 0.553
e 総合的な学習知識と創造的思考力	0.001 0.987	0.010 0.840	0.125 0.011	0.085 0.087	0.081 0.101	0.140 0.004	0.028 0.566	0.011 0.820	-0.014 0.783	-0.061 0.217	0.008 0.871
f グローバルな能力	0.001 0.988	0.019 0.706	0.105 0.034	0.078 0.115	0.062 0.210	0.118 0.016	0.071 0.151	0.022 0.660	-0.070 0.157	-0.020 0.684	-0.020 0.683

注）網掛けは１％水準で有意

表５－28－２では，細分化された TPO の組み合わせ個々に相関を調べているため，大きな係数の相関は見られなかったが，その中では，在学中の「実習・演習など」や「卒論・卒業研究」が「基礎的な知識」を定着させ，「専門的な知識」「専門的な技能」を形成させていると認識されている場合に，高い大学満足度と結びついている。また，「卒論・卒業研究」における「基礎的・社会的技能」，「総合的な学習知識と創造的思考力」の修得認識と大学満足度も，統計的に有意な関係がある。他方，統計的に有意ではないが，職場での経験や訓練による能力形成と大学満足度とは負の相関がある。

表５－28－３では，在学中の能力形成比率を高く認識する者ほど，大学教育への満足度が高いこと（相関係数0.328）が明らかになっている。

表５－28－３　能力形成の段階と満足度

		相関係数	有意確率（両側）
能力を身に付けた割合（％）	家庭や小中高校までに	-.124	.013
	在学中に	.328	.000
	卒業後に	-.128	.010
	n	*400*	

注）網掛けは１％水準で有意

６．小括－大学教育と進路・初期キャリア形成

本章では，卒業生調査を通した大学 IR の要というべき領域として，卒業後の状況，初期キャリア形成をどう把握するのか，その調査方法論を検討しつつ，今回のサンプルデータをもとに，**大学教育の職業的有用性（レリバンス）**の検討を行った。

大学卒業後の進路，初職の状況とその継続，現職と職場における評価・処遇などの**＜初期キャリア＞**指標群は，大学教育から職業生活への移行を検討するために欠かすことのできないものである。どのような志向性をもつ大学教育においても，質のよい（ディーセントな）職業生活への移行が成果指標となる。

また，無前提に望ましい移行・初期キャリアパターンを想定するというよりも，大学教育プログラ

ムの志向性と整合的な初期キャリア形成という観点，すなわち教育の職業的関連性も重要な成果指標となる。

そして，そうした移行，初期キャリア形成のための財となる知識・技能・態度等は，大学での学修成果と，それをもとに初期キャリア形成の過程で形成される知識・技能・態度等と相まって向上していくものであり，**＜学修成果＞**とその展開としての**＜コンピテンシー＞**の形成も，本調査において**＜IR 枠組み＞**の中心に位置づけられている。人材の養成に関する目的を大学が設定していれば，大学教育と関連し，大学教育を適切に活用できる初期キャリアを辿っていること自体も重要な成果となる。

本サンプルのデータから得られた知見を検討しよう。

第一には，本調査研究では，進路選択・初期キャリア形成の次元として，本章では，特に**＜職業＞**の分野に注目した。初職や現職について，大学の進路として想定される職業小分類ごとに，専攻分野と関連しているものかどうかを質問している。「資格系」専門分野の卒業生の多数が，専攻分野と関連する初職や現職に就く傾向があり，非資格系専門分野の卒業生の多数は，専攻分野と関連しない初職や現職につく傾向がみられた。この専攻との関連性については，職業の分類をどのように設定するのかということと関係しており，本 EQ2大学卒業生調査 web システムでは，学校基本調査等の分類では把握しきれない，大卒 IR としての個別性が高く，集約することで標準職業大分類による比較可能性も担保する指標化も可能となった。特に，観光分野などで，大学固有の職業分類を開発していくことで，学校基本調査の日本標準職業分類をもとにした調査項目ではほとんど把握不可能な，非専門領域における大学教育の職業関連性を的確に把握できることが明らかになった。

稲永（2016）の専門学校での分析のように，関連分野の範囲の広さ－狭さは対応する教育プログラムにおける学外実習の導入など教育方法論の特化につながるものである。今後，この観点をさらに進めて，産業と職業の組み合わせなどを用いることによって，教育の目標と方法との対応関係の検討を，より現場に即して行うことができるであろう。

第二には，初期キャリア形成において，**＜職業と専攻分野との関連性＞**は，それ自体が重要な成果指標である。また，「出身大学への満足度」は卒業生の母校への総合的な評価・愛着を測る重要な指標でもある。これらを分析対象とし，初期キャリア諸指標と満足度との単相関を検討してみると，卒業直後では「非正規就業」や「卒業時の進路未決定」などの移行指標もしばしば社会問題としてとりあげられているが，それらは必ずしも卒業生の母校への評価・愛着とは直接につながらない。また，年収や労働時間などの労働経済指標も大学 IR として決定的な指標とはいいがたい。

むしろ，「初職が大学での専攻分野と関連」するかどうか，「現職が大学での専攻分野と関連」するかどうか，「本学の専門知識を職業で活用」できるかどうか，などの職業の専門関連性指標が，いずれも大学の総合的満足度と強い相関を持っているのである。

第三には，学修成果の説明指標を項目開発の過程から明らかにした，IR としての卒業生調査における＜学修成果＞と＜コンピテンシー＞の把握のための方論上のモデル提示である。今日大学改革課題とされる学位授与・卒業認定の方針（ディプロマポリシー）の設定において，その要となるのは，大学卒業時までに修得する知識・技能などの＜学修成果＞である。

これをいつ把握するのかをまず検討する必要がある。大学を卒業時点でその意義を卒業生が的確に把握できるかとなれば，それは疑わしい。コンピテンシーとは，具体的な職業の現場において高いパフォーマンスを上げられる諸能力およびその運用力のことであり，具体的な業務課題が現れていない段階でそれを把握することは不可能である。日本的経営において大学卒業新卒者の仕事には，固有の教育訓練的な機能を担わされており，それらの基礎的訓練が終わり，初期キャリア形成が一定の段階に達した段階，いわゆる「一人前」と位置づけられる段階が最も適切である。**＜卒業後10年の初期キャリア＞**の段階を調査する卒業生調査モデルはこうした課題に対応している。

次に，コンピテンシー項目の選択肢と設問の設定方法の問題がある。調査項目に自然な流れで展開させながら，専門分野の固有性と横断的な比較可能性の担保という大学型モデルと職業教育型モデルの識別および調査把握の方法論開発である。ここでは大学及び学術型教育プログラムと，職業教育・専門教育プログラムとで，調査のロジックが異なる。また，そこで適用される能力項目も，本質的に異なる。端的に言えば，**大学などの学術型教育では＜修得から活用と必要＞**へ，**職業教育では＜必要から修得，活用＞**へというロジックである。

すなわち，職業教育プログラムでは，その教育を卒業して就職が想定されている＜仕事に必要＞なコンピテンシーを先に問い，その後に調査時点での＜修得・形成されている能力＞項目の到達水準を調査することになる。

これに対して，大学や学術型教育プログラムにおいては，卒業後の広範囲の活躍が想定されている。そこで，特定のあるいは一定の職業にかかるコンピテンシーを抽出するよりも，教授会等の学内メンバーで編集可能な教育プログラムが編成される。日本学術会議の分野別参照基準等も学術領域にこだわっているが，大学 IR として把握すべき指標は，それらをはるかに超え，今後の改革のために職業的プロファイルが求められるところである。今回，短大・専門学校版の能力項目の表現と大学版の能力項目の表現を対比しているが，これらの差異は，現在の職業で求められていることを想定したコンピテンシーと，卒業時点で獲得された＜学修成果＞の発展として育成されたコンピテンシーとの項目の違いとしてみることができるであろう。

更に，**＜キャリア展開軸にそったコンピテンシー形成の TPO ＞**が重要である。卒業時点と調査時点の時間差も考慮しつつ，どのような TPO（時間・場所・経験）を通してコンピテンシーが形成されているのか，また大学を他の能力育成システムと切り離されてあるようなモデルを組むことなくその学修成果からコンピテンシーを把握していくために，「入学前－在学中－卒業後」の各段階に区分して能力の累積加算型モデルを調査の道具として位置づけておく必要がある。そして，TPO として，講義や演習などの正課プログラムだけではなく，非正課の教育プログラムや指導と学習の環境（インターンシップやサークルなど），教育が意図されていない経験（アルバイトなど）なども含めて把握していくという方法論をここで採用している。そして，それらを要約していくために，能力獲得の入学前・在学中・卒業後比率を把握するように設計しているのである。

第四に，これらの調査方法論設計に基づいてコンピテンシー形成を巡って実査を行い得られたサンプルデータの傾向として注目すべき点を指摘しておきたい。コンピテンシーの修得の段階性と，修得に係る TPO について，実際のサンプルデータによる検討をおこなった結果，興味深い知見が得られている。大学卒業後のごく短期間であっても，卒業生のコンピテンシー形成に及ぼす**＜初職の職業経験**

と職場のインパクト＞大きさが明らかになった。とはいえ，20歳代後半までの卒業生のコンピテンシー形成において４年間あまりの**＜大学教育が大きな比重＞**を持っていることも重要であり，それは高校卒業までのすべての期間に匹敵するようなインパクトの大きさとみることができるのである。

それではどのような学習や経験が効果を発揮するのか，第４章では主体的学修のコアとしての**＜インターンシップおよび職業統合的学習＞**の重要性を明らかにしている。本章で総合的に TPO を比較した結果，大学教育における「卒論・卒業研究」「実習・演習など」の**＜正規課程における主体的学修（アクティブ・ラーニング）＞**が専門的知識や専門的技能を中心に効果を発揮し，またそれらが大学教育の総合的な満足度に結びついていることが分かった。同時に「アルバイト」や「サークル」などの非正規の学習指導や，**＜教育・学習指導の範囲と位置づけられていない学生生活経験＞**の諸側面にも十分な理解と配慮が必要なことが明らかになった。

〈参考文献〉

大学改革支援・学位授与機構編（2016）「学習（学修）成果」,『高等教育に関する質保証関係用語集・第４版』

稲永由紀（2016）「専門学校における人材養成目標の広さ／狭さと教育プログラム：「関連分野」就職認識にみる業種・職種の幅を手がかりとして」，吉本圭一編（2016）19-31頁

文部科学省・中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて（答申）』

文部科学省・中央教育審議会（2011）『今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』

吉本圭一編（2009）『企業・卒業生による大学教育の点検・評価に関する日欧比較研究（科研費研究成果報告書）』

吉本圭一・稲永由紀（2016）「IR のための分野対応型 web 卒業生調査の研究－第三段階教育における職業教育の学修成果把握の方法論として－」，短期大学コンソーシアム九州『短期高等教育研究』，No.6，5-15頁

吉本圭一編（2016）『第三段階教育における職業教育のケーススタディ』九州大学第三段階教育研究センター

終章　総括にかえて

吉　本　圭　一（九州大学）

卒業生調査は、「教育の成果」を点検・評価し、かつ教育改善のためのエビデンスとして活用される。それは、**＜大学教育の質保証＞**にもつながり、ステークホルダーに対する説明責任を全うすることにもなる。

教育改善とは、日々の活動の点検作業を通した改善課題の発見が基本である。そして、卒業生という応援団を取り込むことで、日常業務の中で可視化されていなかった課題を発見し、固有の改善への取組を始動させることができるという意味で、卒業生調査は、教育の実施・点検・改善サイクルをより活性化していく過程である。

本報告書では、**＜卒業生調査を通したIR（institutional research）＞**として、調査の設計から実施手順、特に焦点となる概念を検討し、関連する調査結果の概要を示している。すなわち、大学教育の成果を点検・評価するIRの指標システム構築につなげる観点から、各章を論じてきた。

第１章では、IRのコアとしての**＜web卒業生調査システム＞**の開発と実践の過程を明らかにしている。学修成果を点検・評価し、また各分野における教育改善に結びつけていくためには、分野の個別性と分野間の比較可能性を両立させるシステムが必要となる。このために、EQ1科研「非大学型高等教育と学位・資格制度に関する研究」（課題番号21243044）、EQ ２科研「キャリア教育・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究」（課題番号25245077）ならびにキャリア科研「大学から職業への移行を促すインターンシップを軸としたキャリア教育研究」（課題番号23330246）のメンバーを中心とした九州大学「高等教育と学位・資格研究会」で、EQ大学卒業生web調査システム開発に取り組んだ。

その結果、従来の紙媒体の郵送調査などでは扱いが難しい設問の多様な分岐をどう扱っていくのか、専門分野ごとに、また回答者の属性と多様なキャリアに対応する設問構造を統合させることも可能になった。つまり、**＜大学と卒業生の個性・多様性と大学や分野等横断的な比較較可能性を両立＞**させる条件を満たす、web卒業生調査システムの開発自体が、本研究の特徴、成果となっている。

ここでは、このシステムの開発過程、そしてそれを活用して**＜共同IR＞**を行うための、地方私立大学５大学での文系学部を中心として大学間研究を組織していった過程を明らかにしている。

第２章では、アウトカムに着目し、**＜学修成果とその総合的評価＞**に係る指標群を検討した。卒業生の満足度から、分野間での差異が顕著にみられた。福祉・保育等の国家資格分野では９割近い満足度となっており、栄養分野もそれに次ぐ満足度となっている。観光と、人文・ビジネス分野では、卒業生の満足度に、これらの資格系分野との明確な落差がみられた。18歳での再帰的な選択可能性の検討では、進学先機関として半数前後が母校への進学を希望し、また進学先分野についても半数前後が同じ分野を希望している。有意な差異もみられ、分野間での違いというだけではなく、個々の大学での経験の違いも反映しているものと考えられる。また、多面的に職業キャリアへの大学教育の有用性評価を把握したところ、総合的な満足度はそれらと一定の強い相関がみられた。

第３章では、学修行動・学生生活における**＜学生のエンゲージメント＞**と、それを導くためのカリ

キュラム、教育指導、学習支援環境などの**＜大学の教育・指導・環境＞**の充実度について検討を行った。大学における教育プログラムの評価としては「知識を拡げ教養を身につける授業」、「専門の授業」、「研究室・ゼミでの授業や活動」の順で充実した取り組みを行っていると評価されていた。他方、卒業生自身は「研究室・ゼミでの授業や活動」にもっとも熱心に取り組んでいたことがわかる。これらの学生のエンゲージメントや教育指導の特徴と、卒業生の総合的満足度との間には、正の相関がみられた。ただし、全体としては満足度の高い国家資格分野においても、栄養士・管理栄養士の教育においては「研究室・ゼミ」活動のレベルが低く、教育指導のアプローチが異なっていることが示唆されている。

第４章では、インターンシップや海外体験などの**＜職業統合的学習（WIL：work-integrated learning）＞**を検討した。国家資格分野では、教育課程と関連する実習が必須となっており、その充実度の高さと、総合的満足度への規定性が明らかになった。他方、観光、人文・ビジネスの分野では実習やインターンシップ等の制度・指導も十分確立しておらず、熱心に取り組んだ卒業生も少なかった。専門分野と関連していないアルバイト等は多く、就業体験のない卒業生も多かった。まとめてみると、いずれの分野でも、専門と関連する就業体験が総合的な満足度と関連することが明らかになった。なお、海外体験については、観光分野では私的な旅行も含めて海外体験を比較的広く経験していた。統計的に有意ではないが、３か月以上の中長期留学やボランティア活動などの経験者の方が、短期の留学、海外旅行よりも総合的な満足度を高めている傾向が見られた。

第５章では、大卒１年から10年までの進路・初職から現職に至る**＜初期キャリア形成＞**と、その初期キャリアを形成する基盤となり、また初期キャリアを通して修得・形成される知識・技能などの**＜コンピテンシー＞**の修得と職業社会生活における必要と活用とを検討した。

まず、初期キャリアの把握として、卒業直後の進路や初職の就業形態を検討し、「資格系」専門分野において確実な就職への移行が実現されているのに対して、「非資格系」では進路未決定や非正規就業が生じている。就職した職業の分野については、専門分野別の個別性と分野横断的な比較可能性とを両立させるため、調査項目では二層構造をとり、第一層で各参加機関の関係者が想定する主な職業を10カテゴリー程度で列記し、そこでの大括り項目やその他項目回答者を第２層目に導き、そこでは、二層を総合した時に学校基本調査が用いている日本標準職業大分類レベルに集約できる構造をとった。この調査結果として、資格系専門分野から専門的技術的職業が多く、非資格系で事務の職業が多いことなど通常の統計と同様の知見も明らかになっているが、個々のより細分化した職業の単位での就職動向が明らかになっている。

統計的分布の把握だけでなく、細分化した職業の単位ごとに、それらが出身大学における専攻分野と関連する仕事であるかどうかという質問とクロスして検討することで、それぞれの職業別進路を大学教育としてどう評価していくのか、教育プログラムの目標設定とその改善にかかわるエビデンスを得ることができる。今回のサンプルでみると、資格系分野では、専攻と関連する特定の職業に多数が就職しており、他の職業についている場合には明確に専攻と関連しないと回答しており、職業によって専攻関連度が明確に分離している。これらのプログラムが職業教育としての焦点を強く絞り込んでいるということができる。これに対して、非資格系分野では、専攻と関連する仕事に就く比率は低く、また個々の職業単位でみると、どの職業であっても、同じ職業についた者の中に専攻と関連するという回答と専攻と関連しないという回答が混在していることが明らかになっている。つまり職業的焦点

の絞り込みが緩いということがわかる。

また、現在の職業や職場を見れば、就業状態や年収などに性差が生じており、女性が客観的に不利益な状況におかれている。他方、学歴上の処遇などについては男性の不満が顕著であった。

これらの進路や初期キャリア形成の諸指標の中で、大学への総合的な評価としての満足度と関連するのは、初職離職や非正規就業というよりも、専攻分野と関連する初職や現職、大学で得た知識技能を活用できる職場などであり、**＜専攻分野と関連性のある職業＞**の重要性を確認することができた。

また、第５章では、卒業生がどのような知識・技能などを修得しているのか、またそれらが職業において必要とされているのか、初期キャリア形成と連動するコンピテンシー形成を検討している。特に、本調査においては大学教育を４年間の狭義の学位プログラムだけで把握するのではなく、職業統合的な学習や、正課外の諸活動や学生生活全体を枠組みの中に入れ、さらに大学入学前やその後の時間までも含めて、**＜コンピテンシー形成のＴＰＯ＞**を総合的に把握しようとしている。こうした結果として、コンピテンシー形成における初職とその職場のインパクトの大きさとともに、４年間の大学教育の一定の影響力を確認することができた。ただし、職業での必要性の大きい基礎的・社会的技能に注目してみると、大学卒業後の職場での経験や訓練のインパクトが大きく、また在学中でも、**＜インターンシップやアルバイトなど職業統合的学習＞**の能力形成インパクトの方が、正課の講義や演習などよりも高く評価されていた。

注目すべきポイントとして、「卒論や卒業研究」については、そうした能力形成へのインパクトは必ずしも大きくないものの、能力形成の TPO として実感された場合には、大学の総合的な満足度を左右している。**＜卒論や卒業研究＞**は、その教育改善次第で、大学への満足度を向上させる余地の大きいクリティカルな教育指導であるとみることができよう。

今後の課題として、この卒業生調査を通した学修成果の把握と点検のアプローチを、より多様な大学の多様な分野において進め、調査研究モデルの開発を行うとともに、大学教育の効用やそのメカニズムに関する総合的な検討をしていくことが必要である。同時に、そうした総合的なメカニズムは、単にサンプルを拡げビッグ・データ化することで解明が進むというよりも、むしろ個々の大学や専門分野における個性的な教育的取組みの特徴と関連づけた分析によって的確に解明できると考えられる。個々の大学や専門分野の側から見れば、大学全般のメカニズムと対比することで、自校・自分やの特色を解明し、さらに教育改善に結びづけていくことができる。そのような意味で、調査から得られるエビデンスをどのように教育改善に結びづけていくのか、調査参加機関関係者と卒業生調査研究チームが協働しながら、すなわち**＜協働 IR ＞**活動のモデルを実践的に開発していくことが重要である。

大学は、成績から履修状況から学生生活の諸側面に関してさまざまの部署で情報を収集している。卒業後にも、それらの情報が、大学組織としてフォーマルに、またいろいろな部署内にローカルかつインフォーマルに所蔵されている。卒業生調査データを、在学中の学業・活動状況などの情報とリンクさせて比較するというアプローチは、大学教育の効用形成メカニズム解明の有力なアプローチとなろう。教育改善をより具体的に進めるためにも、在学時の GPA などの情報とリンクさせた分析を行うことが精度も上がり、現場の教育改善へのより有力なものとなる。他方で、それはビッグ・データ化にかかる学生や卒業生のプライバシーへの配慮などの合意が必要とされる。また、ステークホルダーとしての卒業生へのエンゲージメント、卒業生の大学へのエンゲージメントの範囲の在り方など、原則的な検討をすべき課題も飛躍的に増加する。

多くの大学においては、IR 関係部署の組織整備がいま始まったという段階であり、今後に IR 組織の活動モデルやその範囲の検討がこれからの課題となるであろう。学修成果アプローチが強調されるなか、認証評価等の観点としても卒業生調査の重要性は高まっている。この評価対応として卒業生調査の実施・活用は今後広がっていくとしても、卒業生調査の実施には、それ相応の人的・時間的・財政的コストを要する。こうしたアプローチが持続可能なものになるためには、そのコストに見合うだけのメリットを関係者が実感できるよう、適切な準備をもって進める必要があり、そうした標準的モデルの開発・普及が期待されるところである。

大学として、また各専門のプログラム単位で、卒業生調査のエビデンスをもとに自らのアイデンティティを理解し、その教育改善への活用を進めるというミッションの共有が何よりも重要である。そこに、学術研究としての卒業生調査研究専門グループが適切に連携し関与しながら、全体としてコストを下げ、適切なメリットが生じる方法論を探究していくことが、これからの研究開発の中心的課題である。

（　資　　料　）

アンケートシステムへのアクセスについて

私立文系大学版

アンケートシステムへは以下の方法でアクセスできます。

■ URLを直接入力する

ブラウザを開いて、以下のURLを入力してください

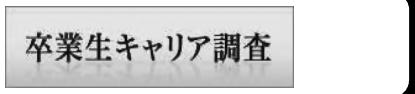
https://eq.kyushu-u.ac.jp/gcs/

■QRコードを読み込む（スマートフォンのみ）

スマートフォンで右のQRコードを読み込んで、Webサイトを表示してください

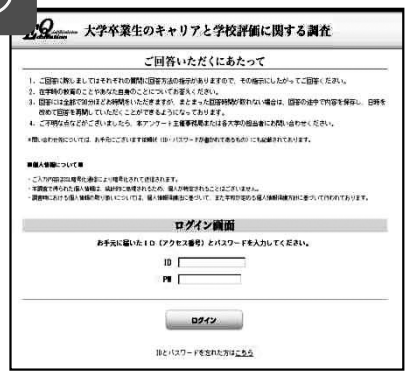
■学校ホームページのバナーをクリックする

学校ホームページにアクセスして、「卒業生キャリア調査」バナーをクリックします。



※バナーデザインは上記と異なる場合があります

① アンケートログインページ



配布されたID・パスワードを入力してください。あなたのID・パスワードは本資料左下に記載されています。

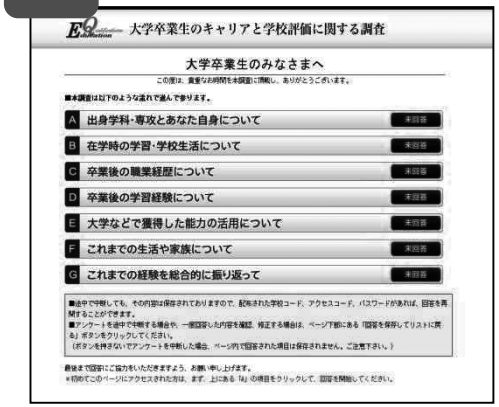
② メールアドレス登録ページ

初めてログインした場合、メールアドレス登録画面が表示されます（2回目以降は表示されません）。あなたのメールアドレスを登録してください。

③ 学校からのご挨拶ページ

学校からのご挨拶ページが表示されます。ページ下の「アンケートに回答する」ボタンを押してください。

④ アンケート回答ページ



アンケート回答ページが表示されます。画面の指示に従ってアンケートにお答えください。

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

A. 出身学部・学科とあなた自身について

私立文系大学版

大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

A. 出身学部・学科とあなた自身について

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

A1. 本学の入学年月と卒業年月を記入してください。(卒業年は本科の卒業年を記入してください。)

入学年(西暦): ▼ 年 ▼ 月
卒業年(西暦): ▼ 年 ▼ 月

A2. 卒業した学部・学科・専攻等の名称を教えてください。

▼

A3. あなたご自身についてうかがいます。

A3-1. あなたの性別を教えてください。

○ 男性　○ 女性

A3-2. あなたの出身地について教えてください。

○ 日本　○ 日本以外

A3-3. あなたの生まれた年と月を教えてください。

西暦 ▼ 年 ▼ 月

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

A1　プルダウン

入学年:1920～2013 入学月:1～12
卒業年:1920～2013 卒業月:1～12

A2　プルダウン

学科・専攻・コース　→　別紙参照

A3-3　プルダウン

年:1920～2013 月:1～12

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B 在学時の学習・学校生活について　B1～B2

私立文系大学版

大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

B 在学時の学習・学生生活について

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
（ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。）

B1 本学での学生生活について伺います。あてはまるものを1つ選んでください。

B1-1.	ほとんど出席	欠席は1/5以下	欠席は1/4くらい	欠席は1/3以上
授業への出席	4	3	2	1

B1-2.	授業以外でもほぼ毎日勉強していた				授業以外はほとんど勉強しなかった
授業以外での学習時間（授業期間中）	5	4	3	2	1

B1-3 3年前期（学期中）、授業・実習等に出席した時間は一週間あたり何時間くらいでしたか
▼ 時間

B1-4 3年前期（学期中）の授業・実習等出席以外の学習時間は一週間あたり何時間くらいでしたか
▼ 時間

B2 在学中のあなたの成績はどうでしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

	上の方				下の方
あなたの成績	5	4	3	2	1

B1-3　プルダウン

1～40まで1時間間隔、41～45、46～50、51以上

B1-4　プルダウン

1～40まで1時間間隔、41～45、46～50、51以上

選択設問

B1-3
使用していない学校:
省略している学校は無し

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B 在学時の学習・学校生活について　B3

私立文系大学版

B3 次のような点で、本学の教育・指導は充実していましたか。以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		とても充実していた				全く充実していなかった
a	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	5	4	3	2	1
b	大学での学習方法を学ぶ授業	5	4	3	2	1
c	知識を広げ教養を身につける授業	5	4	3	2	1
d	外国語を習得するための授業	5	4	3	2	1
e	専門の授業(講義や演習)	5	4	3	2	1
f	インターンシップなど、仕事現場や地域での実習や就業経験	5	4	3	2	1
g	資格取得に関わる準備・指導	5	4	3	2	1
h	卒業論文、卒業制作、卒業発表	5	4	3	2	1
i	海外研修や留学のための機会や指導	5	4	3	2	1
j	研究室・ゼミでの授業や活動	5	4	3	2	1
k	部活やサークル、学校の行事	5	4	3	2	1
l	図書室、情報機器、実験器具などの施設設備	5	4	3	2	1
m	学習支援(学習の仕方や理解度についての相談・支援の体制)	5	4	3	2	1
n	就職支援(就職活動についての相談・支援の体制)	5	4	3	2	1
o	生活についての相談	5	4	3	2	1

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B4 本学の提供する教育・指導や各種の活動についてうかがいます。

B4-1 本学の提供する教育・指導や各種の活動に対して、どの程度熱心に取り組みましたか。以下の各設問について次の6段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		熱心に取り組んだ				熱心に取り組まなかった	経験がない
a	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	5	4	3	2	1	0
b	大学での学習方法を学ぶ授業や指導	5	4	3	2	1	0
c	知識を広げ教養を身につける授業	5	4	3	2	1	0
d	外国語を習得するための授業	5	4	3	2	1	0
e	専門の授業(講義や演習)	5	4	3	2	1	0
f	インターンシップなど、仕事現場や地域での実習や就業経験	5	4	3	2	1	0
g	資格取得	5	4	3	2	1	0
h	卒業論文、卒業制作、卒業発表	5	4	3	2	1	0
i	海外研修や留学	5	4	3	2	1	0
j	研究室・ゼミでの授業や活動	5	4	3	2	1	0
k	部活やサークル、学校の行事	5	4	3	2	1	0
l	友だちとの交流	5	4	3	2	1	0
m	授業外での教員との交流	5	4	3	2	1	0
n	アルバイト	5	4	3	2	1	0
o	就職活動	5	4	3	2	1	0

B4-2 本学で経験した授業では、次のことがどの程度ありましたか。以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあった				ほとんどなかった
a	学問的な理論や概念枠組みの授業	5	4	3	2	1
b	経験的・実務的な知識の授業	5	4	3	2	1
c	学生の関心や理解度に配慮した授業	5	4	3	2	1
d	グループワークなど学生が参加する授業	5	4	3	2	1
e	プロジェクト型・問題解決型学習	5	4	3	2	1
f	自分の意見や考えを求められる授業	5	4	3	2	1
g	小テストやレポートなどの課題が出される授業	5	4	3	2	1
h	適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される授業	5	4	3	2	1
i	フィールドワークや地域など学外と交流する授業	5	4	3	2	1

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B 在学時の学習・学校生活について　B4-3～B4-3-SQ3

私立文系大学版

B4-3 在学中の海外での経験について伺います。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- ☐ 1ヶ月程度の語学研修
- ☐ 3ヶ月から半年未満の留学
- ☐ 半年以上の留学
- ☐ 海外でのボランティアやインターンシップ
- ☐ 海外旅行
- ☐ 海外での経験はない

B4-3-SQ1 海外での学習経験を振り返って、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		専門と密接に関連付けられていた				専門とは関連がなかった
a	海外での学習経験は、在籍していた学科・専攻と関連していましたか	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
		大いに役に立った				全く役立たなかった
b	海外での学習経験は卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

B4-3-SQ2 海外での経験は、その後のあなたの学生生活や将来についての考え方にどのような影響を与えましたか。以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあてはまる				全くあてはまらない
a	自信をもって積極的に行動できるようになった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
b	自分の適性に気づくことができた	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
c	多文化・異文化に関する理解や関心が深まった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
d	日本に対する理解や関心が深まった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
d	外国語の能力が向上した	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

B4-3　回答分岐

1ヶ月程度の語学研修　→B4-3-SQ1へ
3ヶ月から半年未満の留学　→B4-3-SQ1へ
半年以上の留学　→B4-3-SQ1へ
海外でのボランティアやインターンシップ　→B4-3-SQ1へ
海外旅行　→B4-3-SQ2へ
海外での経験はない →B4-4（あるいはB5あるいはC)へ

B4-3-SQ1　プルダウン

業種　→　別紙参照
職種　→　別紙参照

選択設問

B4-3 , B4-3-SQ1、B4-3-SQ2
使用していない学校:
E大学:B4-3 , B4-3-SQ1、B4-3-SQ2

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B 在学時の学習・学校生活について　B4-4～B4-4-SQ3

私立文系大学版

B4-4 あなたは次のようなインターンシップや実習などの就業体験を経験しましたか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ インターンシップを経験した
- □ 資格取得のための実習を経験した
- □ 専門分野に関連するアルバイトをした
- □ 学外での就業体験はしなかった

B4-4-SQ1 インターンシップ先の業種・職種について、もっともあてはまるものを1つ選択してください

業種: ▼

▼

その他(具体的に)

職種: ▼

▼

その他(具体的に)

B4-4-SQ2 インターンシップを振り返って、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		専門と密接に関連付けられていた				専門とは関連がなかった
a	インターンシップの内容は、在籍していた学科・専攻と関連していましたか	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
		大いに役に立った				全く役立たなかった
b	インターンシップは卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

B4-4-SQ3 インターンシップに行ったことは、その後のあなたの学生生活や職業生活への移行などにどのような影響がありましたか。以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあてはまる				全くあてはまらない
a	自信をもって積極的に行動できるようになった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
b	働くことの楽しさ、厳しさがわかった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
c	就職したい業界が明確になった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
d	自分の適性に気づくことができた	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
e	卒業時の職業選択の参考になった	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

B4-3　回答分岐

インターンシップを経験した　→B4-3-SQ1へ
資格取得のための実習を経験した　→B5(あるいはC)へ
専門分野に関連するアルバイトをした　→B5(あるいはC)へ
学外での就業体験はしなかった　→B5(あるいはC)へ

B4-3-SQ1　プルダウン

業種　→　別紙参照
職種　→　別紙参照

選択設問

B4-4 , B4-4-SQ1、B4-4-SQ2、B4-4-SQ3

使用していない学校:
省略している学校は無し

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

B 在学時の学習・学校生活について　B5

私立文系大学版

B5 あなたは本学の在学経験を通じて職業に対し、どのように考えるようになりましたか。各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		よくあてはまる				全くあてはまらない
a	働くことの意義を理解することができた	5	4	3	2	1
b	将来就きたい仕事や職業が明確になった	5	4	3	2	1
c	職業に必要な知識・技能を身につけることができた	5	4	3	2	1
d	仕事をすることの厳しさやつらさを知った	5	4	3	2	1

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

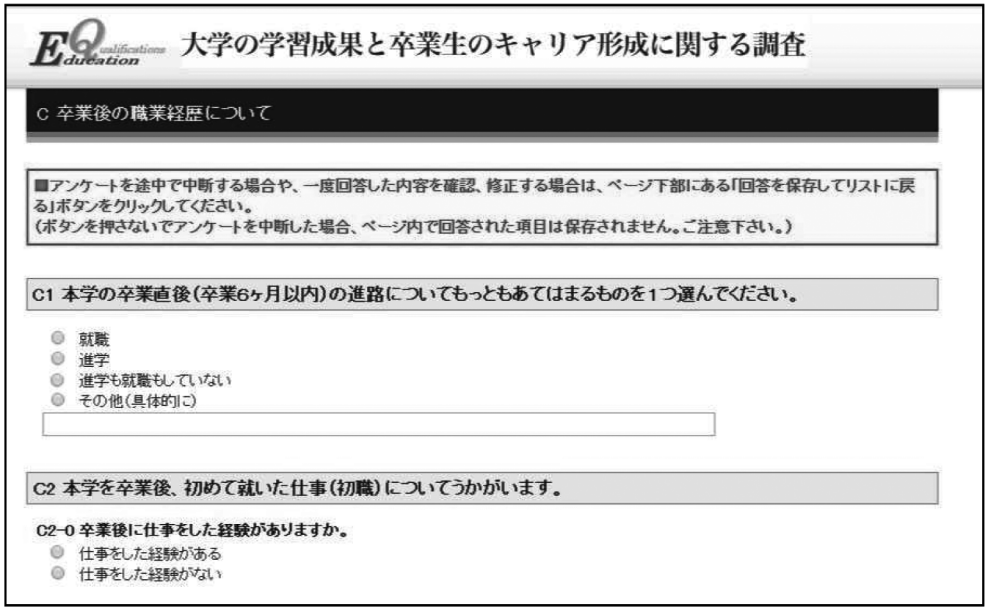
選択設問

B5
使用していない学校:
省略している学校は無し

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C1～C2-0

私立文系大学版



C1 回答分岐

就職	→C2-1へ
進学(研究科・専攻科への内部進学も含む)	→C1-SQへ
進学も就職もしていない	→C2-0へ
その他(具体的に)	→C2-0へ

C2-0 回答分岐

仕事をした経験がある	→C2-1へ
仕事をした経験がない	→Eへ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C2-1～C2-5

私立文系大学版

C2-1 仕事の就業形態について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。
就業形態:
その他(具体的に)
C2-2 業種、職種、企業・施設等の規模について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。
a 業種:
その他(具体的に)
b 職種:
その他(具体的に)
c 企業等全体の従業員数:
C2-3 その仕事(初職)はいつから始めましたか。
西暦 年 月
C2-4 その仕事(初職)は本学で、専攻した分野と関連がありますか。
関連分野である
関連分野でない
C2-5 その仕事(初職)を現在も続けていますか。あてはまるものを1つ選んでください。
その仕事(初職)を続けている
その仕事(初職)は辞めている

C2-1 プルダウン

就業形態:
正規の社員・職員として勤務
契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務
自営業・家業の仕事に就いている
パートタイム・臨時などの仕事に就いている
その他

C2-2 プルダウン

業種 → 別紙参照
職種 → 別紙参照
企業等全体の従業員数:
5人以下、6～20人、21～99人、100～299人、300～499人
500～999人、1000人以上

C2-3 プルダウン

年:2013～1901 月:1～12

C2-5 回答分岐

その仕事(初職)を続けている →C4-1へ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C2-6～C2-8

私立文系大学版

C2-6 その仕事(初職)はいつ辞めましたか。

西暦 [▼] 年 [▼] 月

C2-7 その仕事(初職)を辞めた理由は何ですか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。

- 新たなステップアップを図りたかったから
- 自分の専門と合っていなかったから
- 仕事にやりがいを感じられなかったから
- 労働条件(収入、労働時間、福利厚生等)に不満があったから
- 職場の人間関係に問題があったから
- 解雇や倒産などの勤務先の事情で
- 結婚したから
- 出産・育児・介護のため
- その他
  (具体的に)

C2-8 現在までにいくつの企業や施設等で仕事をしましたか。

[▼]

C2-6 プルダウン

年:2013～1901　月:1～12

C2-8 プルダウン

1、2、3、4、5以上

選択設問

C2-7, C2-8

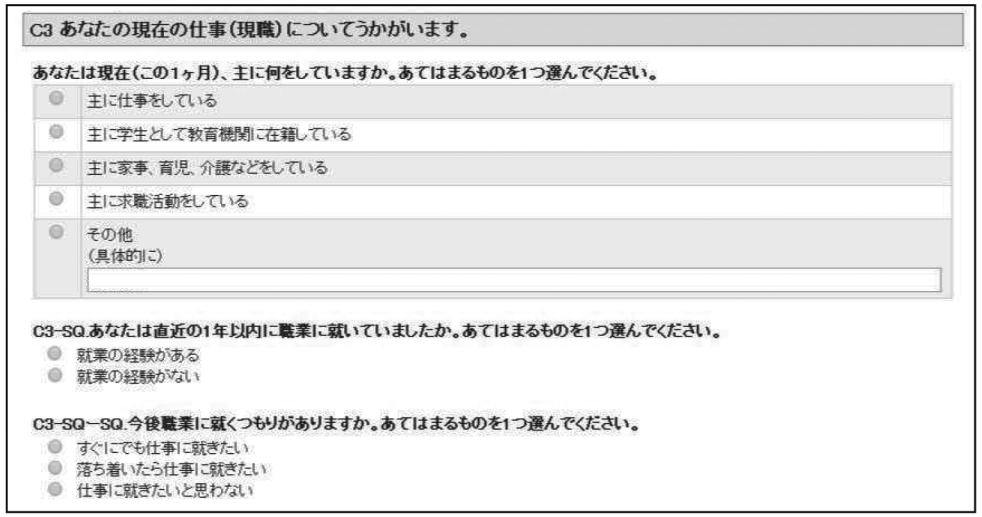
使用していない学校:

E大学:C2-7, C2-8

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C3～C3-SQ-SQ

私立文系大学版



C3 あなたの現在の仕事(現職)についてうかがいます。

あなたは現在(この1ヶ月)、主に何をしていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

- 主に仕事をしている
- 主に学生として教育機関に在籍している
- 主に家事、育児、介護などをしている
- 主に求職活動をしている
- その他
  (具体的に)

C3-SQ.あなたは直近の1年以内に職業に就いていましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

- 就業の経験がある
- 就業の経験がない

C3-SQ~SQ.今後職業に就くつもりがありますか。あてはまるものを1つ選んでください。

- すぐにでも仕事に就きたい
- 落ち着いたら仕事に就きたい
- 仕事に就きたいと思わない

C3 回答分岐

主に仕事をしている	→C4-1へ
主に学生として教育機関に在籍している	→C3-SQへ
主に家事、育児、介護などをしている	→C3-SQへ
主に求職活動をしている	→C3-SQへ
その他	→C3-SQへ

C3-SQ 回答分岐

主に家事、育児、介護などをしているに回答した人はC3-SQ-SQへ、
それ以外はDへ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C4-1～C4-4

私立文系大学版

C4-1 現在の仕事(直近の1年以内を含む)の就業形態について、もっともあてはまるものを1つ選んでください。

就業形態:

その他(具体的に)

C4-2 業種、職種、企業・施設等の規模、職場での地位(役職等)について、もっともあてはまるものを1つ選択してください。

a 業種:

その他(具体的に)

b 職種:

その他(具体的に)

c 企業等全体の従業員数:

d 職場での地位:

- 役職についている
- 役職についていない

C4-3 現在の仕事(直近1年以内を含む)は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか。

- 関連分野である
- 関連分野でない

C4-4 現在の仕事(直近1年以内を含む)の年収はどれくらいですか。もっとも近いものを1つ選んでください。

- 100万円未満
- 100万円以上150万円未満
- 150万円以上200万円未満
- 200万円以上300万円未満
- 300万円以上400万円未満
- 400万円以上500万円未満
- 500万円以上600万円未満
- 600万円以上700万円未満
- 700万円以上800万円未満
- 800万円以上900万円未満
- 900万円以上1000万円未満
- 1000万円以上1500万円未満
- 1500万円以上

C4-1 プルダウン

就業形態:
正規の社員・職員として勤務
契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務
自営業・家業の仕事に就いている
パートタイム・臨時などの仕事に就いている
その他

C4-2 プルダウン

業種 → 別紙参照
職種 → 別紙参照
企業等全体の従業員数:
5人以下
6～20人
21～99人
100～299人
300～499人
500～999人
1000人以上

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C 卒業後の職業経歴について C4-5～C4-8

私立文系大学版

C4-5 現在の仕事（直近1年以内を含む）では、1週間あたり何時間働いていますか。（残業時間も含む）

C4-6 現在の仕事（直近1年以内を含む）の職場で、あなたは、自分の学歴にふさわしい評価をされている（されていた）と思いますか。以下の各設問について次の6段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		学歴にふさわしい評価をされている			学歴にふさわしい評価をされていない	わからない
a	昇進や昇格について	5	4	3	2	1
b	賃金水準	5	4	3	2	1
c	責任の重さ	5	4	3	2	1

C4-7 あなたは現在の仕事（直近1年以内を含む）で、次のようなことがどの程度あてはまりますか。以下の各設問について、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		あてはまる				あてはまらない
a	本学で得た知識・技能が活用できている	5	4	3	2	1
b	自分の適性を活かす機会がある	5	4	3	2	1
c	新たなことを学ぶ機会、能力開発の機会がある	5	4	3	2	1
d	仕事をする上での自律性が尊重されている	5	4	3	2	1
e	社会に役立つ機会がある	5	4	3	2	1
f	職場の雰囲気がよい	5	4	3	2	1
g	男女差別のない処遇がなされている	5	4	3	2	1
h	収入や福利厚生が整っている	5	4	3	2	1

C4-8 あなたは現在の仕事を総合的にみて、どの程度満足していますか？

とても満足している				とても不満である
5	4	3	2	1

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
（ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。）

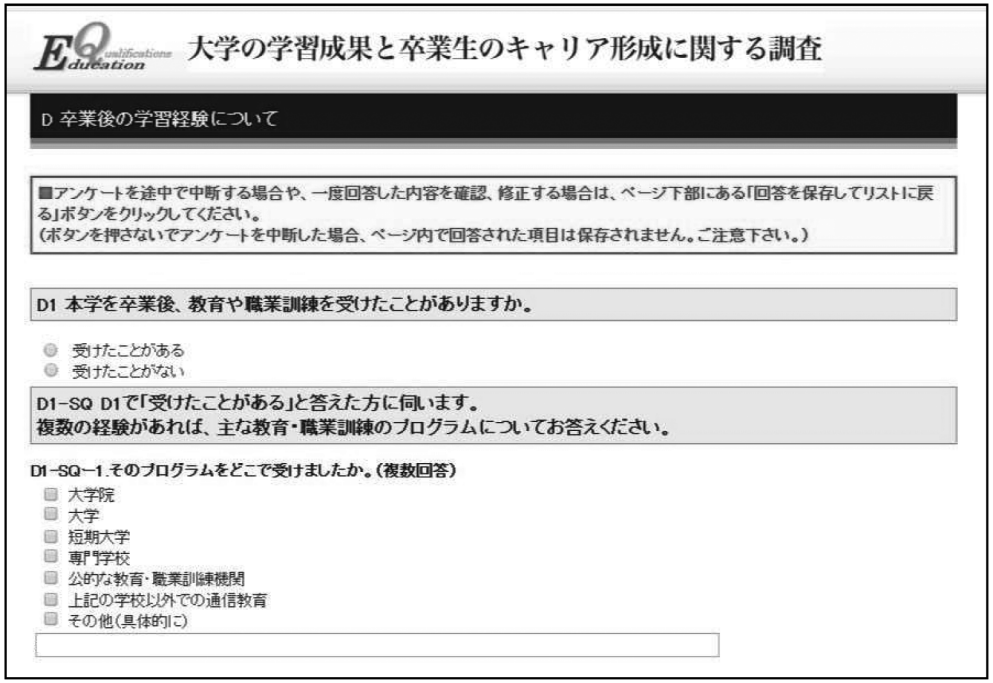
C4-5 プルダウン

週1～4時間
週5～9時間
週10～14時間
週15～19時間
週20～24時間
週25～29時間
週30～34時間
週35～39時間
週40～44時間
週45～49時間
週50～54時間
週55～59時間
週60～64時間
週65～69時間
週70時間以上

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D1～D1-SQ1

私立文系大学版


大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

D 卒業後の学習経験について

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

D1 本学を卒業後、教育や職業訓練を受けたことがありますか。

- 受けたことがある
- 受けたことがない

D1-SQ D1で「受けたことがある」と答えた方に伺います。
複数の経験があれば、主な教育・職業訓練のプログラムについてお答えください。

D1-SQ-1 そのプログラムをどこで受けましたか。(複数回答)

- 大学院
- 大学
- 短期大学
- 専門学校
- 公的な教育・職業訓練機関
- 上記の学校以外での通信教育
- その他(具体的に)

D1　回答分岐

受けたことがない　→Eへ

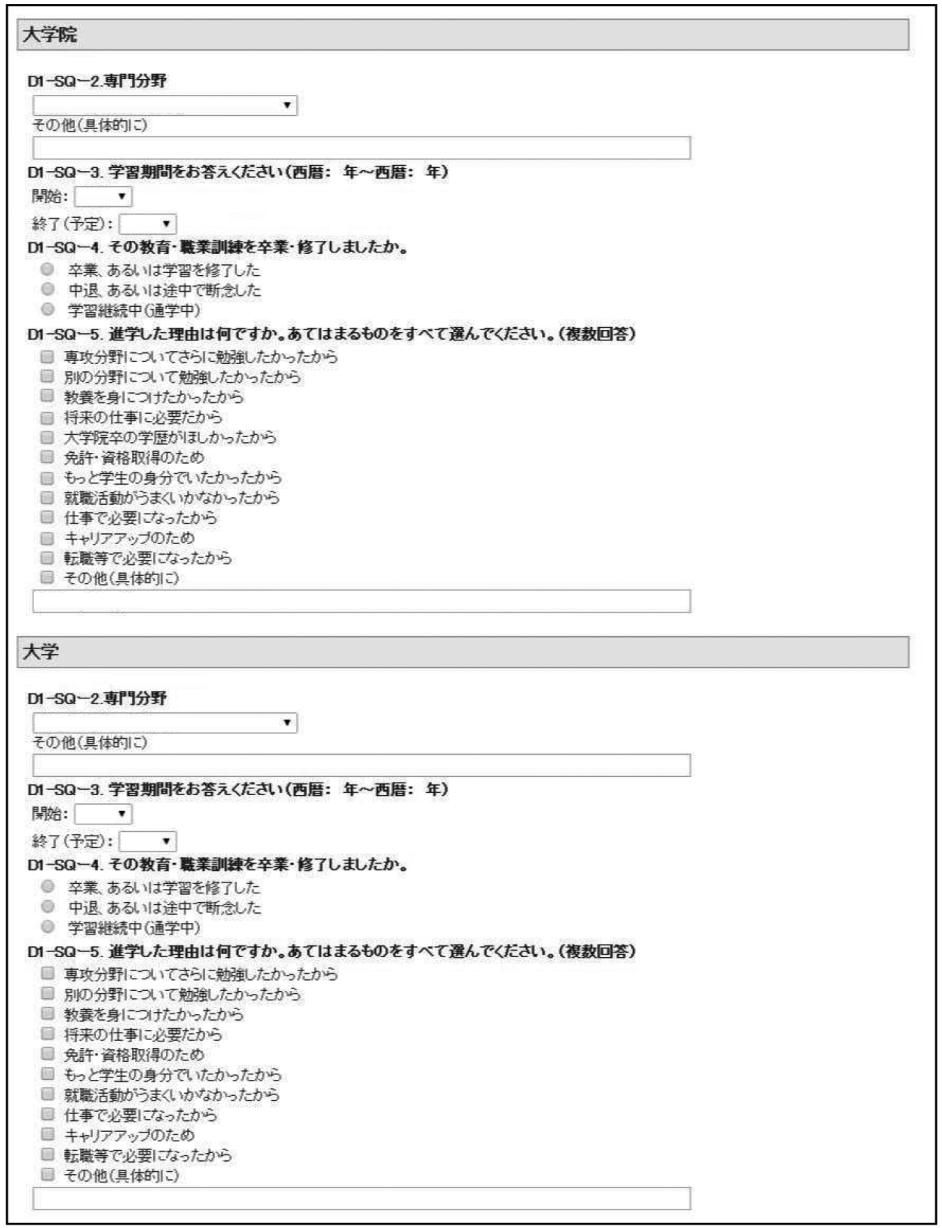
D1-SQ-1　回答分岐

大学院　→大学院の回答へ
大学　→大学の回答へ
短期大学　→短期大学の回答へ
専門学校　→専門学校の回答へ
公的な教育・職業訓練機関
　→公的な教育・職業訓練機関の回答へ
上記の学校以外での通信教育
　→上記の学校以外での通信教育の回答へ
その他　→その他の回答へ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D1-SQ大学院～D1-SQ大学

私立文系大学版



大学院

D1-SQ-2.専門分野

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始:

終了(予定):

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- 卒業、あるいは学習を修了した
- 中退、あるいは途中で断念した
- 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- 別の分野について勉強したかったから
- 教養を身につけたかったから
- 将来の仕事に必要だから
- 大学院卒の学歴がほしかったから
- 免許・資格取得のため
- もっと学生の身分でいたかったから
- 就職活動がうまくいかなかったから
- 仕事で必要になったから
- キャリアアップのため
- 転職等で必要になったから
- その他(具体的に)

大学

D1-SQ-2.専門分野

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始:

終了(予定):

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- 卒業、あるいは学習を修了した
- 中退、あるいは途中で断念した
- 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- 別の分野について勉強したかったから
- 教養を身につけたかったから
- 将来の仕事に必要だから
- 免許・資格取得のため
- もっと学生の身分でいたかったから
- 就職活動がうまくいかなかったから
- 仕事で必要になったから
- キャリアアップのため
- 転職等で必要になったから
- その他(具体的に)

D1-SQ-2　プルダウン

専門分野　→　別紙参照

D1-SQ-3　プルダウン

開始:2013～1920
終了:2013～1920

D1-SQ-5　チェックボックス

大学院の選択肢のみ、
「大学院卒の学歴がほしかったから」が表示される

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D1-SQ短期大学～D1-SQ専門学校

私立文系大学版

短期大学

D1-SQ-2.専門分野

▾

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始: ▾

終了(予定): ▾

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- ○ 卒業、あるいは学習を修了した
- ○ 中退、あるいは途中で断念した
- ○ 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- □ 別の分野について勉強したかったから
- □ 教養を身につけたかったから
- □ 将来の仕事に必要だから
- □ 免許・資格取得のため
- □ もっと学生の身分でいたかったから
- □ 就職活動がうまくいかなかったから
- □ 仕事で必要になったから
- □ キャリアアップのため
- □ 転職等で必要になったから
- □ その他(具体的に)

専門学校

D1-SQ-2.専門分野

▾

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始: ▾

終了(予定): ▾

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- ○ 卒業、あるいは学習を修了した
- ○ 中退、あるいは途中で断念した
- ○ 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- □ 別の分野について勉強したかったから
- □ 教養を身につけたかったから
- □ 将来の仕事に必要だから
- □ 免許・資格取得のため
- □ もっと学生の身分でいたかったから
- □ 就職活動がうまくいかなかったから
- □ 仕事で必要になったから
- □ キャリアアップのため
- □ 転職等で必要になったから
- □ その他(具体的に)

D1-SQ-2　プルダウン

専門分野　→　別紙参照

D1-SQ-3　プルダウン

開始:2013～1920
終了:2013～1920

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D1-SQ公的な教育・職業訓練機関～D1-SQ上記の学校以外での通信教育

公的な教育・職業訓練機関

D1-SQ-2.専門分野

▾

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始: ▾

終了(予定): ▾

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- ○ 卒業、あるいは学習を修了した
- ○ 中退、あるいは途中で断念した
- ○ 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- □ 別の分野について勉強したかったから
- □ 教養を身につけたかったから
- □ 将来の仕事に必要だから
- □ 免許・資格取得のため
- □ もっと学生の身分でいたかったから
- □ 就職活動がうまくいかなかったから
- □ 仕事で必要になったから
- □ キャリアアップのため
- □ 転職等で必要になったから
- □ その他(具体的に)

上記の学校以外での通信教育

D1-SQ-2.専門分野

▾

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始: ▾

終了(予定): ▾

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- ○ 卒業、あるいは学習を修了した
- ○ 中退、あるいは途中で断念した
- ○ 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- □ 別の分野について勉強したかったから
- □ 教養を身につけたかったから
- □ 将来の仕事に必要だから
- □ 免許・資格取得のため
- □ もっと学生の身分でいたかったから
- □ 就職活動がうまくいかなかったから
- □ 仕事で必要になったから
- □ キャリアアップのため
- □ 転職等で必要になったから
- □ その他(具体的に)

D1-SQ-2　プルダウン

専門分野　→　別紙参照

D1-SQ-3　プルダウン

開始:2013～1920
終了:2013～1920

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D1-SQその他

私立文系大学版

その他(具体的に)

D1-SQ-2.専門分野

その他(具体的に)

D1-SQ-3. 学習期間をお答えください(西暦:　年～西暦:　年)

開始:

終了(予定):

D1-SQ-4. その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

- 卒業、あるいは学習を修了した
- 中退、あるいは途中で断念した
- 学習継続中(通学中)

D1-SQ-5. 進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- 専攻分野についてさらに勉強したかったから
- 別の分野について勉強したかったから
- 教養を身につけたかったから
- 将来の仕事に必要だから
- 免許・資格取得のため
- もっと学生の身分でいたかったから
- 就職活動がうまくいかなかったから
- 仕事で必要になったから
- キャリアアップのため
- 転職等で必要になったから
- その他(具体的に)

D1-SQ-2　プルダウン

専門分野　→　別紙参照

D1-SQ-3　プルダウン

開始:2013～1920
終了:2013～1920

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

D 卒業後の学習経験について　D2-1～D3

私立文系大学版

D2-1. 教育・職業訓練や学習の際にどのような困難がありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- 職場の理解やサポートを得られなかった
- 家族等の理解やサポートを得られなかった
- 時間的制約
- 学費などの経済面
- 困難はなかった
- その他(具体的に)

D2-2 教育・職業訓練や学習を終えた後、就業状況はどのように変わったと思いますか。
以下の各設問について、次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		高くなった		変わらない		低くなった
a	職場内での評価	5	4	3	2	1
b	能力を獲得した自信	5	4	3	2	1
c	昇進・昇給などの客観条件	5	4	3	2	1
d	その他(具体的に)	5	4	3	2	1

D3 現在までに取得・合格した免許・資格・検定の中で、主なものを3つまでお答えください。(省略可)

			入学前	卒業時	卒業後5年未満	卒業後5年以上
免許・資格・検定の名称	その他(具体的に)	取得・合格の時期				
免許・資格・検定の名称	その他(具体的に)	取得・合格の時期				
免許・資格・検定の名称	その他(具体的に)	取得・合格の時期				

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

D2-2　回答分岐

C1、C2-1で「仕事をした経験がある」と回答した人が対象

D3　プルダウン

資格・検定の名称　→　別紙参照

選択設問

D2-1, D2-2,D3
使用していない学校:
E大学:D2-1, D2-2

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

E. 大学などで獲得した能力の活用について　E1-1

私立文系大学版

EQ education 大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

E. 大学などで獲得した能力の活用について

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

E1. 大学などで獲得した能力についてうかがいます。

E1-1 あなたは、本学を卒業時までに獲得することを期待していた次のような知識・技能・能力を現在どの程度身につけていますか。
以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

			(A)現在の獲得水準				
			十分身につけている				ほとんど身につけていない
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	4	3	2	1
	b	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	5	4	3	2	1
専門的な知識	c	経営や情報技術に関する基礎的な知識	5	4	3	2	1
	d	学際的な知識や考え方	5	4	3	2	1
専門的な技能	e	PCを活用する能力	5	4	3	2	1
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	5	4	3	2	1
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	5	4	3	2	1
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	5	4	3	2	1
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	5	4	3	2	1
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	5	4	3	2	1
	k	論理的に物事を考える力	5	4	3	2	1
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	4	3	2	1
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	5	4	3	2	1
	n	知識を横断的に活用する力	5	4	3	2	1
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	5	4	3	2	1
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	5	4	3	2	1

E1　回答分岐

C2-0で「仕事をした経験がある」と回答: →E1-1及びE1-2
C2-0で「仕事をした経験がない」と回答: →E1-1及びE1-2'

E1-1　ラジオボタン

a〜p:
設問の表示については領域により異なります。→　別紙参照
※IDによって4領域に分かれている。

	共通項目		領域1 観光	領域2 人文・ビジネス	領域3 国家資格(福祉・保育)	領域4 国家資格(栄養士・管理栄養士)
a	基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識
b		高校までの教科・科目別の基礎知識	高校までの科目(国語、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(生物、家庭科など)に関する知識	高校までの科目(理科、家庭科など)に関する知識
c	専門的な知識	専攻分野に直接に関わる専門知識	語学や国内外の文化・歴史等に関する基礎的な知識	経営や情報技術に関する基礎的な知識	人と生活、福祉等に関する知識	食品、栄養に関する知識
d		専攻分野の周辺領域の専門知識	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方
e	専門的な技能	業務に直接関わる技能	対人能力、ホスピタリティの実践と活用能力	PCを活用する能力	利用者の尊厳の保持・自立支援に関わる介護実践等の技能	調理や給食等を運営する技能
f		専門分野で課題を発見し問題解決する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力
g	基礎的・社会的な技能	仕事の段取りをデザインする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力
h		職場の中でのチームワークやリーダーシップ	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力
i		顧客や外部とのコミュニケーション	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	利用者や外部に対するコミュニケーション能力	顧客や外部とのコミュニケーション能力
j		生涯学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力
k		論理的思考力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力
l		プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力
m	統合的な学習知識と創造的な思考力	批判的・創造的思考力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	ものごとを批判的に検討する力
n		知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力
o	グローバルな能力	多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力
p		外国語で書いたり話したりする技能	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

E. 大学などで獲得した能力の活用について　E1-2

私立文系大学版

E1-2.また、あなたは現在の仕事では、そのような知識・技能・能力がどの程度必要とされていますか。
以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

			(ロ)現在の仕事での必要性				
			とても必要である				まったく必要でない
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	4	3	2	1
	b	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	5	4	3	2	1
専門的な知識	c	経営や情報技術に関する基礎的な知識	5	4	3	2	1
	d	学際的な知識や考え方	5	4	3	2	1
専門的な技能	e	PCを活用する能力	5	4	3	2	1
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	5	4	3	2	1
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	5	4	3	2	1
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	5	4	3	2	1
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	5	4	3	2	1
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	5	4	3	2	1
	k	論理的に物事を考える力	5	4	3	2	1
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	4	3	2	1
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	5	4	3	2	1
	n	知識を横断的に活用する力	5	4	3	2	1
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	5	4	3	2	1
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	5	4	3	2	1

E1-2　ラジオボタン

a〜p:
設問の表示については領域により異なります。→　別紙参照
※IDによって4領域に分かれている。

	共通項目		領域1 観光	領域2 人文・ビジネス	領域3 国家資格(福祉・保育)	領域4 国家資格 (栄養士・管理栄養士)
a	基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識
b		高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	高校までの科目(国語、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(生物、家庭科など)に関する知識	高校までの科目(理科、家庭科など)に関する知識
c	専門的な知識	専攻分野に直接関わる専門知識	語学や国内外の文化・歴史等に関する基礎的な知識	経営や情報技術に関する基礎的な知識	人と生活、福祉等に関する知識	食品、栄養に関する知識
d		専攻分野の周辺領域の専門知識	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方
e	専門的な技能	業務に直接関わる技能	対人能力、ホスピタリティの実践と活用能力	PCを活用する能力	利用者の尊厳の保持・自立支援に関わる介護実践等の技能	調理や給食等を運営する技能
f		専門分野で課題を発見し問題解決する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力
g	基礎的・社会的な技能	仕事の段取りをデザインする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力
h		職場の中でのチームワークやリーダーシップ	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力
i		顧客や外部とのコミュニケーション	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	利用者や外部に対するコミュニケーション能力	顧客や外部とのコミュニケーション能力
j		生涯学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力
k		論理的思考力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力
l		プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力
m	統合的な学習知識と創造的な思考力	批判的・創造的思考力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	ものごとを批判的に検討する力
n		知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力
o	グローバルな能力	多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力
p		外国語で書いたり話したりする技能	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

E. 大学などで獲得した能力の活用について　E1-2’

私立文系大学版

E1-2.また、あなたは現在の生活で、そのような知識・技能・能力をどの程度活用していますか。
以下の各設問について次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

			(C)現在の生活での活用度				
			よく使っている				まったく使っていない
基礎的な知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	4	3	2	1
	b	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	5	4	3	2	1
専門的な知識	c	経営や情報技術に関する基礎的な知識	5	4	3	2	1
	d	学際的な知識や考え方	5	4	3	2	1
専門的な技能	e	PCを活用する能力	5	4	3	2	1
	f	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	5	4	3	2	1
基礎的・社会的な技能	g	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	5	4	3	2	1
	h	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	5	4	3	2	1
	i	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	5	4	3	2	1
	j	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	5	4	3	2	1
	k	論理的に物事を考える力	5	4	3	2	1
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	4	3	2	1
統合的な学習知識と創造的思考力	m	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	5	4	3	2	1
	n	知識を横断的に活用する力	5	4	3	2	1
グローバルな能力	o	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	5	4	3	2	1
	p	外国語を用いて書いたり話したりする力	5	4	3	2	1

E1-2’　ラジオボタン

a～p:
設問の表示については領域により異なります。→ 別紙参照
※IDによって4領域に分かれている。

	共通項目		領域1 観光	領域2 人文・ビジネス	領域3 国家資格(福祉・保育)	領域4 国家資格 (栄養士・管理栄養士)
a	基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識	高校卒業程度の基礎的な知識
b		高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	高校までの科目(国語、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(国語、数学、英語、地歴・公民など)に関する知識	高校までの科目(生物、家庭科など)に関する知識	高校までの科目(理科、家庭科など)に関する知識
c	専門的な知識	専攻分野に直接に関わる専門知識	語学や国内外の文化・歴史等に関する基礎的な知識	経営や情報技術に関する基礎的な知識	人と生活、福祉等に関する知識	食品、栄養に関する知識
d		専攻分野の周辺領域の専門知識	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方	学際的な知識や考え方
e	専門的な技能	業務に直接関わる技能	対人能力、ホスピタリティの実践と活用能力	PCを活用する能力	利用者の尊厳の保持・自立支援に関わる介護実践等の技能	調理や給食等を運営する技能
f		専門分野で課題を発見し問題解決する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力	担当業務の課題を発見し、具体的な解決策を提案する能力
g	基礎的・社会的な技能	仕事の段取りをデザインする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力	優先順位をつけて、仕事を段取りする能力
h		職場の中でのチームワークやリーダーシップ	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力	組織における自分の役割を認識し、チームに貢献できる能力
i		顧客や外部とのコミュニケーション	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	取引先や顧客などに対するコミュニケーション能力	利用者や外部に対するコミュニケーション能力	顧客や外部とのコミュニケーション能力
j		生涯学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力	新しい知識や技術に対して自分で調べ、継続的に学び続ける力
k		論理的思考力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力	論理的に物事を考える力
l		プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力	プレッシャーの中で活躍する力
m	統合的な学習知識と創造的な思考力	批判的・創造的思考力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	ものごとを批判的に検討する力
n		知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力	知識を横断的に活用する力
o	グローバルな能力	多文化、異文化に関する知識の理解に関する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力	多文化、異文化を理解し、業務を遂行する能力
p		外国語で書いたり話したりする技能	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力	外国語を用いて書いたり話したりする力

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

E. 大学などで獲得した能力の活用について　E2～E3

私立文系大学版

E2 E1で回答した能力をあなたはどの場面で身につけましたか。それぞれあてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

		家庭や小中高(入学前)	在学中							卒業後		
			座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習、自己啓発	その他の社会的な経験
a	基礎的な知識	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
b	専門的な知識	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
c	専門的な技能	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
d	基礎的・社会的な技能	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
e	統合的な学習知識と創造的思考力	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
f	グローバルな能力	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□

E3 全体として、あなたはいろいろな能力を、どこでどのくらい身につけたと思いますか。現在の能力を100%とした場合、次の3つの段階で、それぞれもっとも近いと思う数値を選んでください。

設問E3は合計で100%になるように入力してください。
合計100%になっていない場合は移動出来ません。

a	家庭や小中高校までに	▼
b	本学の在学中に	▼
c	本学を卒業後	▼

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

E3 プルダウン

a:0%～100%　※10きざみ
b:0%～100%　※10きざみ
c:0%～100%　※10きざみ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F これまでの生活や家族について F1-1～F1-2-2

私立文系大学版

大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

F これまでの生活や家族について

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
（ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。）

F1. 入学前の経験についてうかがいます。

F1-1 中学3年生の時のあなたの成績はどうでしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

	上の方				下の方
あなたの成績	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

F1-2-1 高校で在籍した学科はどこですか。あてはまるものを1つ選んでください。

- ○ 普通科
- ○ 専門学科（職業学科）
- ○ 総合学科
- ○ その他（具体的に）
- ○ 高校に在籍したことはない

F1-2-2 あなたは高校卒業時までに高校卒業程度の学習内容を十分理解していましたか。次の5段階の中でもっとも近いものを1つ選んでください。

学習内容を十分理解していた				学習内容はよく分からないままだった
5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F これまでの生活や家族について F1-3～F1-5

私立文系大学版

F1-3. 本学の入学前に他の機関等での高等教育での学習の経験がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。

- ○ 短期大学
- ○ 専門学校
- ○ 高等専門学校
- ○ 大学
- ○ 大学院
- ○ その他(具体的に)
- ○ なし

F1-3-SQ 専門分野は何ですか。もっともあてはまるものを1つ選んでください。

専門分野:

その他(具体的に)

F1-4 入学前に仕事に就いた経験がありますか。

- ○ ある
- ○ なし

F1-4-SQ 就業していた期間の合計

F1-5. 本学への志願時に、他にも進学を希望していた学校がありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

- □ 本学が第一志望
- □ 他の四年制大学
- □ 短期大学
- □ 専門学校
- □ その他(具体的に)

F1-3 回答分岐

なし →F1-4へ

F1-3-SQ プルダウン

専門分野 → 別紙参照

F1-4 回答分岐

ある →G1-4-SQへ

F1-4-SQ プルダウン

就業していた期間の合計:6ヶ月未満、6ヶ月～1年未満、1年、2年、3年、4年、5年、6～10年未満、10年以上

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F これまでの生活や家族について F1-6～F2-2

私立文系大学版

F1-6 どのような入学試験を受けて、あなたは本学へ入学しましたか。あてはまるものを1つ選んでください

- ○ 一般入試
- ○ センター試験利用型入試
- ○ 推薦入試
- ○ AO入試
- ○ 社会人入試
- ○ 編入学入試
- ○ その他(帰国子女入試・留学生入試など)

F1-7 本学への志願時に、他にも進学を希望していた学科・分野がありましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

- ○ 本学で卒業した学科・分野が第一志望
- ○ 他の学科・分野が第一志望
- ○ 学科・分野に特別なこだわりはなかった

F2 本学在学中から現在までの生活や家族についてうかがいます。

F2-1 本学入学にあたって、ご家族の経済的な状況はどうでしたか。以下の選択肢の中からもっともあてはまるものを1つ選んでください。

- ○ 経済的に好きな進学先を選べる状況だった
- ○ なるべく学費などがかからない進路を選ぶ必要があった
- ○ 経済的には進学は厳しかった
- ○ 家族の経済状況はよく知らなかった

F2-2 本学在学中の学費等はどう支払いましたか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

- □ 主に保護者の負担で
- □ 主にアルバイトで
- □ 公的な奨学金や教育ローンで
- □ 本学の学費支援や奨学金で
- □ その他(具体的に)

F1-6 ラジオボタン

各大学で入試項目が違う → 別紙参照

選択設問

F1-7
使用していない学校:なし

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F これまでの生活や家族について F2-3～F2-5

私立文系大学版

F2-3. あなたは、これまでどこにお住まいでしたか。本学入学前と現在の状況について、それぞれあてはまるものを1つ選んでください。

入学前は本学から公共交通機関で:
- ○ 片道30分以内のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道30分以内のところ(別の都道府県)
- ○ 片道1時間程度のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道1時間程度のところ(別の都道府県)
- ○ 片道2時間以上のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道2時間以上のところ(別の都道府県)

現在は本学から公共交通機関で:
- ○ 片道30分以内のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道30分以内のところ(別の都道府県)
- ○ 片道1時間程度のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道1時間程度のところ(別の都道府県)
- ○ 片道2時間以上のところ(同じ都道府県内)
- ○ 片道2時間以上のところ(別の都道府県)

F2-4. あなたは、これまで誰と生活していましたか。本学在学中と現在の状況について、それぞれあてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

本学在学中
- □ 配偶者・パートナー
- □ 親
- □ 子ども
- □ 一人で
- □ その他(具体的に)

現在
- □ 配偶者・パートナー
- □ 親
- □ 子ども
- □ 一人で
- □ その他(具体的に)

F2-5. あなたの保護者の最終学歴は以下のどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。

父
- ○ 中卒
- ○ 高卒
- ○ 短大・専門学校・高専卒
- ○ 大学卒
- ○ 大学院卒(修士・博士課程)
- ○ その他(具体的に)

母
- ○ 中卒
- ○ 高卒
- ○ 短大・専門学校・高専卒
- ○ 大学卒
- ○ 大学院卒(修士・博士課程)
- ○ その他(具体的に)

F2-3 ラジオボタン

6項目の内容は各大学でカスタマイズ可能
→ カスタマイズした学校:なし

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F これまでの生活や家族について F2-6

私立文系大学版

F2-6. あなたは現在、普段の生活で、次のような行動を積極的にしていますか。次の各設問の活動について、次の5段階の中でもっともあてはまるものを1つ選んでください。

		積極的にしている				全くしていない
a	ニュースの視聴(テレビ・ラジオ・インターネット等)	5	4	3	2	1
b	新聞を読む	5	4	3	2	1
c	ボランティア活動	5	4	3	2	1
d	選挙の投票	5	4	3	2	1
e	友人との交流	5	4	3	2	1
f	趣味やスポーツの活動	5	4	3	2	1
g	地域活動(自治会・町内会・PTA活動を含む)	5	4	3	2	1

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
(ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

G これまでの経験を総合的に振り返って　G1～G2

私立文系大学版

大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査

G. これまでの経験を総合的に振り返って

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
（ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。）

G1 本学での在学中の経験は、次の各設問についてどれくらい重要でしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

		とても重要だった				全く重要ではなかった
a	就職先を見つける上で	5	4	3	2	1
b	仕事に必要な基礎を身につける上で	5	4	3	2	1
c	仕事に必要な学習を続けていく上で	5	4	3	2	1
d	将来のキャリアを展望する上で	5	4	3	2	1
e	人格を形成していく上で	5	4	3	2	1

G2 もし仮に高校卒業後の進路選択をやり直せるとすれば、どのような進路を選びますか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

- 同じように本学を選びたい
- 他の四年制大学に進学したい
- 専門学校に進学したい
- 短期大学に進学したい
- 就職、自営など仕事をしたい
- その他（具体的に）

G2-SQ どのような専門分野を選びますか。

- 本学で学んだのと同じ専門分野がよい
- 本学で学んだこととは違うが、現在の仕事に合うような専門分野がよい
- 本学で学んだことや今の仕事とは関係しない、別の専門分野がよい
- よくわからない

G1-3　回答分岐

同じように本学を選びたい　→G2-SQへ
専門学校に進学したい　→G2-SQへ
他の短期大学に進学したい　→G2-SQへ
四年制大学に進学したい　→G2-SQへ

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

G これまでの経験を総合的に振り返って　G3～ G5

私立文系大学版

G3 現在でも本学の同窓生と交流がありますか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

頻繁にある	月に1回程度	年に1回程度	ごくまれに	全くない
5	4	3	2	1

G4 総合的に振り返ってみて、本学に対する満足度はどうでしたか。次の5段階の中であてはまるものを1つ選んでください。

とても満足している				とても不満である
5	4	3	2	1

G5 本学の教育改善についてご意見があればご記入ください。

■アンケートを途中で中断する場合や、一度回答した内容を確認、修正する場合は、ページ下部にある「回答を保存してリストに戻る」ボタンをクリックしてください。
（ボタンを押さないでアンケートを中断した場合、ページ内で回答された項目は保存されません。ご注意下さい。）

G3、G4

・2014年1月24日以前に回答されたデータ → 設問未表示
・2014年1月25日以降に回答/再回答されたデータ
→ 設問表示あり

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

アンケート調査の終了

私立文系大学版

プルダウン

都道府県リスト

B大学追加設問

C大学専用の追加設問

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査　基礎集計表

・調 査 期 間：2014年12月24日～2015年７月１日
・参加機関数：５校（私立文系大学）
・発　送　数：6,233
・回　答　数：730
・回　収　率：11.7%
・有効回答数：672
・有効回答率：10.8%

設問項目　A　出身学部・学科とあなた自身について
　　B　在学時の学習・学生生活について
　　C　卒業後の職業経歴について
　　D　卒業後の学習経験について
　　E　大学などで獲得した能力の活用について
　　F　これまでの生活や家族について
　　G　これまでの経験を総合的に振り返って

○＝単数回答　□＝複数回答

A. 出身学部・学科とあなた自身について

A1. 本学の入学年月と卒業年月を記入してください。

入学年（西暦）：	年　月
卒業年（西暦）：	年　月

A2. 卒業した学部・学科・専攻等の名称を教えてください。

（各校ごとの学科・専攻のプルダウンリストから選択）

A3. あなたご自身についてうかがいます。

A3-1. あなたの性別を教えてください。

○男性　45.1　　○女性　54.9　（N=647）

A3-2. あなたの出身地について教えてください。

○日本　99.6　　○日本以外　0.4　（N=667）

A3-3. あなたの生まれた年と月を教えてください。

西暦：　　年　　月

B. 在学時の学習・学生生活について

B1. 本学での学生生活について伺います。あてはまるものを１つ選んでください。

	ほとんど出席	欠席は1/5以下	欠席は1/4くらい	欠席は1/3以上	
B1-1. 授業への出席	4 68.4	3 20.5	2 8.9	1 2.1	（N=414）

	授業以外でもほぼ毎日勉強していた				授業以外はほとんど勉強しなかった	
B1-2. 授業以外での学習時間（授業期間中）	5 5.1	4 14.2	3 37.6	2 22.8	1 20.3	（N=606）

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

（高等教育における学習の量と質（学習モード）に関する設問群）

B1-3.　３年前期（学期中），授業・実習等に出席した時間は一週間あたり何時間くらいでしたか。

（プルダウンリスト）　時間

B1-3. 授業・実習等の出席時間（１週間あたり）

出席時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	30	32	33	34	35	36	39	40	41～45	46～50	51以上	計	*n*
（%）	0.7	0.7	2.6	2.2	3.8	6.0	2.0	4.2	2.0	7.8	0.9	4.7	1.1	1.5	12.0	1.8	2.6	3.3	0.2	16.2	0.7	1.1	1.1	2.6	3.3	0.4	1.1	0.2	6.6	0.5	0.4	0.2	0.4	0.2	0.2	1.5	1.1	0.7	1.6	100.0	*549*

B1-4.　３年前期（学期中）の，授業・実習等出席以外の学習時間は一週間あたり何時間くらいでしたか。

（プルダウンリスト）　時間

B1-4. 授業・実習棟以外の学習時間（１週間あたり）

出席時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	23	24	25	30	36	40	46～50	51以上	計	*n*
（%）	18.6	12.4	11.8	7.3	16.3	3.8	4.1	1.9	0.6	10.1	0.2	0.9	1.1	0.8	3.0	0.4	0.4	0.2	0.2	2.3	0.6	0.4	0.4	0.2	0.9	0.4	0.4	0.4	0.2	100.0	*533*

B2.　在学中のあなたの成績はどうでしたか。次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

	上の方				下の方	
あなたの成績	5	4	3	2	1	
	18.5	28.5	39.9	8.2	4.9	(N=594)

B3.　次のような点で，本学の教育・指導は充実していましたか。以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		とても充実していた								全く充実していなかった	
a	高校までの基礎学力を学び直す授業	5	6.5	4	20.4	3	46.0	2	19.3	1	7.8	(N=524)
b	大学での学習方法を学ぶ授業	5	11.1	4	33.2	3	40.3	2	11.9	1	3.5	(N=521)
c	知識を広げ教養を身につける授業	5	28.6	4	41.9	3	25.1	2	3.1	1	1.4	(N=518)
d	外国語を習得するための授業	5	13.0	4	26.2	3	38.9	2	17.8	1	4.0	(N=522)
e	専門の授業（講義や演習）	5	35.0	4	40.6	3	20.6	2	2.7	1	1.2	(N=520)
f	インターンシップなど，仕事現場や地域での実習や就業経験	5	12.3	4	23.5	3	36.5	2	18.7	1	9.0	(N=520)
g	資格取得に関わる準備・指導	5	21.6	4	31.6	3	28.5	2	13.2	1	5.0	(N=522)
h	卒業論文，卒業制作，卒業発表	5	27.6	4	34.1	3	24.3	2	6.5	1	7.5	(N=522)
i	海外研修や留学のための機会や指導	5	10.3	4	14.9	3	37.7	2	19.1	1	18.0	(N=517)
j	研究室・ゼミでの授業や活動	5	33.2	4	33.0	3	23.9	2	6.8	1	3.1	(N=518)
k	部活やサークル，学校の行事	5	24.3	4	26.4	3	30.3	2	12.8	1	6.2	(N=515)
l	図書室，情報機器，実験器具などの施設設備	5	24.5	4	37.8	3	27.4	2	8.1	1	2.1	(N=518)
m	学習支援（学習の仕方や理解度についての相談・支援の体制）	5	10.1	4	27.5	3	43.4	2	14.1	1	4.8	(N=516)
n	就職支援（就職活動についての相談・支援の体制）	5	16.7	4	32.9	3	32.7	2	12.7	1	5.0	(N=520)
o	生活についての相談	5	7.9	4	15.8	3	48.1	2	19.2	1	9.0	(N=520)

B4.　本学の提供する教育・指導や各種の活動についてうかがいます。

B4-1.　本学の提供する教育・指導や各種の活動に対して，どの程度熱心に取り組みましたか。
以下の各設問について次の６段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		熱心に取り組んだ										熱心に取り組まなかった		経験がない		
a	高校までの基礎学力を学び直す授業や指導	5	7.2	4	13.6	3	41.8	2	16.5	1	10.3	0	10.7	(N=582)
b	大学での学習方法を学ぶ授業や指導	5	12.6	4	34.9	3	34.9	2	10.4	1	2.4	0	4.8	(N=579)
c	知識を広げ教養を身につける授業	5	26.5	4	40.5	3	25.8	2	5.2	1	1.6	0	0.5	(N=578)
d	外国語を習得するための授業	5	13.0	4	18.3	3	36.4	2	19.7	1	10.2	0	2.4	(N=579)
e	専門の授業（講義や演習）	5	33.0	4	39.9	3	21.2	2	3.8	1	1.6	0	0.5	(N=576)
f	インターンシップなど，仕事現場や地域での実習や就業経験	5	18.0	4	16.1	3	23.9	2	9.7	1	6.7	0	25.6	(N=578)
g	資格取得	5	28.8	4	23.0	3	19.9	2	10.4	1	7.4	0	10.5	(N=579)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

h	卒業論文，卒業制作，卒業発表	5	34.4	4	29.6	3	19.8	2	6.8	1	3.7	0	5.7	(N=575)
i	海外研修や留学	5	11.8	4	7.0	3	10.3	2	6.4	1	10.1	0	54.4	(N=575)
j	研究室・ゼミでの授業や活動	5	33.2	4	32.5	3	23.2	2	8.0	1	2.2	0	0.9	(N=578)
k	部活やサークル，学校の行事	5	27.1	4	19.4	3	21.4	2	10.2	1	9.9	0	12.0	(N=576)
l	友だちとの交流	5	25.6	4	21.1	3	25.0	2	8.3	1	5.2	0	14.9	(N=579)
m	授業外での教員との交流	5	19.1	4	25.0	3	26.4	2	13.7	1	8.9	0	6.8	(N=575)
n	アルバイト	5	35.6	4	24.7	3	22.1	2	6.2	1	5.2	0	6.2	(N=579)
o	就職活動	5	26.8	4	27.5	3	25.7	2	10.1	1	5.7	0	4.2	(N=575)

B4-2. 本学で経験した授業では，次のことがどの程度ありましたか。以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		よくあった								ほとんどなかった		
a	学問的な理論や概念枠組みの授業	5	15.7	4	40.6	3	36.0	2	5.5	1	2.2	(N=581)
b	経験的・実務的な知識の授業	5	19.3	4	33.0	3	35.4	2	8.9	1	3.5	(N=576)
c	学生の関心や理解度に配慮した授業	5	13.1	4	31.7	3	40.5	2	11.8	1	2.9	(N=578)
d	グループワークなど学生が参加する授業	5	17.2	4	33.3	3	30.5	2	13.1	1	5.9	(N=550)
e	プロジェクト型・問題解決型学習	5	9.3	4	21.4	3	36.3	2	21.8	1	11.2	(N=579)
f	自分の意見や考えを求められる授業	5	12.0	4	30.1	3	35.3	2	16.2	1	6.4	(N=575)
g	小テストやレポートなどの課題が出される授業	5	26.6	4	39.2	3	27.5	2	5.2	1	1.6	(N=579)
h	適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される授業	5	8.5	4	19.0	3	33.6	2	23.5	1	15.4	(N=578)
i	フィールドワークや地域など学外と交流する授業	5	12.0	4	19.9	3	26.2	2	21.3	1	20.6	(N=577)

（1） グローバル人材育成に関する設問群（省略可）

B4-3. 在学中の海外での経験について伺います。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

		（N=571）
□	１ヶ月程度の語学研修	6.7
□	３ヶ月から半年未満の留学	4.0
□	半年以上の留学	2.5
□	海外でのボランティアやインターンシップ	3.0
□	海外旅行	17.5
□	海外での経験はない	73.9

B4-3-SQ1. 海外での学習経験を振り返って，次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		専門と密接に関連付けられていた								専門とは関連がなかった		
a	海外での学習経験は，在籍していた学科・専攻と関連していましたか	5	32.7	4	27.3	3	14.5	2	7.3	1	18.2	(N=617)

		大いに役に立った								全く役立たなかった		
b	海外での学習経験は卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	5	34.5	4	30.9	3	20.0	2	3.6	1	10.9	(N=617)

B4-3-SQ2. 海外での経験は，その後のあなたの学生生活や将来についての考え方にどのような影響を与えましたか。以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		よくあてはまる								全くあてはまらない		
a	自信をもって積極的に行動できるようになった	5	31.5	4	29.4	3	28.7	2	6.3	1	4.2	(N=143)
b	自分の適性に気づくことができた	5	24.5	4	23.8	3	29.4	2	13.3	1	9.1	(N=143)
c	多文化・異文化に関する理解や関心が深まった	5	65.0	4	25.2	3	8.4	2	0.7	1	0.7	(N=143)
d	日本に対する理解や関心が深まった	5	38.5	4	32.2	3	22.4	2	3.5	1	3.5	(N=143)
e	外国語の能力が向上した	5	22.4	4	26.6	3	21.0	2	18.2	1	11.9	(N=143)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

(2) キャリア教育やインターンシップ，実習とその効果に関する設問群（省略可）

B4-4. あなたは次のようなインターンシップや実習などの就業体験を経験しましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

（N=552）

□	インターンシップを経験した	14.7
□	資格取得のための実習を経験した	32.6
□	専門分野に関連するアルバイトをした	14.3
□	学外での就業体験はしなかった	47.6

B4-4-SQ1. インターンシップ先の業種・職種について，もっともあてはまるものを１つ選択してください。

業種：（分野別プルダウンリストから選択）
職種：（分野別プルダウンリストから選択）

B4-4-SQ1. 職種（インターンシップ先） （N=35）（%）

公務（一般行政や警察，自衛隊など）	17.1
卸売・小売業	14.3
公務（一般行政や警察，自衛隊など）	8.6
生活関連サービス業，娯楽業	5.7
情報通信業	5.7
ホテル，旅館などの宿泊業	5.7
保育所	2.9
製造業	2.9
宿泊業，飲食サービス業	2.9
航空運輸業	2.9
金融業・保険業	2.9
学校や病院などの給食施設	2.9
その他	25.7
計	100.0

B4-4-SQ1. 職種（インターンシップ先） （N=34）（%）

その他のサービスの職業	14.7
販売の職業	8.8
営業の職業	8.8
その他の専門的・技術的職業	8.8
その他の事務	8.8
総合職の事務	5.9
一般事務	5.9
その他の事務の職業	5.9
接客・給仕の職業	2.9
管理栄養士（主に調理）	2.9
営業・販売関連事務	2.9
ホテルスタッフ	2.9
グランドホステスなど旅客・貨物係事務	2.9
その他の介護・福祉指導の専門的職業	2.9
その他サービス職業	2.9
その他	11.8
計	100.0

B4-4-SQ2. インターンシップを振り返って，次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		専門と密接に関連付けられていた				専門とは関連がなかった	
a	インターンシップの内容は，在籍していた学科・専攻と関連していましたか	5 20.7	4 17.1	3 13.4	2 12.2	1 36.6	（N=82）

		大いに役に立った				全く役立たなかった	
b	インターンシップは卒業後の進路を選択する上で役に立ちましたか	5 28.0	4 23.2	3 29.3	2 11.0	1 8.5	（N=82）

B4-4-SQ3. インターンシップに行ったことは，その後のあなたの学生生活や職業生活への移行などにどのような影響がありましたか。以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		よくあてはまる				全くあてはまらない	
a	自信をもって積極的に行動できるようになった	5 17.5	4 46.3	3 23.8	2 7.5	1 5.0	（N=80）
b	働くことの楽しさ，厳しさがわかった	5 42.0	4 32.1	3 14.8	2 7.4	1 3.7	（N=81）
c	就職したい業界が明確になった	5 13.6	4 30.9	3 39.5	2 7.4	1 8.6	（N=81）
d	自分の適性に気づくことができた	5 19.8	4 42.0	3 25.9	2 6.2	1 6.2	（N=81）
e	卒業時の職業選択の参考になった	5 28.4	4 37.0	3 23.5	2 4.9	1 6.2	（N=81）

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

(3) 職業・キャリア意識の形成に関する設問群（省略可）

B5. あなたは本学の在学経験を通じて職業に対し，どのように考えるようになりましたか。各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		よく あてはまる				全く あてはまらない	
a	働くことの意義を理解することができた	5 14.9	4 24.1	3 34.0	2 13.8	1 13.2	(N=536)
b	将来就きたい仕事や職業が明確になった	5 17.3	4 21.8	3 27.9	2 19.0	1 14.0	(N=537)
c	職業に必要な知識・技能を身につけることができた	5 15.3	4 28.5	3 25.0	2 17.2	1 14.0	(N=536)
d	仕事をすることの厳しさやつらさを知った	5 20.3	4 24.4	3 24.0	2 16.9	1 14.4	(N=533)

C. 卒業後の職業経歴について

C1. 本学の卒業直後（卒業６ヶ月以内）の進路についてもっともあてはまるものを１つ選んでください。

○	就職	83.5	(N=577)
○	進学	6.2	
○	進学も就職もしていない	6.8	
○	その他（具体的に）	3.5	

C2. 本学を卒業後，初めて就いた仕事（初職）についてうかがいます。

C2-0. 卒業後に仕事をした経験がありますか。

○	仕事をした経験がある	92.6	(N=339)
○	仕事をした経験がない	7.4	

C2-1. 仕事の就業形態について，もっともあてはまるものを１つ選んでください。

就業形態：（プルダウンリスト）	⇒	正規の社員・職員として勤務	77.2	(N=549)
		契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	14.8	
		自営業・家業の仕事に就いている	0.7	
		パートタイム・臨時などの仕事に就いている	6.6	
		その他（具体的に　　）	0.7	

C2-2. 業種，職種，企業・施設等の規模について，もっともあてはまるものを１つ選んでください。

a 業種：	（分野別プルダウンリストから選択）		5人以下	2.5	(N=527)
b 職種：	（分野別プルダウンリストから選択）		6～20人	9.3	
c 企業等全体の従業員数：	（プルダウンリスト）	⇒	21～99人	20.1	
			100～299人	19.9	
			300～499人	10.1	
			500～999人	10.4	
			1000人以上	23.0	
			不明	4.7	

C2-2. a. 業種（初職）　(N=548)（%）

卸売・小売業	17.7
生活関連サービス業，娯楽業	8.4
情報通信業	6.2
製造業	6.2
医療，福祉	5.1
金融業・保険業	5.1
介護老人福祉・保健施設	2.9
病院などの医療施設	2.7

C2-2. b. 職種（初職）　(N=250)（%）

その他の専門的・技術的職業	10.4
営業の職業	10.0
一般事務	9.2
販売の職業	9.2
その他のサービスの職業	6.8
その他の介護・福祉指導の専門的職業	4.8
営業・販売関連事務	4.4
総合職の事務	4.0

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

公務（一般行政や警察，自衛隊など）	2.6
建設業	2.4
学校や病院などの給食施設	2.2
宿泊業，飲食サービス業	1.8
障害者福祉事業	1.8
病院	1.3
不動産業，物品賃貸業	1.3
公務（一般行政や警察，自衛隊など）	1.1
訪問介護・ディサービスなど居宅サービス関連	1.1
ホテル，旅館などの宿泊業	0.9
その他の教育，学習支援事業	0.7
小学校・中学校・高等学校等	0.7
旅行業	0.7
その他の医療，福祉	0.5
その他の行政（一般の公務など）	0.5
その他の鉄道・バス等の運輸業，郵便業	0.5
その他の老人福祉・介護事業	0.5
飲食店，飲食サービス業	0.5
児童福祉施設	0.5
老人福祉・介護事業	0.5
食品製造業	0.4
その他の教育，学習支援業	0.2
その他の社会保険・社会福祉・介護事業	0.2
その他の生活関連サービス業，娯楽業	0.2
航空運輸業	0.2
保育所	0.2
その他	21.9
計	100.0

その他の事務	3.6
接客・給仕の職業	2.4
訪問介護員，ヘルパー	2.4
管理栄養士（主に栄養指導）	2.0
介護福祉士として福祉施設指導専門員	1.6
情報処理技術者	1.6
その他の教育の職業	1.2
栄養士（主に調理）	1.2
管理栄養士（主に調理）	1.2
ホテルスタッフ	0.8
栄養教諭	0.8
栄養士（販売その他）	0.8
介護，医療に関わる一般事務	0.8
管理栄養士（販売その他）	0.8
接客・給仕	0.8
グランドホステスなど旅客・貨物係事務	0.4
その他サービス職業	0.4
その他の教員	0.4
その他の事務の職業	0.4
医療事務	0.4
商品開発	0.4
食料品検査の職業	0.4
保育士	0.4
旅行企画などの営業・販売の事務	0.4
その他	15.6
計	100.0

C2-3. その仕事（初職）はいつから始めましたか。

西暦：　　年　　月から

C2-4. その仕事（初職）は本学で，専攻した分野と関連がありますか。

○	関連分野である	37.9	（N=541）
○	関連分野でない	62.1	

C2-5. その仕事（初職）を現在も続けていますか。あてはまるものを１つ選んでください。

（N=546）

○	その仕事（初職）を続けている	55.9	→ C4-1へ
○	その仕事（初職）は辞めている	44.1	

C2-6. その仕事（初職）はいつ辞めましたか。

西暦：　　年　　月に

（4） 労働市場や職業訓練に関する設問群（省略可能）

C2-7. その仕事（初職）を辞めた理由は何ですか。もっともあてはまるものを１つ選んでください。

○	新たなステップアップを図りたかったから	27.0	（N=237）
○	自分の専門と合っていなかったから	4.2	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

○	仕事にやりがいを感じられなかったから	6.8
○	労働条件（収入，労働時間，福利厚生等）に不満があったから	20.3
○	職場の人間関係に問題があったから	5.5
○	解雇や倒産などの勤務先の事情で	10.1
○	結婚したから	5.5
○	出産・育児・介護のため	2.5
○	その他（具体的に：　　）	18.1

C2-8. 現在までにいくつの企業や施設等で仕事をしましたか。

1	17.2	(N=232)
2	50.4	
3	18.5	
4	7.3	
5以上	6.5	

C3. あなたの現在の仕事（現職）についてうかがいます。
あなたは現在（この１ヶ月），主に何をしていますか。あてはまるものを１つ選んでください。

(N=544)

○	主に仕事をしている	85.8	
○	主に学生として教育機関に在籍している	0.9	→ C3-SQ へ
○	主に家事，育児，介護などをしている	5.3	→ C3-SQ へ
○	主に求職活動をしている	5.1	→ C3-SQ へ
○	その他（具体的に　　）	2.8	→ C3-SQ へ

C3-SQ. あなたは直近の１年以内に職業に就いていましたか。あてはまるものを１つ選んでください。

○	就業の経験がある	50.7	(N=75)
○	就業の経験がない	49.3	→≪「主に家事，育児，介護などをしている」に回答した人は C3-SQ-SQ へ，それ以外は D へ≫

C3-SQ-SQ. 今後職業に就くつもりがありますか。あてはまるものを１つ選んでください。

○	すぐにでも仕事に就きたい	42.1	(N=19)
○	落ち着いたら仕事に就きたい	57.9	
○	仕事に就きたいと思わない	0.0	

C4-1. 現在の仕事（直近の１年以内を含む）の就業形態について，もっともあてはまるものを１つ選んでください。

就業形態：(プルダウンリスト)	⇒	正規の社員・職員として勤務	81.8	(N=440)
		契約・派遣などの非正規の社員・職員として勤務	17.0	
		自営業・家業の仕事に就いている	0.0	
		パートタイム・臨時などの仕事に就いている	0.0	
		その他（具体的に　　）	1.1	

C4-2. 業種，職種，企業・施設等の規模，職場での地位（役職等）について，もっともあてはまるものを１つ選択してください。

a 業種：	(分野別プルダウンリストから選択)		5人以下	1.6	(N=487)
b 職種：	(分野別プルダウンリストから選択)		6～20人	10.7	
c 企業等全体の従業員数：	(プルダウンリスト)	⇒	21～99人	20.7	
			100～299人	20.7	
			300～499人	9.0	
			500～999人	8.6	
			1000人以上	23.4	
			不明	5.1	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C4-2. a. 業種（現職）　（N=495）（%）

卸売・小売業	16.4
医療，福祉	7.5
生活関連サービス業，娯楽業	6.1
製造業	6.1
情報通信業	5.9
金融業・保険業	5.1
公務（一般行政や警察，自衛隊など）	4.2
病院などの医療施設	2.8
建設業	2.2
介護老人福祉・保健施設	2.0
宿泊業，飲食サービス業	2.0
障害者福祉事業	1.8
病院	1.8
学校や病院などの給食施設	1.6
公務（一般行政や警察，自衛隊など）	1.4
訪問介護・ディサービスなど居宅サービス関連	1.4
その他の教育，学習支援事業	1.0
ホテル，旅館などの宿泊業	1.0
不動産業，物品賃貸業	1.0
旅行業	1.0
その他の鉄道・バス等の運輸業，郵便業	0.8
その他の行政（一般の公務など）	0.6
その他の老人福祉・介護事業	0.6
小学校・中学校・高等学校等	0.6
老人福祉・介護事業	0.6
その他の社会保険・社会福祉・介護事業	0.4
飲食店，飲食サービス業	0.4
児童福祉施設	0.4
食品製造業	0.4
その他の医療，福祉	0.2
その他の卸売・小売業	0.2
その他の教育，学習支援業	0.2
その他の生活関連サービス業，娯楽業	0.2
公務（警察，消防，自衛隊）	0.2
航空運輸業	0.2
その他	21.6
計	100.0

C4-2. b. 職種（現職）　（N=490）（%）

その他の専門的・技術的職業	12.0
一般事務	9.8
営業の職業	9.8
販売の職業	6.9
総合職の事務	6.7
営業・販売関連事務	6.1
その他のサービスの職業	5.1
その他の介護・福祉指導の専門的職業	4.3
その他の事務	4.3
接客・給仕の職業	3.5
管理栄養士（主に栄養指導）	2.9
医療事務	1.8
情報処理技術者	1.6
介護福祉士として福祉施設指導専門員	1.4
訪問介護員，ヘルパー	1.4
その他の教育の職業	1.2
管理栄養士（販売その他）	0.8
生産・関連事務	0.8
その他サービス職業	0.6
その他の教員	0.6
その他の事務の職業	0.6
栄養士（主に調理）	0.6
管理栄養士（主に調理）	0.6
ホテルスタッフ	0.4
介護，医療に関わる一般事務	0.4
会計事務	0.4
旅行企画などの営業・販売の事務	0.4
グランドホステスなど旅客・貨物係事務	0.2
その他の販売の職業	0.2
ブライダルスタッフ	0.2
栄養教諭	0.2
商品開発	0.2
食料品検査の職業	0.2
その他	13.5
計	100.0

d 職場での地位：

1．役職についている	15.2
2．役職についていない	84.8

（N=493）

C4-3. 現在の仕事（直近１年以内を含む）は最終学歴で専攻した分野と関連がありますか。

○	関連分野である	35.7
○	関連分野でない	64.3

（N=487）

C4-4. 現在の仕事（直近１年以内を含む）の年収はどれくらいですか。もっとも近いものを１つ選んでください。

○	100万円未満	4.8
○	100万円以上150万円未満	10.5

（N=497）

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

○	150万円以上200万円未満	16.9
○	200万円以上300万円未満	35.2
○	300万円以上400万円未満	20.5
○	400万円以上500万円未満	9.1
○	500万円以上600万円未満	2.2
○	600万円以上700万円未満	0.4
○	700万円以上800万円未満	0.0
○	800万円以上900万円未満	0.0
○	900万円以上1000万円未満	0.2
○	1000万円以上1500万円未満	0.0
○	1500万円以上	0.2

C4-5. 現在の仕事（直近１年以内を含む）では，１週間あたり何時間働いていますか。（残業時間も含む）

週１～４時間	1.6	(N=492)
週５～９時間	3.9	
週10～14時間	1.6	
週15～19時間	0.2	
週20～24時間	1.2	
週25～29時間	2.6	
週30～34時間	3.0	
週35～39時間	20.5	
週40～44時間	23.2	
週45～49時間	17.7	
週50～54時間	8.7	
週55～59時間	4.9	
週60～64時間	4.9	
週65～69時間	2.0	
週70時間以上	3.9	

C4-6. 現在の仕事（直近１年以内を含む）の職場で，あなたは，自分の学歴にふさわしい評価をされている（されていた）と思いますか。以下の各設問について次の６段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		学歴にふさわしい評価をされている								学歴にふさわしい価評をされていない		わからない		
a	昇進や昇格について	5	13.3	4	19.9	3	27.4	2	14.1	1	25.4	0	0.0	(N=497)
b	賃金水準	5	14.3	4	22.9	3	30.4	2	16.1	1	16.3	0	0.0	(N=497)
c	責任の重さ	5	19.4	4	29.6	3	28.2	2	7.3	1	15.5	0	0.0	(N=496)

C4-7. あなたは現在の仕事（直近１年以内を含む）で，次のようなことがどの程度あてはまりますか。以下の各設問について，次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		あてはまる								あてはまらない		
a	本学で得た知識・技能が活用できている	5	17.4	4	22.8	3	23.8	2	16.6	1	19.4	(N=495)
b	自分の適性を活かす機会がある	5	25.5	4	34.7	3	26.9	2	7.1	1	5.9	(N=495)
c	新たなことを学ぶ機会，能力開発の機会がある	5	37.8	4	28.7	3	21.0	2	7.9	1	4.6	(N=495)
d	仕事をする上での自律性が尊重されている	5	34.4	4	32.6	3	24.7	2	5.3	1	3.0	(N=494)
e	社会に役立つ機会がある	5	38.5	4	28.9	3	24.1	2	5.7	1	2.8	(N=494)
f	職場の雰囲気がよい	5	33.1	4	31.5	3	23.6	2	8.3	1	3.4	(N=495)
g	男女差別のない処遇がなされている	5	35.8	4	29.9	3	23.2	2	7.1	1	4.0	(N=495)
h	収入や福利厚生が整っている	5	25.3	4	23.9	3	31.2	2	13.6	1	6.1	(N=494)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

C4-8. あなたは現在の仕事を総合的にみて，どの程度満足していますか。

とても満足している								とても不満である	
5	15.8	4	39.0	3	28.3	2	12.3	1	4.6

(N=495)

D. 卒業後の学習経験について

D1. 本学を卒業後，教育や職業訓練を受けたことがありますか。

○	受けたことがある	14.6	(N=567)
○	受けたことがない	85.4	

D1-SQ. D1で「受けたことがある」と答えた方にうかがいます。
複数の経験があれば，主な教育・職業訓練のプログラムについてお答えください。

D1-SQ-1：そのプログラムをどこで受けましたか。(複数回答)

□	大学院	5.0	(N=80)
□	大学	15.0	
□	短期大学	0.0	
□	専門学校	38.8	
□	公的な教育・職業訓練機関	12.5	
□	上記の学校以外での通信教育	22.5	
□	その他（具体的に　　）	16.3	

D1-SQ-2：専門分野

(プルダウンリストから選択)	※学校種別

D1-SQ-3：学習期間をお答えください。(西暦：　年～西暦　年)

開始　　(プルダウン)	※学校種別
終了（予定）(プルダウン)	※学校種別

D1-SQ-4：その教育・職業訓練を卒業・修了しましたか。

○	卒業，あるいは学習を修了した	※学校種別
○	中退，あるいは途中で断念した	
○	学習継続中（通学中）	

D1-SQ-5：進学した理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(複数回答)

□	専攻分野についてさらに勉強したかったから	※学校種別
□	別の分野について勉強したかったから	
□	教養を身につけたかったから	
□	将来の仕事に必要だから	
□	大学院卒の学歴がほしかったから	
□	免許・資格取得のため	
□	もっと学生の身分でいたかったから	
□	就職活動がうまくいかなかったから	
□	仕事で必要になったから	
□	キャリアアップのため	
□	転職等で必要になったから	
□	その他（具体的に　　）	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

（4） 労働市場や職業訓練に関する設問群（省略可）

D2-1. 教育・職業訓練や学習の際にどのような困難がありましたか。あてはまるものすべて選んでください。（複数回答）

□	職場の理解やサポートを得られなかった
□	家族等の理解やサポートを得られなかった
□	時間的制約
□	学費などの経済面
□	困難はなかった
□	その他（具体的に　　）

※学校種別

D2-2. 教育・職業訓練や学習を終えた後，就業状況はどのように変わったと思いますか。
以下の各設問について，次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。〈就業経験者のみ〉

		高くなった			変わらない				低くなった		
a	職場内での評価	5	6.2	4	20.0	3	72.3	2	0.0	1	1.5	(N=65)
b	能力を獲得した自信	5	24.2	4	39.4	3	36.4	2	0.0	1	0.0	(N=66)
c	昇進・昇給などの客観条件	5	4.6	4	20.0	3	69.2	2	3.1	1	3.1	(N=65)
d	その他（具体的に　　）	5	18.2	4	0.0	3	77.3	2	4.5	1	0.0	(N=22)

（5） 資格・検定の取得に関する設問群（省略可）

D3. 現在までに取得・合格した資格・検定等の中で，主なものを３つまでお答えください。（省略可）

				入学前	卒業時	卒業後５年未満	卒業後５年以上	
1）免許・資格・検定の名称	（分野・学校によってカスタマイズ／プルダウンリスト）	→	取得・合格の時期	○ 8.1	○ 55.4	○ 24.3	○ 12.2	(N=74)
2）免許・資格・検定の名称	（分野・学校によってカスタマイズ／プルダウンリスト）	→	取得・合格の時期	○ 4.1	○ 34.7	○ 53.1	○ 8.2	(N=49)
3）免許・資格・検定の名称	（分野・学校によってカスタマイズ／プルダウンリスト）	→	取得・合格の時期	○ 3.6	○ 50.0	○ 39.3	○ 7.1	(N=28)

D3. 資格プルダウンリスト（各校カスタマイズ）

	A 校	B 校	C 校	D 校	E 校
1	高等学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状	上級情報処理士	管理栄養士	社会福祉士
2	中学校教諭一種免許状	中学校教諭一種免許状	ウェブデザイン実務士	栄養士	精神保健福祉士
3	図書館司書	日本語教員	社会調査士	社会福祉士	介護福祉士
4	国内旅行業務取扱管理者	学芸員	社会調査実務士	精神保健福祉士	保育士
5	販売士	英語関連資格（TOEIC, TOEFL, 英検など）	高等学校教諭一種免許状	介護福祉士	高等学校教諭一種免許状
6	認定心理士	基本情報技術者	中学校教諭一種免許状	保育士	中学校教諭一種免許状
7	英語関連資格（TOEIC, TOEFL, 英検など）	IT パスポート	その他（具体的に　　）	国内旅行業務取扱管理者	その他（具体的に　　）
8	観光ビジネス実務士	日本語検定		総合旅行業務取扱管理者	
9	秘書士	認定心理士		高等学校教諭一種免許状	
10	情報処理士	日商簿記検定１級		中学校教諭一種免許状	
11	プレゼンテーション実務士	その他（具体的に　　）		その他（具体的に　　）	
12	その他（具体的に　　）				

E. 大学などで獲得した能力の活用について

E1. 大学などで獲得した能力についてうかがいます。

E1-1. あなたは，本学が卒業時までに獲得することを期待していた次のような知識・技能・能力を現在どの程度身につけていますか。
以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		［共通項目］（※分野別項目は別表参照）	（A）現在の獲得水準 十分身につけている								ほとんど身につけていない		
基礎知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	15.6	4	29.8	3	40.7	2	10.2	1	3.8	(N=551)
	b	高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	9.8	4	26.0	3	45.9	2	13.6	1	4.7	(N=551)
専門的な知識	c	専攻分野に直接に関わる専門知識	5	9.3	4	30.8	3	37.0	2	16.9	1	6.0	(N=549)
	d	専攻分野の周辺領域の専門知識	5	6.0	4	27.5	3	46.9	2	15.5	1	4.2	(N=550)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

専門的な技能	e	業務に直接に関わる技能	5	21.3	4 41.0	3 26.2	2 9.5	1 2.0	(N=549)
	f	専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	12.0	4 30.9	3 41.5	2 12.4	1 3.3	(N=550)
基礎的，社会的な技能	g	仕事の段取りをデザインする能力	5	20.4	4 37.1	3 31.5	2 8.5	1 2.5	(N=550)
	h	職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	16.6	4 39.9	3 32.1	2 9.1	1 2.4	(N=549)
	i	顧客や外部とのコミュニケーション	5	19.4	4 33.6	3 31.6	2 11.0	1 4.4	(N=547)
	j	生涯学び続ける力	5	18.8	4 36.1	3 34.6	2 8.2	1 2.4	(N=549)
	k	論理的思考力	5	11.8	4 33.5	3 40.7	2 11.8	1 2.2	(N=550)
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	9.8	4 28.2	3 40.0	2 15.5	1 6.5	(N=550)
統合的な学習知識と創造的思考力	m	批判的・創造的思考力	5	9.5	4 26.1	3 43.5	2 16.1	1 4.8	(N=547)
	n	知識を横断的に活用する力	5	7.9	4 28.9	3 47.3	2 12.3	1 3.5	(N=543)
グローバルな能力	o	多文化，異文化に関する知識の理解に関する能力	5	8.8	4 21.7	3 36.5	2 21.5	1 11.5	(N=548)
	p	外国語で書いたり話したりする技能	5	5.3	4 8.4	3 22.2	2 28.9	1 35.3	(N=550)

E1-2. また，あなたは現在の仕事では，そのような知識・技能・能力がどの程度必要とされていますか。

			（B）現在の仕事での必要性						
			とても必要である					まったく必要でない	
基礎知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	21.4	4 25.6	3 33.0	2 14.0	1 6.0	(N=285)
	b	高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	12.0	4 21.9	3 40.3	2 19.1	1 6.7	(N=283)
専門的な知識	c	専攻分野に直接に関わる専門知識	5	27.7	4 26.0	3 20.7	2 15.4	1 10.2	(N=285)
	d	専攻分野の周辺領域の専門知識	5	15.5	4 23.0	3 34.6	2 13.1	1 13.8	(N=283)
専門的な技能	e	業務に直接に関わる技能	5	43.7	4 28.5	3 13.7	2 4.9	1 9.2	(N=284)
	f	専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	44.2	4 29.5	3 16.1	2 4.9	1 5.3	(N=285)
基礎的，社会的な技能	g	仕事の段取りをデザインする能力	5	60.2	4 24.6	3 11.6	2 2.5	1 1.1	(N=284)
	h	職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	55.0	4 27.7	3 10.3	2 3.2	1 3.9	(N=282)
	i	顧客や外部とのコミュニケーション	5	56.3	4 25.0	3 10.6	2 3.5	1 4.6	(N=284)
	j	生涯学び続ける力	5	46.3	4 26.7	3 16.8	2 5.6	1 4.6	(N=285)
	k	論理的思考力	5	36.1	4 30.5	3 22.8	2 6.0	1 4.6	(N=285)
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	37.5	4 29.8	3 21.8	2 5.3	1 5.6	(N=285)
統合的な学習知識と創造的思考力	m	批判的・創造的思考力	5	33.3	4 31.9	3 22.1	2 7.4	1 5.3	(N=285)
	n	知識を横断的に活用する力	5	32.4	4 29.9	3 24.3	2 7.4	1 6.0	(N=284)
グローバルな能力	o	多文化，異文化に関する知識の理解に関する能力	5	16.3	4 15.5	3 26.1	2 18.4	1 23.7	(N=283)
	p	外国語で書いたり話したりする技能	5	11.6	4 9.9	3 19.0	2 22.2	1 37.3	(N=284)

E1-2. （B’：また，あなたは現在の生活で，そのような知識・技能・能力をどの程度活用していますか。）
以下の各設問について次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

			（B’）現在の生活での活用度						
			よく使っている					まったく使っていない	
基礎知識	a	高校卒業程度の基礎的な知識	5	16.7	4 12.5	3 45.8	2 16.7	1 8.3	(N=24)
	b	高校卒業までの教科・科目別の基礎知識	5	16.0	4 12.0	3 36.0	2 32.0	1 4.0	(N=25)
専門的な知識	c	専攻分野に直接に関わる専門知識	5	20.0	4 20.0	3 24.0	2 24.0	1 12.0	(N=25)
	d	専攻分野の周辺領域の専門知識	5	24.0	4 8.0	3 40.0	2 16.0	1 12.0	(N=25)
専門的な技能	e	業務に直接に関わる技能	5	36.0	4 28.0	3 28.0	2 8.0	1 0.0	(N=25)
	f	専門分野で課題を発見し問題解決する能力	5	12.0	4 36.0	3 40.0	2 4.0	1 8.0	(N=25)
基礎的，社会的な技能	g	仕事の段取りをデザインする能力	5	20.0	4 32.0	3 36.0	2 12.0	1 0.0	(N=25)
	h	職場の中でのチームワークやリーダーシップ	5	12.0	4 44.0	3 32.0	2 12.0	1 0.0	(N=25)
	i	顧客や外部とのコミュニケーション	5	20.0	4 32.0	3 36.0	2 12.0	1 0.0	(N=25)
	j	生涯学び続ける力	5	24.0	4 36.0	3 32.0	2 4.0	1 4.0	(N=25)
	k	論理的思考力	5	8.3	4 50.0	3 37.5	2 4.2	1 0.0	(N=24)
	l	プレッシャーの中で活躍する力	5	20.0	4 28.0	3 40.0	2 8.0	1 4.0	(N=25)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

統合的な学習知識と創造的思考力	m	批判的・創造的思考力	5 12.0	4 32.0	3 36.0	2 12.0	1 8.0	(N=25)
	n	知識を横断的に活用する力	5 28.0	4 16.0	3 44.0	2 8.0	1 4.0	(N=25)
グローバルな能力	o	多文化，異文化に関する知識の理解に関する能力	5 12.0	4 16.0	3 40.0	2 8.0	1 24.0	(N=25)
	p	外国語で書いたり話したりする技能	5 20.0	4 8.0	3 16.0	2 20.0	1 36.0	(N=25)

E2. E1で回答した能力をあなたはどの場面で身につけましたか。それぞれあてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

(N=672)		家庭や小中高(本学入学前)	在学中							卒業後		
			座学や理論的な授業	実習・演習などの授業	1・2年次の教養教育	インターンシップなどの学外実習	卒論・卒業研究	部活・サークル活動	学外でのアルバイト	職場での経験や訓練	自主学習，自己啓発	その他の社会的な経験
a	基礎的な知識	60.1	20.1	10.7	21.6	4.2	6.7	5.5	11.8	16.7	10.1	8.6
b	専門的な知識	10.0	31.3	30.8	21.1	8.2	21.0	4.0	7.4	31.3	16.2	11.0
c	専門的な技能	7.7	17.0	33.2	15.6	8.2	14.0	6.0	9.5	36.3	16.5	11.0
d	基礎的・社会的な技能	23.7	11.2	14.1	13.4	9.4	8.6	16.7	32.4	38.5	13.5	14.9
e	統合的な学習知識と創造的思考力	22.8	18.0	20.7	13.2	6.4	15.2	11.2	14.4	31.1	12.8	13.8
f	グローバルな能力	20.7	14.3	9.7	13.4	7.3	6.5	6.7	9.1	14.6	10.9	16.5

E3. 全体として，あなたはいろいろな能力を，どこでどのくらい身につけたと思いますか。現在の能力を100％とした場合，次の３つの段階で，それぞれもっとも近いと思う数値を選んでください。

a 家庭や小中高校までに	(プルダウン：10％単位)
b 本学の在学中に	(プルダウン：10％単位)
c 本学を卒業後	(プルダウン：10％単位)

獲得割合	a. 家庭や小中高校までに	b. 本学の在学中に	c. 本学を卒業後
10%	9.2	9.3	15.5
20%	16.1	23.8	20.3
30%	25.9	35.1	22.6
40%	16.3	19.1	18.8
50%	17.0	8.6	13.4
60%	7.4	2.2	5.8
70%	5.9	1.1	2.4
80%	1.7	0.7	0.6
90%	0.4	0.0	0.0
100%	0.2	0.0	0.6
計	100.0	100.0	100.0
n	*541*	*538*	*536*

F. これまでの生活や家族について

F1. 入学前の経験についてうかがいます。

F1-1. 中学３年生の時のあなたの成績はどうでしたか。次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

	上の方				下の方	
あなたの成績	5 17.0	4 31.1	3 36.9	2 9.6	1 5.4	(N=540)

F1-2-1. 高校で在籍した学科はどこですか。あてはまるものを１つ選んでください。

○	普通科	83.6
○	専門学科	9.2
○	総合学科	3.5
○	その他（具体的に）	3.7
○	高校に在籍したことはない	0.0

(N=544)

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F1-2-2. あなたは高校卒業時までに高校卒業程度の学習内容を十分理解していましたか。次の５段階の中でもっとも近いものを１つ選んでください。

学習内容を十分理解していた									学習内容はよく分からないままだった	(N=537)
5	8.6	4	31.1	3	42.6	2	14.2	1	3.5	

F1-3. 本学の入学前に他の機関等での高等教育での学習の経験がありますか。あてはまるものを１つ選んでください。複数の機関で学習経験がある方は，主なもの１つについてお答えください。

○	短期大学	0.6	(N=13)
○	専門学校	1.1	
○	高等専門学校	0.9	
○	大学	1.1	
○	大学院	0.0	
○	その他（具体的に：　　）	0.7	
○	なし	95.5	

F1-3-SQ. 専門分野は何ですか。もっともあてはまるものを１つ選んでください。

専門分野：（プルダウンリストから選択）

F1-3-SQ. 専門分野　(N=22)（%）

普通・一般教育プログラム	13.6
農業，農学，食品加工・製造，獣医・畜産	9.1
生命科学，理学，コンピュータ	9.1
人文学，芸術，デザイン	13.6
社会科学，ビジネス，法律	4.5
教育・社会福祉	22.7
医療・保健	9.1
その他	18.2
計	100.0

F1-4. 本学の入学前に仕事に就いた経験がありますか。

○	1. ある	2.4	(N=542)
○	2. なし	97.6	

F1-4-SQ. 就業していた期間の合計：

６ヶ月未満	30.8	(N=13)
６ヶ月～１年未満	23.1	
１年	0.0	
２年	23.1	
３年	7.7	
４年	0.0	
５年	0.0	
６～10年未満	15.4	
10年以上	0.0	

F1-5. 本学への志願時に，他にも進学を希望していた学校がありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

□	本学が第一志望	41.6	(N=531)
□	他の四年制大学	56.1	
□	短期大学	1.1	
□	専門学校	3.8	
□	その他（具体的に：　　）	1.5	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F1-6. どのような入学試験を受けて，あなたは本学へ入学しましたか。あてはまるものを１つ選んでください。

○	一般入試	36.2	(N=544)
○	センター試験利用型入試	14.2	
○	推薦入試	35.8	
○	AO 入試	10.8	
○	社会人入試	0.2	
○	編入学入試	1.3	
○	その他（帰国子女入試・留学生入試など）	1.5	

(3) 職業・キャリア意識の形成に関する設問群（省略可）

F1-7. 本学への志願時に，他にも進学を希望していた学部・学科・分野がありましたか。あてはまるものを１つ選んでください。

○	本学で卒業した学科・分野が第一志望	71.1	(N=501)
○	他の学科・分野が第一志望	13.4	
○	学科・分野に特別なこだわりはなかった	15.6	

F2. 本学在学中から現在までの生活や家族についてうかがいます。

F2-1. 本学入学にあたって，ご家族の経済的な状況はどうでしたか。以下の選択肢の中からもっともあてはまるものを１つ選んでください。

○	経済的に好きな進学先を選べる状況だった	42.4	(N=542)
○	なるべく学費などがかからない進路を選ぶ必要があった	35.8	
○	経済的には進学は厳しかった	11.3	
○	家族の経済状況はよく知らなかった	10.5	

F2-2. 本学在学中の学費等はどう支払いましたか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

□	主に保護者の負担で	77.8	(N=541)
□	主にアルバイトで	10.5	
□	公的な奨学金や教育ローンで	29.0	
□	本学の学費支援や奨学金で	14.6	
□	その他（具体的に：　　）	1.1	

F2-3. あなたは，これまでどこにお住まいでしたか。本学入学前と現在の状況について，それぞれあてはまるものを１つ選んでください。

入学前は本学から公共交通機関で

○	片道30分以内のところ（同じ都道府県内）	21.5	(N=544)
○	片道30分以内のところ（別の都道府県）	1.3	
○	片道１時間程度のところ（同じ都道府県内）	35.5	
○	片道１時間程度のところ（別の都道府県）	9.6	
○	片道２時間以上のところ（同じ都道府県内）	11.2	
○	片道２時間以上のところ（別の都道府県）	21.0	

現在は本学から公共交通機関で

○	片道30分以内のところ（同じ都道府県内）	19.0	(N=495)
○	片道30分以内のところ（別の都道府県）	1.2	
○	片道１時間程度のところ（同じ都道府県内）	36.0	
○	片道１時間程度のところ（別の都道府県）	7.7	
○	片道２時間以上のところ（同じ都道府県内）	9.3	
○	片道２時間以上のところ（別の都道府県）	26.9	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

F2-4. あなたは，これまで誰と生活していましたか。本学在学中と現在の状況について，それぞれあてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

本学在学中 （N=542）

□	配偶者・パートナー	2.4
□	親	65.7
□	子ども	0.7
□	一人で	33.2
□	その他（具体的に：　　）	4.8

現在 （N=542）

□	配偶者・パートナー	25.3
□	親	54.2
□	子ども	10.5
□	一人で	22.3
□	その他（具体的に：　　）	2.6

F2-5. あなたの保護者の最終学歴は以下のどれにあたりますか。あてはまるものを１つ選んでください。

父 （N=538）

○	中卒	6.7
○	高卒	41.8
○	短大・専門学校・高専卒	9.7
○	大学卒	38.1
○	大学院卒（修士・博士課程）	2.0
○	その他（具体的に　　）	1.7

母 （N=540）

○	中卒	4.4
○	高卒	46.1
○	短大・専門学校・高専卒	35.9
○	大学卒	12.8
○	大学院卒（修士・博士課程）	0.2
○	その他（具体的に　　）	0.6

F2-6. あなたは現在，普段の生活で，次のような行動を積極的にしていますか。
次の各設問の活動について，次の５段階の中でもっともあてはまるものを１つ選んでください。

		積極的にしている				全くしていない	
a	ニュースの視聴（テレビ，ラジオ，インターネット等）	5 42.9	4 31.5	3 18.6	2 5.3	1 1.7	（N=543）
b	新聞を読む	5 16.8	4 17.5	3 22.9	2 17.2	1 25.6	（N=542）
c	ボランティア活動	5 2.8	4 4.8	3 12.8	2 18.1	1 61.5	（N=540）
d	選挙の投票	5 43.4	4 18.1	3 14.8	2 12.2	1 11.6	（N=542）
e	友人との交流	5 37.6	4 26.6	3 24.5	2 7.4	1 3.9	（N=542）
f	趣味やスポーツの活動	5 31.9	4 25.6	3 23.5	2 13.1	1 5.9	（N=540）
g	地域活動（自治会・町内会・PTA 活動を含む）	5 4.1	4 6.3	3 16.3	2 18.3	1 55.0	（N=540）

G. これまでの生活や家族について

G1. 本学での在学中の経験は，次の各設問についてどれくらい重要でしたか。次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

		とても重要である				全く重要でない	
a	就職先を見つける上で	5 27.2	4 30.0	3 24.8	2 8.5	1 9.6	（N=544）
b	仕事に必要な基礎を身につける上で	5 24.2	4 29.9	3 27.5	2 11.1	1 7.2	（N=541）
c	仕事で必要な学習を続けていく上で	5 19.3	4 29.6	3 32.8	2 9.6	1 8.7	（N=540）
d	将来のキャリアを展望する上で	5 19.6	4 30.6	3 32.7	2 9.8	1 7.4	（N=542）
e	人格を形成していく上で	5 31.6	4 35.8	3 24.4	2 5.3	1 2.8	（N=544）

G2. もし仮に高校卒業後の進路選択をやり直せるとすれば，どのような進路を選びますか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。（複数回答）

□	同じように本学を選びたい	54.5	（N=538）
□	他の四年制大学に進学したい	48.0	
□	専門学校に進学したい	12.6	
□	短期大学に進学したい	1.1	
□	就職，自営など仕事をしたい	5.6	
□	その他（　　）	2.2	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

G2-SQ.　どのような専門分野を選びますか。

○	本学で学んだのと同じ専門分野がよい	49.1
○	本学で学んだこととは違うが，現在の仕事に合うような専門分野がよい	16.6
○	本学で学んだことや今の仕事とは関係しない，別の専門分野がよい	28.7
○	よくわからない	5.7

(N=495)

G3. 現在でも本学の同窓生と交流がありますか。次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

頻繁にある		月に１回程度		年に１回程度		ごくまれに		全くない	
5	15.6	4	27.4	3	30.3	2	16.4	1	10.3

(N=409)

G4. 総合的に振り返ってみて，本学に対する満足度はどうでしたか。
次の５段階の中であてはまるものを１つ選んでください。

とても満足している								とても不満である	
5	29.7	4	38.7	3	24.1	2	6.8	1	0.7

(N=411)

G5. 本学の教育改善についてご意見があれば記入ください。

以上でアンケート調査は終わりです。ご協力ありがとうございました。

今後，本学から様々な情報提供をしたいと思っています。
連絡先を教えていただける方は，入力をお願いします。
お教えいただいた連絡先は，本学に関するお知らせ等以外で使用することはございません。

お名前	
都道府県	(47都道府県プルダウンリスト)
住所	
電話番号	
メールアドレス	
郵便番号	

Copyright©2013 Keiichi Yoshimoto, All Rights Reserved.

平成25～29年度 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ａ）
研究成果報告書（課題番号　25245077）
研究代表者：吉 本 圭 一（九州大学第三段階教育研究センター長・主幹教授）

九州大学「高等教育と学位・資格研究会」ワーキングペーパーシリーズ　No.3

大学教育における職業統合的学習の社会的効用

── IR 枠組による「大学の学習成果と卒業生のキャリア形成に関する調査」報告書 ──

発行年月日　2016年２月２日
発行・編集　吉　本　圭　一
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学第三段階教育研究センター
電話・FAX　092-642-3126
印刷・製本　城島印刷株式会社

本書の複写・転載など著作権に関わる行為は、事前に研究代表の許諾なき場合、これを禁じます。